

# 1988年 新年聖会記録

( 1988年1月1日—5日 )  
毎日 10時, 14時, 19時  
講師 戸畑教会牧師 伊規須太郎 )

基督伝道隊 戸畑教会

一九八八年標語

㊦

神は そのひとり子を 賜わった ほどに  
この世を 愛して下さった それは 御子を 信じる者が  
ひとりも 滅びないで 永遠の命を 得るためである

(ヨハネ 三の一六)

㊧

見よ 今は 恵みの時 見よ 今は 救の日である

(二コリント六の二)

㊨

主に お会いすることの できるうちに 主を 尋ねよ  
近く おられるうちに 呼び 求めよ

(イザヤ 五五の六)

①命を捨てて下さった御愛  
(御子を信ずる者に永遠の命の自覚を)

③命を選べ  
(悪人の死を喜ばない)

⑤人の命は持ち物にはよ  
らない(全世界を儲けて  
も命を損したら)

②信ずる者は裁かれない  
(裁きの恐ろしさ/あがな  
いの尊さ/許しの嬉しさ)

⑥信仰によって生きる  
(恵みの御霊を侮る者  
は重刑に価する)

④安息に入る努力  
(恵みの御座にはば  
からず近づこう)

⑩神の和解を受けよ  
(全能者が和解を願うとは)

⑦神の恵みをいたずらに  
(今心にとめねば押し流  
されてしまう)

①⑨  
神はそのひとり子を賜

愛して下さった それは

⑥  
ひとりも滅びないで永

②⑥⑩

④⑧  
今は恵みの時 見

⑪⑦見よ

主にお会いすることので

近くおられるうちに呼び

⑭

⑭本心で帰るなら  
(憐れみと許しを豊

⑨十字架の事実を仰げ  
(誰があなたがたを惑わしたのか)

⑫神の奥義なるキリスト  
(知恵と知識との一切の  
宝が隠されている)

② なたほどに この世を

罪子を信じる者が

⑮信仰の良き戦いを戦え  
(永遠の命を獲得せよ)

③⑮ 命を得るためである

(ヨハネ 3:16)

⑩真理を行っている者は  
光に来る(神を恐れ己を知  
る事が第一)

④ 今は救の日である

(2コリント 6:2)

⑧今がその時  
(迅速に従うには  
準備が必要)

⑬ 主を尋ねよ

⑬今主を尋ねよ  
(必ず御自分を現し  
て下さる)

求めよ

(イザヤ 55:6)

# 戸畑教会新年聖会 1988 (1月1日-5日)

①②③……⑮ 集会順序

かに)

**1988 聖会全体図解**  
 ★各集会主題（副題）と標語との関係

ページ

		2
①	<u>命を捨てて下さった御愛</u> 御子を信する者に永遠の命の自覚を	7
②	<u>信ずる者は裁かれない</u> 裁きの恐ろしさ／あがないの尊さ／許しの嬉しさ	23
③	<u>命を選べ</u> 悪人の死を喜ばない	39
④	<u>安息に入る努力</u> 恵みの御座にはばかりせず近づこう	53
⑤	<u>人の命は持ち物にはよらない</u> 全世界を儲けても命を損したら	71
⑥	<u>信仰によって生きる</u> 恵みの御霊を侮る者は重刑に価する	83
⑦	<u>神の恵みをいたずらに</u> 今、心にとめねば押し流されてしまう	99

- ⑧ 今がその時 ..... 1 1 5  
迅速に従うには準備が必要
- ⑨ 十字架の事実を仰げ ..... 1 2 5  
誰があなたがたを惑わしたのか
- ⑩ 真理を行っている者は光に来る  
神を恐れ己を知る事が第一 ..... 1 3 5
- ⑪ 神の和解を受けよ ..... 1 4 5  
全能者が和解を願うとは
- ⑫ 神の奥義なるキリスト ..... 1 5 7  
知恵と知識との一切の宝が隠されている
- ⑬ 今主を尋ねよ ..... 1 6 5  
必ず御自分を現して下さる
- ⑭ 本心で帰るなら ..... 1 7 7  
憐れみと許しを豊かに
- ⑮ 信仰の良き戦いを戦え ..... 1 9 1  
永遠の命を獲得せよ  
(ごあんない「戸畑教会について」) ..... 200

## 第一章

### 命を捨てて下さった御愛 (御子を信ずる者に永遠の命の自覚を)

【もっと身近、もっと神秘】	9
【最高のあかし】	10
【この世を愛された背後には】	11
【どんなに大きな愛を賜った事か】	12
【恐るべき滅びを免れる】	13
【他に言葉のない「永遠の命」】	16
【生かされていても自覚のなかった者】	16
【「ため」とは他の目的ではない】	17
【やっぱり父だったか】	18
【神様が私たちに凝っておられる】	18
【乗り易い滅びの流れ】	19
【神様の嗣業とされる！】	20
【主に似る者となる】	21
【そのまま受ける事が最大の熱心】	21

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネ3:16）

◆このヨハネによる福音書3:16は、聖書の山であると言われます。私たちは聖書に重い軽いはない、いずれの御言葉も神様自身を開いて下さる命の言葉であると思いますが、ここを読み、ひと言ずつ味わいますと――神様が私たちの上に非常な力をもって臨んでおられる事をひしひしと感じる訳です。

イザヤが（イザヤ書6章で）体験しました神様の臨在――すべてのものの中に満ち満ちて、すべてのものを支配していらっしゃる方を今ここに感じる訳です。

私たちの上にある天も、あるいは更に遠く広く宇宙のすべてをも支配していらっしゃる方、目に見える世界だけではなく、見えない世界をもすべてご支配になっている方が、今ここにおられる。この私の肉体も魂も支配していらっしゃる方であると覚える訳です。

クリスマスの時によく読まれます、ルカによる福音書1章で、マリヤが神様の御使から受胎告知を受けます。「あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい――いと高き者の子と、となえられるでしょう」という神様の御言葉を聞きました時に、彼女は「どうして――私がおめでとうと言われる筋合いはない。大工の許嫁であるし、第一まだ結婚していません」と言っていました。

しかし御使ガブリエルは、「主があなたと共にいて下さる。神共にいます事は最も幸な事です――それはあなたにとって理解出来ないことかも知れないが、聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう」と言っています。

そこに私はいつも注目する訳です。「いと高き者の力があなたをおおう――」私たちは人間の作ったものの中に生き、人間の世界だけを見ていれば、何も考えなくても生きていかれるような環境を作り出しました。ところが神様は遥かに高い所におられて、私共をおおっていらっしゃる。また、一方において私共に身近な所、私共のずっと奥底において、私たちを支えていらっしゃるとしみじみ感じた訳です。



もっと身近な所で、もっと神秘的な神様の手が私の上に動いている——私は驚かなければならないと思いました。

【最高のあかし】 ◆「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」——神様が私たちに対して、ご自分のひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった——神様が「ほど」と言われているのは、それ以上に表現が出来ない、誰もその程度を計る事が出来ないきわめて大きな神様の御愛だからであります。

自分が子供を失った悲しみは、自分だけしか分からないと思います。確かにそうですが、今度は自分が他の人の悩み苦しみに届くことも出来ません。

ですから人間が神様の御愛をおしはかる事は到底できません。自分のひとり子を投げ出す事は、自分自身を捨てることと同じです。——神様がご自分を捨ててしまったら大変であります。

アメリカの大統領は、どんな時でも核の発射ボタン（特殊なカバン）を（秘書官が）持ち歩いていると言われます。大統領に事故が起これば、憲法の規定に従って、副大統領がその時間から大統領の職務を執行する。更に副大統領に事故があった時は上院議長ですか？順番が決まっている——それは国家として最高意思決定をする人が、一刻も欠ける事は出来ないからであります。

万物の主権者である神様がご自分を捨ててしまわれたら、どんな事態が起こるか分かりません。神様はすべての法則を定める基本原則をお作りになった方ですから、すべては覆ってしまう——混乱と言うよりは消滅してしまうかも知れません。

ですから神様が、ご自分を捨てる以上の痛みをのりこえて、かけがいのない御子イエス・キリストを、私たちの為に賜わって、神様のご愛を証された——これほど大きな証はありません。

人が、友達困った時に助ける、悲しんだ時に一緒に泣く——色々な事をすることも知れない。しかし、その友のために命を捨てるよりも大きな愛はない、と言われていますが、人間の友人ではない、神様が私たちの為にご自分の命を捨てる、それ以上の大きな犠牲を払って下さったという事は、何よりも大きな御愛ではないでしょうか。今朝も、神様が私に対して、抱いていらっしやる御思いをひ

しひしと感じる訳であります。

しかし悲しいことに人間は、物事をそのように感じる事が出来ないのです。肉体的な感覚でも随分いい加減なものです、神様の御愛を感じる感覚は、はなはだあやしげなものだと思うのです。

◆神様が私たちに対してどんなに大きな愛を注いで下さったか——まず、「この世を愛して下さった」とおっしゃる。

この世と言いますと、私たちの地球は宇宙の中で大変小さな存在です。宇宙の果ては150億光年（光が150億年かかって到達する距離）と言われていますが、その先が無いとは言えません。私たちから最も近い所にある恒星（太陽）とその家族は主なものだけで9つ（水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星、冥王星）あります。

ところが太陽の所属している我々の銀河系には、太陽と同程度以上の恒星が、2000億個あり、それぞれに子や孫がたくさんくっついていきますから、総数では何千億あるか分からない。そういう銀河が宇宙には何千億あるか分からないのですから、気が遠くなるようであります。

神様はそれらをひと言をもってお造りになり、格別なご意思をもって、私たちの為に地球上にこういう環境を造り、私たちをお造りになりました。学者は地球の位置（太陽からの距離）が大変幸運だったと説明しますが、神様は「いたずらにこれ（地球）を創造されず、人のすみかに造られた」と書いてあります。そして私たち人間を神の形にお造りになって、この地上に置いて下さいました。

私たちは自分の事を「こんなへてこな人間みたいなもの、その端くれの私がこんな地球の隅の、日本の端に住んで、こんなつまらない人間で、人とどうもなじめない。何をしても人から馬鹿にされてみたり、本当につまらない人間、これも出来ない、あれも出来ない、半端な人間だ」などと考えますが、神様の御愛は、今、記しましたように、それよりも前の段階があるのです。

氷山の一角という事があります。氷山は頭がちょっと出ていると、その下に10倍の大きなものが隠れていると申しますが、神様が私たちを今、こうしてここに生かして下さっていることの陰には、果てしなく大きい神様の御思いがあるとい

う事を教えられた訳です。

そのように私たちを愛して下さったのですから、決して気紛れではありません。気分が良いから今日は教会に行こう、何か神様から愛されたような気がする。今日は失敗して悲しくて、顔を上げる事も出来ないから、神様から捨てられたかも知れない。そんなに考えますが、神様のほうは決して気紛れで捨てたり拾ったりする方ではありません。「ひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」方は、変わらない御真実を持って私たちを支えておられる訳であります。

◆それ程のご愛は、どういう形で私たちの内にやって来ているかと言いますと、

1ヨハネ3:1/3 朗読。ここに神様のご愛はどんなに大きなものであるかが記されています。「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、すでに神の子なのである」——物理的に言いますが、宇宙を創造された神様と、僅か2メートル足らずの人間は、どれ程違うか分かりません。

私たち人間の目はちょっと小さいものは見ることが出来ませんが、大きいものも又見えないのです。自分の物差しに当てはまりませんので「こんなものはない」と言ったり、「分からない」と言ったりします。もし神様が私たちを、「こんな小さな者、何の役にも立たない者、こんなものは関係がない——踏み潰してしまえ」と無視されたら、私たちは到底生きている事は出来ないと思います。

ところが無視するどころか、踏み潰すどころか、神様は私たちを「ご自分の子供」と呼んで下さったのです。私たちがもし蟻——蟻の体も私たちとそんなに違いません。3桁ぐらいしか違わない——蟻に向かって「あなたは私の子供だ」と言ったら、おかしいことでもあります。そんな事は誰も言いません。しかし神様は私たちと何十桁も、あるいはそれ以上に無限桁ほどに違われる創造者でありながら、私たちを「神の子」と呼んで下さった。

人間は言い放して無責任なことをしますが、神様が呼ばれたら実を伴うものです。すぐあとには「わたしたちは、すでに神の子なのである」と言われています。私たちは事実神様の子供とされました。

ご自分のひとり子イエス・キリストを捨てて、私たちを自分の子と定めて下さ

ったと言うことは、私たちにとってあまりに偉大な事ですから、到底自分の頭で理解する事は出来ない——そこで私たちはしばしば冷ややかです。「なに、そんなこと、架空のことだ」と思います。これは聖書の中にも色々な例があります。

ヤコブの子供のヨセフは不思議な導きでエジプトの総理大臣になり、予め食糧を備蓄して、7年の大飢饉から国を救いました。カナン（こんにちのパレスチナ）に住んでいた父ヤコブも飢饉で苦しんでいましたが、「エジプトには食物がある。しかもヨセフが総理大臣になっている」と聞かされても冷ややかでした。

「そうか」と暫くは知らん顔をしていたのです。ところがヨセフの事を詳しく聞き、彼が自分を迎える為に送った乗り物を見て、ヤコブは目が覚め、「よし、それでは行って見よう」と言うことになり、ヤコブとその家族70人はエジプトに下りました。

神様からあまりに偉大な事を聞かされるものですから、私たちは心が冷ややかであります。「世が知らなかった」と言われている「世」とは、世の中の人たちが知らないだけではなくて、私たちの中にある世的な考え方は、これを否定します。「そんな事があるだろうか。昔のイスラエル民族はそうだったかも知れないが、今の私は神様と関係がないのではなかろうか。私ははたして子供なのだろうか。子供なら一体どうなるのだろうか」と色々と言はれる訳ですが、神様は先刻ありましたように、「いと高きものの力なんじをおおわん」とおっしゃる。

人間の不信も、世の常識も、吹き飛ばして、「私はあなたを神の子と呼んだ（すでに神の子である）。なぜならば、私はその為に自分の命以上のイエス・キリストを捨てて、あなたがたを私のものとしてあがなったからだ」と宣言しておられる訳であります。

◆「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネ3:16）御子を信じるとは、イエス・キリストを信じる事です。それだけではなく、イエス・キリストをお遣わしになった父なる神様をも信じることであります。私たちが神様を受け入れ信じますと、ひとりも滅びることなく、永遠の命を与えられると言われるのです。

【恐るべき滅びを免れる】

私はここで何段階にも亙って、神様の救いが記されていると思いました。

①「ひとりも滅びない」とは、完全を意味します。質の面でも、量の面でも完全、率の面でも完全であります。使徒行伝を読みますと、「イエス・キリストを信じる者は、ことごとく救われる」と書いてあります。

「滅び」と言うと、私たちは火が降って来て焼かれて、滅びてしまう——戦争の時に焼夷弾によって、何もかも焼けて、たくさんの人が亡くなりました——そういうものを滅びと考えますが、神様の「滅び」はもっと恐ろしいものであります。物が焼かれたならば、また建てる事が出来ます。しかし神様の「滅び」は永遠の滅びであり、永久に忘れられ消滅するものです。

人間は「焼かれてしまえば、何も分からなくなるから、滅びなんか怖い事はない」と考えます。しかしそれは世の考えであって、神様の滅びは決して有限ではありません。この世の懲役刑を受けても、その期間を務め上げれば、「お前は法律の定める所に従って刑期が終了。釈放します、帰りなさい」と言うことになります。しかし神様の「滅び」は決してそうならない訳です。

焼かれても、焼き尽くされず、灰にならない。いつまでも苦しみ、いつまでも悔いなければなりません。また、別の言い方をしますと、永遠に忘れられる——それが神様のおっしゃる「滅び」です。

ところが「御子を信じるものがひとりも滅びない」と言いますと、その中に落ちないという事です。それが第一の救いです。これはイスラエルの民がエジプトから脱出するとき、エジプト中に様々な災いが加えられる中で、彼らは守られました。その災いがイスラエルの民には加えられませんでした。最後に、エジプト中の初子が全部殺された晩に、神の（滅ぼす）使は「小羊を殺して、その血を塗った家」の前を通り過ぎ、イスラエルの民は滅びをまぬがれた訳です。

神様の救は、もともと何か有る所へプラスする——今回のボーナスの平均は10万円だが、あなたは特別に働いたから5万円プラスしよう——そういう救ではないのです。たとえば運転免許の試験を受けますと、一旦停止違反をした、あるいは左折の信号を出し忘れた、左右確認が駄目だったとか、S字のコースで落輪したとか…失敗をしますと、マイナス5点、マイナス3点、マイナス2点…

とどンドン減点されて（100点満点から始まって）70点以下になるとアウトで、「もうよろしい。また練習して出てきなさい」という事になります。

神様が私たちを救われるのは、プラスするのではなくて、その減点をまぬがれさせて下さるのです。エジプト中の家という家に入って、神の使が「えい」と初子を殺す、人間の初めに生まれた子供を第一に、家畜の子供に至るまで、すべての初子という初子を殺してしまった——恐ろしい事でありました。しかしその夜、入口の鴨居と柱に小羊の血を塗っておいた家の前を、神の使が通り過ぎられましたから、国中が減びた中で残された訳です。

印判というものは、字でない所を彫り込みます。そうすると残った所が文字になって、インクが転写され字が出来ます。ある種の印判は、エッチング（化学的腐蝕）によって、文字でない部分を溶かして凹ませる方法で作るそうです。

それと同じように神様が私たちを救われる時には、エジプト中を打つ——全体が下げられる中で、残されて相対的に高く残る訳であります。「イエス様を信じて、何か良いこと、御利益がありますか」と言う人があります。——今年も年が明けまして、何千万の人が色々な所に行つては、初詣でをしています。

「御利益が欲しい、今年も健康でありますように、お金が儲かりますように」と願う訳でしょう。それらは皆プラスです。少しでも下がること、出すことは嫌なので、ちょっと1万円ぐらい投資して、百万円ぐらい儲かりますようにと、本心はそういう事でしょうか。

ところが神様に対して、「私はこれこれこうしたから、是非プラスして下さい。私はこんな良い人間ですから」と言うことは誰も出来ない。むしろ神様の光に照らされれば、私たちは皆殺しにされて、生きていく事が出来ないかも知れません。

しかしそんな私たちの為にイエス・キリストを十字架に付けて、すべての罪を許して下さいました。「私の為に主が十字架に懸かって下さって有難うございました」と受け入れる者の減びをまぬがれさせて、減びの使はパスして下さい、それによって私たちは残されて救われるのであります。ですから「ひとりも減びないで、永遠の命を得る」と言われるお言葉の中で「減びない」が重要なポイントであります。

【他に言葉のない「永遠の命」】 ◆②そしてもう一点、「永遠の命を得るためである」はマイナスにならないだけでなく、神様の大きな恵みをもって更に私たちに永遠の命を得させて下さる——「永遠の命」と言う私たちは100歳とか120歳——奄美大島には120歳の方がおられました——を長い命、幸福と思いますが、決してそうではないのです。

神様が「永遠の命」とおっしゃるのは、私たちに対して神様が「良し」とされる、私たちが神様と通じる生涯、神様から顧みられる生涯、覚えられる生涯——そういうものであります。これは他に表現する方法がありませんので、神様は「命」あるいは「永遠の命」とおっしゃいます。

私たちが「生きる」ということの中に、どれ程たくさん意味が含まれているか考えてみれば分かると思います。食べることも、飲むことも、着ることも、考えることも、物を作り出すことも、あるいは何かを始末することも、何もかも含まれています。自分で自覚しない事もたくさん含まれています。そのように神様は私たちを滅ぼさず、ご自分の子供として、あらゆることを保証し、「私がお前の神である。お前は私の子供である」と言う生涯に入れて下さる——それが神様のご目的であり、命を懸けて私たちの上になそうとしていらっしゃる事です。

【生かされているでも自覚のなかった者】 ◆「永遠の命を得る」とありますが、「得る」と「有る」は違います。「有る」と言うのは「存在する」ことで、自分が自覚しないでも「有る」訳です。

魚が卵から孵化して、だんだんと大きくなって行く——まだ魚の形もはっきりしていない中に一ヶ所、小さなものが点滅するように動いて居るのが見えます。それは心臓です。

私たちに命が「有る」あるいは永遠の命が「有る」とはそういう状態でしょう。最初に物が出来はじめる時にすでに動いている。実は目に見えるよりもっと前、細胞が分裂を始めた時からすでに命は動いている訳です。ところが魚自体は全然自覚はありません。私たち人間にとってもそうですよ。

詩篇139篇に言われていますように、「母の胎内で組み立てられた時」同じように小さな心臓が鼓動を始め、やがて目に見えるようになり、だんだん大きくな

って、やがて人の形をとって地上に生まれます。

勿論初期から命は有る訳ですが、自覚してはいません。生まれてもはじめのうちは自覚がありません。随分大きくなってから、こうして命が与えられて、心臓はこういう所にあつて、こうして働いていると自覚をしまります。

それと同じように神様は私たちの魂に命を与えて下さいました。しかしその命が動いている自覚を持つのは、ずっとあとになります。

見えない方が確かにいらっしゃると神様を認めて、「有難うございます。こんなにも顧みて、永遠の命を与えて下さる。滅ぼさないうで救いに預らせて下さるとは、何と有難いことだろうか」と自覚するのは随分あとになると思うのです。

神様が「永遠の命を得る」と言われるのは、私たちに魂を与えて下さったから、そうになっている——という事ではなくて、私たちが自覚をもって「神様はこんな者に今、命を与えて下さっている。心臓が今こうして鼓動をしている、実は生まれる前から鼓動を始めていたのだが、今確かに私のうちに神様が魂を与えて下さって、私のお父様となって下さった。私を子供として下さった。（神様は肉の父母をもお造りになった方である）どうも有難うございます」と感謝する。それが「永遠の命を得る」——「ある」ではなくて「得る」であります。

◆私たちに対してご自分のご計画を遂げるとおっしゃった方は、必ず遂げて下さる。私がこんにちまでの生涯を振り返って見ます時に、最初は分からなかった私に御言葉を与えて、イエス様が私の為に十字架にかかって下さった事を教え、事実憐れみによって私を生かし、神様の子供とし、また使命を与えて将来についても責任を持って下さっています。

その事を体験しますと、神様とは真実な方であると知ります。「永遠の命を得るため」とおっしゃったのは、他のためではないのですから事実このようにして下さいました。

ある仕事をしようとする時、（あれにも、これにも使える）汎用機というのがありますが、それだけに使うよう設計された専用機もあります。コンピューターは何でもに使えますが、ワードプロセッサーになりますと、日本語の文章の作成、処理だけをするように設計されている訳です。

【「ため」とは他の目的ではない】



それと同じように、神様が私たちを「ひとり子を賜わったほどに愛して下さった」のは、私たちに永遠の命を与えるためであるとおっしゃるのですから、その目的が遂げられない事は決してありません。

【やっぱり父だったか】 ◆どういう関係か分からない二人の人が一緒にいる時に、暫く様子を見ていますと「なんだ、あれは親子か」あるいは「兄弟か」「夫婦か」と分かります。別に証明はなくても、その仕草なり、話し振り、その話の内容、あるいは行動を見ていると、すぐ分かります。

それと同じように、神様がこの小さな私を顧みて、こんなに愛して下さった。神様自身が命を捨てて私を愛して下さったという事が、はっきりしますと、神様は確かにすべてのものの造り主であり、父であられるという事がはっきりすると思います。

見ていれば分かる訳です。そうでなければどうしてそんな事をなさるでしょうか。神様が真の父であり、私は神様から造られた者でなければ、そんな事をなさる筈はない。途中の筋道をつないで説明する事は出来ないかも知れませんが、その結果を見て、なるほど私は神様の子供として定められていた——「事実、神様の子供であった」——と教えられた訳です。

【神様が私たちに凝っておられる】 ◆ある人は家族から、「お前は宗教に凝る」と言われて叱られるそうです。「そんなにしょっちゅう教会に行かないでもよろしい」と言われるそうです。何かマージャンか競馬にでも凝るように、信仰をそれくらいのもと考えておられるのだろうかと思います。

信仰は凝るところか、それが無ければ生きて行かれないものです。私たちが凝るというよりも、神様のほうが先に凝っていらっしゃる——自分の命を捨てて働きかけていらっしゃるのに、私たちが冷ややかにそっぽを向いて、「神様、そんなにおっしゃっても、私は忙しいですから、まあ、ほどほどにしておきましょう」という訳にはいかないのです。

神様の事が分かったら決してそんな事は言えないでしょう、「これは大変だ！神様が私を愛して下さっているから、私は生きて行くことが出来る！」となりましたら、何はさておいても、一生懸命に求めるだろうと思います。

また、家族の方も神様の事が分かれば「凝るな」などとおっしゃる事はなくなるだろうと思います。ひとごとでなくて自分のことであります。神様が命を捨てて愛して下さっているのですから、私もまた、神様にお答えする。神様が凝っていらっしゃるなら、私はもっと凝りたいと思います。

パウロは熱心の故に迫害されたり、排斥されたりしました。しかし彼は「私は神様の為に気が狂う」「人が何と言っても（熱心によって救われるのでないから、そんなことをしなくてもよろしいと言っても）私はしなければおれない。死の様に等しくなって、甦りの力にあずかりたい」と言って身を伸ばして人生を走りました。

私もまた、神様からそんなに顧みられていると知りました時に、同じように願いました。これは人に向かって「そうしなさい」と言うことは出来ません。神様が私の為に燃えて下さっているのですから、私もまた、その方に対して燃えたいと思います。

恋愛は、個人対個人の関係であって、愛された人をもっと強く愛する——そこで始めて燃え上りますが、同様に私が愛されたように、神様を愛して行くところに、人としての素晴らしい生涯があると教えられた訳です。

◆「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得る為である」（ヨハネ3:16）神様は私たちに対して何としても、この命を得させたい、その為には滅びてはならない——滅びの流れはとうとうと流れており、大変乗り易いのです。ちょっと手を離せばどうしなくても流されます。

しかし、人間は流されて滅ぶべき者ではなく、神の形に造られ、神様に従って使命を果たすように造られたのですから、何とかしてそれに帰らせたい、その為に神様は命をかけて下さいました。

溺れる人を救う為に、自分自身を顧みずに飛び込む——時には救いに行った人がかえって溺れる二重遭難と言う事がありますが、神様はそのようにご自分の命を捨てて私たちを救って下さいました。

◆そのような神様のご熱心を、今日もう一度受けたいと思いました。今という

【乗り易い滅びの流れ】

時は、大変押し詰まった時であります。ある所で「時のしるしを見分けなければならぬ」とおっしゃっています。私たちに残された機会はそんなにたくさんありません。

教会に来たいと思っても、なかなか来られない、信じたいと思ってもなかなか信じられないようになるかも知れない。第一、体が動かなくなってしまうかも知れないし、目が見えなくなるかも知れないし、その他にもいつどういふ妨げが起こるかも知れませんが、そういう時だからこそ、神様は私たちに対して非常な熱心をもって呼びかけておられる――

もし神様のお姿が見えるならば、どれ程燃えたぎって、狂気のように、私たちに「危ない！私のほうに目を向けて帰ってきなさい。あなたの道はこの道だから」と、神様は本当にご自分の命を投げ出して、血みどろになるように――

もし誰かが壊れたビルの下敷きになって大怪我をしているなら、何もかも捨てておいて、自分が傷付くことも汚れる事も忘れて救いますが――神様は私たちの魂を、何物よりも尊いものとして、ご自分の命をかけて、滅びの流れの中から、永遠の命に救い上げようとして働いて下さっている――私はその事をひしひしと感じた訳であります。

ですから神様は私たちをただ子供と認めるだけではありません――アメリカあたりではたくさんの他人の子供を貰って養育する人がいます。ある人たちはベトナムの孤児を30人とか育てています――神様は私たちを、そういう何十人かの中の一人として、「お前も一応子供ということにしておこう」と言われるのではありません。

ある所には私たちを「ご自分の嗣業として下さった」と書いてあります。嗣業とは、子孫が先祖から貰うもので、逆ということはありません。自分が働いて得るものでなくて、先祖が得たものを、私が受け継ぐ貴重なものであります。

神様が「私たちを嗣業にする」とは、どういうことでしょうか。とんでもない事であります。神様と私たちは親子であって、神様から何か戴いて、「これは私の嗣業だ」と感謝するのは、有り得ないことではありませんが、逆に私たち、こんな塵灰のような者を――万物の創造者である方が、嗣業にされるとは、真に

おそるべき事でありませう。筋道が逆であります。しかし事実そうおっしゃっておられます。

人の親が子供に生き甲斐を感じるということがあります。「お前がいてくれたら何にもいらぬ。お前の為死んでもよい」などと言います。神様は私たちを、そういうものとして下さる。

たくさんの子供のうち一人、どこに居たか、という子供ではなくて、自分の大事な大事なかけがいのない子供として、また、自分の生き甲斐——「お前さえいてくれたら、何もいらぬ」と言う程の愛をもって、私たちを顧みて下さっていることは、驚いたことでもあります。あまりのことでもあります。

◆しかし神様は眞実な方であります。「私がそうした」とおっしゃいますから、確かにそうなのです。1ヨハネ3章に、「わたしたちは、すでに神の子なのである」と書いてありました。「主が来られる時には、その眞の姿を見ることが出来る」「彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている」「この望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする」と書いてあります。

【主に似る者となる】

神様は眞実な方であつて、嘘でないのですが、私たちは常識によつて、「そんな事があるだろうか。私のような者が神様の子供になつて、彼に似るなんて、そんな事があるだろうか」と思いますが、それは人間の考へであります。

ヤゴがトンボになり、あるいは蟬の幼虫が地上に這い出して、羽化して行く——全く違つた姿になつて、飛び立ってまいります。

神様は動物の世界で、現にそういう事をしていらつしやる。人間についてどうして出来ないでしょうか。神様は「ご自分の栄光の形に変える」とおっしゃいます。そんなにまでして私たちにご自分の愛を遂げようとしていらつしやる訳であります。

【そのまま受ける事が最大の熱心】

◆私の為になんか燃えて下さっている方に対して、私もまた、燃えたいと思います。それは何も飛び跳ねて、ばたばたと走り回ることではなくて、神様が思ひを込めて、語つていらつしやることを、「はい、その通りです。有難うございました」と熱い心をもつて受け止めることでもあります。

ですから私は、この新年聖会におきましても、神様から与えられた標語を、あくまでも受けて行く。そうするならば、神様のほうが、ご自分のご計画を遂げて下さると信頼して待ち望んでいる訳であります。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ3:16) 命をかけて語っていらっしやる、「この永遠の命を受けなさい」とご自分の命を投げ出して、私たちを生かそうとしていらっしやる。神様は自分自身を捨てる訳にいきませんから、ひとり子を捨てて下さった。自分以上に痛みをもって、ひとり子を捨てて、私たちを生かして下さったのであります。

誰がこのような神様のみ思いに対して、冷やかに「そんなことがあるものですか」とお答えする事が出来るでしょうか。私はそう思いました。今までの自分の思い、人間の常識を離れて、お言葉を良く聞き、神様の熱情を直接受け止めたいと思いました。

私は足元が冷たい時に小さなストーブをつけますが、スライダックを入れていきますから赤く焼けない、しかし手で触れて見るとどのくらい暖かいかはすぐ分かります。私は神様のお言葉に自分で触れて、その暖かさを確かめたい。神様がそれ程、燃えて下さっているのですから、遠い所で「どのくらい暖かいだろうか」と思っても分かりません。自分でそれに触れてまいりますと、神様をご自分を開いて下さるのです。私はその事を信頼して、今日も待ち望んでおる訳であります。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ3:16) では、ご一緒にお祈りしましょう。(1988.1.1 戸畑教会新年礼拝=聖会 1)

## 第二章

### 信ずる者は裁かれない (裁きの恐ろしさ／あがないの尊さ／許しの嬉しさ)

【絶対正義の人は無い】	25
【人の事は何とでも言う】	26
【訴訟社会アメリカ】	27
【神様には許しがある】	28
【罪人を招く為に来た】	29
【信じられないとは謙遜か】	31
【信じられなくなる】	31
【再び罰する事は出来ない】	32
【さばきは神の家から】	34
【頑張ってはいけない】	35
【保釈金をどれほど積みめば】	35
【人の恩義に感ずるなら】	37
【そんなに熱中するな】	37
【清く正しく神様の前に立たせる】	38

「彼を信じる者は、さばかれぬ。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである」(ヨハネ3:18)

◆私たちの救いは、神様によって滅ぶべき中で残される救いであると、今朝も学びました。神様はあの出エジプトの晩にエジプト国中を打ち給いまして、初子という初子を全部殺されました。これは私たちに対するさばきの型であって、この世の終りに神様はすべてのものにさばきを行われる。その前に眠っていた者は、覚まされて神様の前に立たされてさばかれると書いてあります。

人間でも少し真実な人は最後に必ず締め括りをします。「これでどうなのだろうか、良かったか悪かったか」と反省をして、次の為に準備をする。悪ければ悪い所を直し、駄目だったら新しい事を考えます。

そのように神様は必ずすべてのものに白い黒いをお付けになる訳ですが、その時に私たちはさばかれぬ——何故かと言うと、すでにイエス様を十字架に付けて、私たちの罪を全部背負わせてしまったので、最早私たちの上に加えるさばきは残っていないのです。

もしイエス様による救いがなくて、まともに私たちがさばかれるならば、誰も神様の前に立つことは出来ません。人に比べて少々真面目な人、あるいは非常に無軌道でやりっ放しの人、色々あると思います。中には泥棒や強盗をする人もあるし、「あの人は立派な人だ。ボランティア活動で、こんなにした」と言われる人もあるでしょうが、神様の目から御覧になりますと、それらは殆ど変わらない、50歩100歩です。神様の光に照らされれば義人は一人もないと書いてあります。

マラキ書3章に「その来る日には、誰か耐え得よう。その現れる時には誰が立ち得よう」と書いてあります。誰も神様の前に胸を張って立つ事は出来ない。もし私たちが「神様、私は人よりも真面目で、こんな生活をしてきました」と、胸を張るならば、神様は私たちに向き直って、「なに？それなら私も言うことができる。私の物差しで計るならば、これこれこうだ…」と私たちの心の中の動機——外に現れた形でなく、心のうちに考えたこと、更にそれよりも奥にある動機までも鋭い光で照らされます。

「お前はこんなへそ曲がりの振れた人間ではないか、だから色々な事を考える。」

考えた事が実際に行動に出て来る。出て来るから人を傷付けたり、自分が苦しんだりする」と言われるでしょう。

もし神様がこれをさばいて、「それはいけない」「これはいけない」「あれはいけない」と言われるなら、私たちはいくつ命があっても足りないと思います。自分では分からないことも、神様から御覧になったらいくらでもあります。

◆私たちが他人の事を非難する——「あの人はこんな事があるから駄目だ」と言いたいだけ言うとするなら、言うことはたくさん見付かるでしょう。

昔弟子たちが、イエス様から質問をされました。「人々は私のことを誰と言っているか」と。非難ではありませんが、他人のことですから弟子たちは雄弁に答えています。「ある人はバアテスマのヨハネだろうと言っています。他のある人はエリヤだと言い、ある人はエレミヤ、あるいはその他の預言者の一人と言っている者もあります。」

ところがイエス様が、「では、お前たちはどう思うか」と言われると、皆黙ってしまいました。暫くしてペテロが、「先生、あなたこそ生ける神の子キリストです」——そう告白した、という有名な記事があります(マタイ16章)。

私たちは他人の事は良く分かるのです。たとえば私は色々な文章の校正をしますが、校正は自分でするとよく間違えるものです。間違えるというか見逃す訳です。自分が考えていることも、自分が書いた文章も大体分かっています。日本語は幸か不幸か漢字カナ混じりであって、漢字をばっと見ただけで意味が分かりますから、前後を繋いで一つと読んでしまう事が多くなります。

ところが他人に校正を頼みますと、誤りがよく見付かるのです。自分が考えていなかったことですし、また文章も自分の流儀と違いますから、よく目に付く訳です。「あ、これは違う、これも違う。ここはこんなふうを書くのだろうか」と良くわかるのであります。

この教会で出している印刷物を人に配ります時には、「良く見て下さい」と頼む訳です。指摘して貰いますと、その後に配るものは修正する事が出来ます。

他人をそしめるのとは逆に、自分を弁護しようと思うと、人間はどんな事でも言う訳です。「盗人にも3分の理」と言いますが、泥棒とは誰が見ても絶対に悪い



と決まっていますが、それでも十のうち三つぐらいはなる程と思う事を言うという訳です。

そういうものがありますと、裁判官は「やむを得ない事情があった、本人の責任とばかりは言えない。こういう環境に追い詰めた側にも非がある。やった事は悪いから罰しなければならぬが、少し求刑よりも軽くしよう」などと言う事になります。

日常の人間関係でも、私たちが自分の事を弁護する時は、「いや、これくらいは仕方がない——こういう事情もあるし、このくらいは良いことにしよう。誰々はそれ以上のことをしているのだから、私なんか軽いほうだ」という訳です。

◆そうしておいて他人の事はなかなか厳しく指摘します。「これは許せない、これは間違っている」とよく言う訳です。もし神様がそのように、私たちを非難し、間違っている点を細かく指摘されたら、どれ程たくさん有るでしょうか。それは想像も出来ません。

アメリカは訴訟社会であって、弁護士が日本の20倍とか居るそうです。それだけ訴訟が多い訳でしょう。何でも訴訟を起して、弁護士に頼んで法律的に争う。そうして裁判所の判断を仰ぐ訳です。

あまりにそれが過ぎると、弁護士が自分の生活の為に色々と焚き付けて、「こんな事があつたでしょう。訴えなさい。私が応援をしてあげる。もし失敗したらお金はいらぬから、とにかくやらせて下さい。成功したら報酬を下さい」そういう事になります。

何年前かにインドで化学工場から毒ガスが洩れ、たくさんの人が死んだ事がありました。その時にアメリカの(有り余った?)弁護士たちが、それを聞き付けてインドに行って、「訴えなさい。訴えなさい」と言って回つたそうで、随分問題になって、響響を買ったそうです。

最近アメリカで実際にあつた話ですが、ある若い男がピストル自殺をしたところ、お母さんが裁判所に、ある作曲家を訴えたそうです。どういう訴えかと言いますと、「あの曲が何かもの悲しく、人を失望させるようなメロディだったから、息子は自殺したのだ。大体こんな曲を作る人が悪い」と言うことらしい。

あるいはまた、ある電子レンジのメーカーは、「猫が死んだ」と言って訴えられたそうです。どうしてかと言うと、猫を洗って電子レンジで乾かそうと思って暖めたところ、死んでしまった。取扱説明書に「猫を乾かしてはいけない」と書いてないではないか、と訴えたというのです。これは本当にあった話です。

又ある泥棒が、どこかの家に押し入ろうと格子戸に掴まって登っていたら、格子戸が腐っていたために落ちて大怪我(半身不随?)をしたので、「こんな家を放っておいたのは家の持ち主が悪い」と訴えたそうであります。

ですからアメリカに進出した日本企業は、うっかりした事が出来ない。製品について何を訴えられるか分からないので大変びりびりしているという話であります。人間同士が物事を訴え始めたら、そういう事になります。これはほんの一例ですから、今後、誰がどんな事を言い出すか分かりません。

【神様には許しがある】 ◆神様がもし私たちについて色々な点を取り上げて、「お前はこんな事をしたではないか、あんな事をしたではないか、いけないではないか」と言われたら、私たちは到底立つことは出来ないのです。神様のさばきの席に出て「よろしい」と言われる人は一人もない筈です。ところが「彼を信じる者は、さばかれぬ」とあります。もう一つ読んでみましょう。

詩篇130:3/4 朗読。「あなたがもし、もろもろの不義に目をとめられるならば、主よ、だれが立つことができますでしょうか」(3節)もし神様が「それは正しくない、それは間違っている。私の御旨にかなわない」と咎められたら、誰も神様の前に立つ事は出来ません。

しかし「あなたには、ゆるしがあるので、人に恐れかしこまれるでしょう」——神様には許しがある。いくらでも責める事は出来なくなるでしょうが、許しがあって決して咎め立てをされない。むしろ良い点を見付けてほめ、それを伸ばして下さる方でいらっしやいます。

小さい子供に対する親の愛がそうでしょう。良い所を見て、何とかしてこれを伸ばそうとします。神様はそれと同じように、私たちを責めるのではなく許して下さるから、人に恐れかしこまれる——私たちもまた「神様は何と素晴らしい方だろうか」と慎んでお仕える訳です。

ですから、責められないから何も無いと思っはならない——おっしゃれば  
たくさん有るのですが、そうおっしゃらないで、私たちを許して下さい——そ  
のように教えられた訳であります。

◆マタイ9:9/13朗読。「わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を  
招くためである」(13 節) この時イエス様は、マタイの家に入られました。マ  
タイはこんにちで言うと税務署の職員ですが、当時の税務署は役所ではなく、プ  
ライベートな税金徴収業者だったらしい。政府から一定額で請け負って、自分がど  
れだけ納税者から水増し徴収出来るかが腕であって、たくさん集めて、規定額を  
納めれば差額はポケットに入るという事だったらしいのです。

【罪人を招く為に来た】

こんにちでも税金には恨みが付きものですが、当時はそういう制度ですから尚  
更で、殊に取税人はお金持が多かった(?) ために、自分たちのお金をかすめた人  
——そんな目で見えていたらしい。「取税人、罪人」とありますから、放火・強  
盗などの犯罪人と同じように見えていた訳です。

マタイが取税所に座っているのを見て、イエス様は招かれました。するとマ  
タイは立ち上がってすぐにイエス様に従いました。それはその時に「私に従ってき  
なさい」と言われたから、「はい」とついて行ったのではなく、マタイ自身がそ  
の時、生涯を切り替えた訳です。「こんな事をしてなる程お金は出来た。ローマ  
帝国の権威を受けて人から恐れられてもいるが、自分は少しも幸福ではない。ど  
こかに本当に人間として生きて行ける道がないだろうか」と求めていたのでしょ  
う。

そこへイエス様がわざわざ近付いて、招かれたものですから、「神の子である  
イエス様が、こんな者をも見捨てない——けがらわしい者と言わないで、招い  
て下さるとは、何と嬉しいことだろうか！よし私は生涯、この方に従って行こう」  
——そういう決断をしたのでしょう。すぐ立ち上がってイエス様に従いました。

彼は「自分のような者もイエス様に従わして頂ける」と言う感謝で、自分の家  
に宴会を設けたらしいのです。当然「イエス様、どうぞお出で下さい」とお招き  
しましたから、イエス様が食事の席にお着きになる。その席には、取税人の仲間  
がたくさん来て座っている訳です。「取税人や罪人たち」と書いてありますから、

その他にも悪い事をした人、金融取り引きか何かで悪い事をした人もいたかも知れない。こんにち流に言いますと、「インサイダー取り引き」をしたのかも知れません。

パリサイ人たちがががやがや騒ぎまして——パリサイ人というのは、特に厳格に律法を守る人たちで、「私たちは清い正しい人間で、神様のおきてにきちっと従っている、そんな悪い人たちとは交際もしない。物も言わない」と言っている人たちです——「何だイエスは神の子だ、救い主だと言っても、あんなげがらわしい罪人たちと一緒に食卓について——何故お前たちの先生は、取税人の罪人と一緒に食事をするのか。あんな奴らの仲間か」と弟子たちに質問をした訳です。

その時にイエス様がお答えになりました。「そうか、それでは聞くが、体の丈夫な人には医者はいらないだろう。医者が必要なのは病人である。それと同じように私が好むのは憐れみであっていけにえではない、これがどういう意味か学んできなさい」——これはホセア書6章にあります。

「わたしが好むのは、あわれみであっていけにえではない」とは、神様はいけにえ——つまり正しい行いと、たくさんの擲げ物とか献金、何か大きな奉仕をすることを喜ばれるのではなく、「神様の御愛と憐れみによって、こんな者が生かされています。ひとり子を賜わったほどに、わたしを愛して下さって有難うございます」と言う、柔らかい気持、憐れまれた事に対する感謝の気持——それが私の好むものであるとされているのです。

私は神様の御旨に従ってこの世に来た——正しい人、立派な人、熱心が出来る人に、「あなたは良い人だから、さあ私の所にきなさい」と言う為に来たのではなく、罪人——「自分はこんな者で、どうしようもない。生きて行く望みがない、いくらお金が溜まって、いくら名誉地位が出来ても満足がない。何とかならないだろうか」と言う人を招いて救う為に来た、とおっしゃいました。

私たちの不幸の原因である罪を取り除いて、神様に帰らせる為にイエス様が来て下さった——駄目な人間に、殊に目を止めて招いて下さるとおっしゃるので、私から、私は大変感謝する訳です。悪い者も招いて下さる（正しい者はもっと招

かれる)と言うのではなくて、むしろ正しい者は置いておいて、罪人を招いて下さる——これは私たちにとって大変嬉しいことであります。

イエス様は羊飼いの譬を語られました。100匹の羊を持っている人がいたとして、1匹の羊が迷ったらどうするか。本当に羊のオーナーであるならば、99匹はそこに置いて、1匹を見付けるまで探すに違いない。見付かったら喜んで帰って来て、みんなに向かって「私のいなくなった羊が見付かったから喜んでくれ」と言うに違いない。

また、銀貨が10枚あったとして、1枚がなくなったら、家中を片付けて探す。見付けたら喜んで皆と一緒に感謝するだろう。それと同じように、一人の罪人が悔い改めるなら、天において大きな喜びがある、とイエス様はおっしゃっておられます。

◆ヨハネ3:18/20 朗読。神様はさばく為ではない、とおっしゃるのでから「はい、有難うございます」と言えばさばかれないのです。しかし信じない人——反抗して「そんな事があるものか、教会なんか来るものか。聖書なんか読むものか」と言う人とは限りません。「信じたいのだけれども、信じられません」と言う人も信じない人です。「私は駄目です。そこまでは分かりません。信じられません」と言う人は、自分でさばきを招く——「ここまで言っても分からないか」と叱られるかも知れません。

【信じられないとは謙遜か】

一つには、自分の義を立てるという事があるからでしょう。「私はこんな者です。私はこんなふうに一生懸命に立派にやってきました」というパリサイ人のような態度です。そうすると神様のほうも、きつとなって「よし、そんなに言うのだったら、私のほうも言う事がたくさんある。お前は正しいと言ったが、これはどうかあれはどうか。お前の正しさとは、こんなものではないか」と言って、きびしく問われるに違いありません。

【信じられなくなる】

◆もう一つ神様のさばきは、「信じられなくなる」という事です。最初に信じようとしないと、信じられなくなる。それは「ひとり子の名を信じることをしないからである」とあります。「信じない者は、すでにさばかれている」——神様が「こら」と叱られる前にすでにさばかれていると言うのです。何故ならば、

神のひとり子の名を信じることをしない——つまり信じる事が出来なくなる、それがさばきであります。自分が自分をさばいているのです。

19節にもあります。「そのさばきというのは、光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪い（おこないが悪いと言うのは、不信です）ために、光よりもやみの方を愛したことである」——信じませんと、光を受けて光に従う事が出来なくなり、やみに引かれて溺れて行く。たまたまそうなるのではなくて、信じなければ、必ず信じる事が出来ないようになって行くのです。

何でもそうだと思うのです。こうと思って、そのまま信じて行けば、そうなるものを、信じないとそうならない——これは分かりきった事ですが、信仰については案外うっかりしやすいものです。信じないから、そうなりません。

夜、散歩しながら家内に色々な事を聞きます。星や月を見ながら計算問題を出す訳です——「これがこうだったら、1日にいくらになるか」と聞いてみますと、ちょっと考えてから「もう——分からない」と言います。何故分からないかと言うと、計算をしようとしなからずです。そこで「あなたが分からないと言うから分からなくなる。計算をしたら分かるよ」と言います。出来ないと言えば出来ません。出来ると言えば出来るようになります。

神様に対して「私は駄目です、信じられません」と言うのは、「信じたくない」と言う事かも知れない。しかし信じないとさばかれます。信じられなくなります。光を受けなければ暗闇の生活になります。当然のことですが、自分で自分の事を決め、自分で自分にさばきを招いている訳であります。

しかし神様は、私たちが何とかひとり子の名を信じ、さばきを免れる者となるようにと願っておられます。

◆神様のさばきを免れるという事は素晴らしい恵みです。何故かと言いますと、神様のさばきは、私たちが裁判所で罰金刑を言い渡されるとか、何年かの懲役刑を受けるようなものではなく、永遠に定められるさばきだからであります。ところが神様はそのさばきを免れさせて下さる——訴えられ、調べられたところ、さばきはもう済んでいた！だからお前はもうよろしい、という訳で、無罪放免となる。これは素晴らしいことであります。

【再び罰する事は出来ない】

神様のさばきに会いますならば、どんなに恐ろしいことになるか分かりませんが、神様はそれを一切抹消して下さるのです。それは何かかと言いますと、イエス様が私たちの身代わりとしてさばかれて下さったことによって、私たちのすべての罪は許され、再び罰せられない——私たちの上に罰を加える事が出来ない、もう加えるものがないとおっしゃる訳です

野原が焼ける——山火事（山火）といいますが、野火といいますが、火に襲われた時に助かる方法はたったひとつしか無いと言われます。それは自分の足元に火を付ける——山に放火してはいけません。緊急事態ですから止むを得ません——自分の足元に火を付けると、そこから風下に焼けて行きます。その焼けあとに入れば助かる訳です。

何年か前、この近くの貫山で消防士が焼死したことがあります。それは草木の密生した所に追いこまれた為に、共に焼かれてしまった訳です。

何故こんな事を申し上げたかと言いますと、神様のさばきは必ず行われる。しかし「イエス様が私の為に十字架に懸かって死んで下さった。有難うございます」と信頼する者にとっては、「度自分の立っている所が火に焼かれたように、神様のさばきはもう及びません。「あ、ここはもう焼けている」——ということで焼こうと思っても焼くものはありません。

「よくよくあなたがたに言うておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをつかわされたかた（父なる神）を信じる者は、永遠の命を受け、またさばかれることがなく、死から命に移っているのである」（ヨハネ5:24）神様からさばかれるならば、死よりほかにないのですが、イエス様が私の身代りとしてすでにさばかれた事を信ずるならば、死を免がれます。

ローマ8:1/3 朗読。「今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない」——イエス様を信じて救われた者を、再び罪に定める事は出来ない。何故ならば、「罪の刑罰として人間に死が臨む」という法則（道）から別の道に入れられたからです。——電車がポイントを通して、本線から側線に引き入れられると安全であります。本線の上を電車がどんなに行ったり来りしても安全であります。

それと同じようにキリスト・イエスという側線に入った者は、罪と死との法則から解放されて無縁のものになりましたから、たといどんなに恐るべきさばきが出来て来たとしても、（私たちが生きている間にそれが来ても、一旦眠ってから目覚めて神様の前に立たされたとしても）罰せられる事はありません。「この人はすでに済んでいます」とそのまま神様の前に迎え入れられるのであります。

もし、それがありませんならば、「悪しき者はさばきに耐えない」（詩篇1篇）と書いてあります。悪しき者とは、悪いことをした、嘘をついた、お金をごまかしたと言う人ではありません。人間的にどんなに正しい人であっても、イエス様を信じない人は必ず神様の前にさばかれる、ただではすまない訳であります。

【つひは神の家から】 ◆旧約聖書に、「さばきは神の家から始まる」と書いてあります。「さばきは教会に来た事のない人たちが受けるのだらう——私はクリスチャンだから」と思っている、さばきは神の家から始まるかも知れません。「何年も前に私はイエス様を信じてバプテスマを受けましたから、信じている（つもりです）」と言っても、それは当てになりません。

「私は昭和何年何月に生れたから、それ以来ずっと生きています」と言っても、毎日々々生きて来たから、今生きているのです。ある時にぽっかり生まれて、そのまま放置されていたら、生きている人は誰もいません。

私たちは神様の救いにあずかって、いついつ新しく生れて、神様の子供とされたと言うなら、子供として毎日生きて行く。そのように私たちが毎日あがなわれた者として生きてまいりますならば、今日さばきが出来ても、明日来ても、それからまぬがれる訳であります。

アモス書を読んで見ますと、「私はあなたがたを知った、それ故にあなたがたの罪を罰する」とあります。かえって神様の子供は厳しいさばきを受けると言うのです。私たちでもそうです。「大体あの人はああいう人だから、あまり酷な事を言っても無理だらう。しかしこの人はちゃんと出来る人なのだから、してもらわなければ——

横綱は横綱としての体面を保って欲しい。変な事をしては困る」と言う訳です。新入門者だったら、「しっかりやらなければ駄目だ」で、すむのでしょうか、横



綱になると、人を蹴飛ばしたり、怪我をさせたり、勝手な事をしたとなれば、きびしいさばきを受けます。「とんでもない事だ。本来なら退職金も何もやらないところだけれど、まあ、依頼退職のような形にして——廃業は相撲協会の温情と思って貰いたい」などと言われます。

同じように、全く神様を知らなかった人が初めて教会に来たならば、何も分からないのは当然でしょう。しかし「私は教会にずっと来て、神様の事を良く知っています」という人に対しては厳しい処置がされるのではないのでしょうか。

◆ヨハネ3:18、「彼を信じる者はさばかれぬ」——神様がこんな私の為に、イエス様を十字架に懸け、「再び罪をさばかない」とおっしゃるのですから、私たちはどうしたら良いのでしょうか——頑張るって良い人になろうと努めて、「神様、こんなに熱心にやっています」と言う事は、むしろ逆であります。

私に対して永遠の命を与えるとおっしゃった方は、今日も、私をその身分として下さいましたから「有難うございます」と感謝する——それが彼を信じる者であります。神様のほうが毎日々々私たちに命を与えて下さっている、実際に心臓は毎日どころか、毎秒々々血液を送り出して体を養っています。神様はそのようにして私たちを養っていらしゃるのですから、私たちはその事実を認める——

【頑張るってはいけない】

神様は霊的にも私の内に永遠の命を注いで、時々刻々生かして下さいますから「有難うございます」と信じる。すると、毎日々々「よし、今日も、さあ生きなさい」と命を注いで下さる。生かされると言うことはどんなに感謝か分からないと思うのです。

◆未決で勾留中のものが保釈金を積んで釈放されるという制度があります（刑事訴訟法89条ほか）。——田中角栄さんは確か5億円の保釈金を積んだと思います。丸紅の桧山社長は3億円、伊藤専務は1億円だったと思います。人間は僅かな収監をまぬがれようとしてもそれくらいの保釈金を積みます。私たちがもし神様の前に保釈金を積まなければならないとしたら、どれ程積んだらよろしいでしょうか。

私たちの罪は田中被告よりも、もっと深刻かも知れません。神様を無視して来

【保釈金をどれほど積めば】

たという罪はどれほどの刑に相当するか分かりません。大体、重罪はいくら保釈金を積んでも許されない事になっていますし、刑の執行が開始されれば、お金は一切無効です。

しかし神様は一切の条件を付けずに、一人子イエス・キリストという莫大な代価を払って、私たちを完全に解き放って下さった！これはどんなに感謝して良いか分からないと思います。

人から僅か何百円の物を貰っても、「有難うございます。有難うございます」と言う——たとえば百万円ぐらいの物を貰えば、相当にお礼を言うでしょう。「私のような者の為に、こんなにさせて頂いて、有難うございます」と言う。ところが神様は百万や1億ではありません。私たちの命をあがなう為にどれほど支払って下さったでしょうか。

保釈金でなくて、あがないの羊や獣を捧げるとしましょう。今、牛は一頭が50万円とか60万円とかするそうです。もし私たちが何か失敗をして、神様が「こら、お前はそんな事を考えて、罪は万死に値する——何度死んでも足りないぐらい大きな罪だ」と言われる。そこで私たちが「ごめんなさい、神様、罪のあがないの為に獣を捧げます」と牛を殺して捧げるとしましょうか。一回で50万円ぐらいの牛を殺して捧げたら、どうなるでしょうか。

それだけでも大変ですが、「またやった、再犯は二倍罪が重い」と言われたら、今度は2頭牛を捧げる——すると100万円です。神様は心を見られますから、一日に何回も罪を犯したらどうなるでしょうか。そういう事をしていたら、私たちは一生の間に、どれほどたくさんの物を積まなければならないでしょうか。とても生きて行く事は出来ません。サラリーマンの生涯収入は1億とか2億とか言いますが、たとえどれほどの高収入があっても足りない事があります。

しかし神様はイエス様の命という代価を払って、私たちが完全にあがなって下さった。これは何億円、何十億円どころではありません。お金には替えられないものであります。ですから私たちは感謝して、この方に仕えて行くのは当然ではないでしょうか。

◆私たちは神様に対して、どんなに恵みに感じて当然ですが、かつて

の私は実に冷ややかな、ぼんやりした者であったと思います。

ヘブル12:26/29朗読。「わたしたちは震われない国を受けている」——私は東京、横浜という一番地震の多い地方に長く住んでいましたから、地震には慣れっこになって、少々の事では驚かないのですが、震われるというのは、気持が悪いものです。この地上のありとあらゆるもの、家も土地も震われるのですから、大変なことであります。

ところが神様は、私たちを再び震われない国に入れて下さったとおっしゃる——これはどんなに感謝なことか分からない。九州に住むようになって地震が少ないのは大変ありがたい事ですが、神様はそれとは次元の異なった、もっと根本的な安静を与えて下さいました。

それは神様から再び罰せられない国を受けた事です。ここには「だから感謝しつつ、恐れかしこみ、神に喜ばれるように仕えていこう」とありますが、神様を敬い、恐れかしこむ——本当に謙虚に神様のお言葉を聞く、これは当然であります。

私たちが誰かから恩義を受けたならば、その人の言うことには従います。私はあの人から助けて貰ったからと、どんなことをしても仕えます。「有難うございました。どうぞこうさせて下さい」という事になります。

どんな刑罰を受けても仕方がなかった、何十億円にも相当する物を捧げなければならなかったかも知れないのに、それを全部許してイエス様の血によって無罪とするのですから、どんなに感謝しても足りないと思います。一生涯私はこの方の僕になりますと言っても過ぎることはありません。

◆ある人は「信仰はそんなに熱中しなくてもよろしい」と言われるそうです。それは自分が神様からどんな事をされたか知らない人だと思えます。

信仰とは何か余分な事をしなければいけないもの、税金を払っているようなものだと思う人にとっては、それがもっと増えたり、もっと熱心にと言われたら、「やめてくれ」と言う事になるかも知れません。

しかし自分がそれで生かされている——たとえば何かの病気になって、医者にかかるか、手術でもするとなりましたら、どうでしょうか。随分お金がかかっ

でも、痛くても苦しくても、暫く仕事が出来なくても、そんな事を言っておられないでしょう。

神様が私たちに対して、「信じる者はさばかれない」とおっしゃるのは、それ以上に重大な事だと分かりますと、私たちは決して「こんな事は出来るものか」とは言えません。ここにありますように、感謝しつつ恐れかきこみ、神様に喜ばれるように仕えて行く、それは当然のことだと思うのです。

私自身がその通りでありました。かつては何も知らなかった私でしたが、こんな偉大な神様が永遠に私をさばかないとおっしゃる。さばかないどころか、イエス様によって素晴らしい永遠の命を与えられた——その中には恐るべき事が含まれている。天国の財産を全部私のものとして与えて、遂には神様の御性質にあずかせて下さる！そんな事を考えますと、人が何と言っても私は感謝しなければおれない。そういう気持であります。

◆「わたしたちを敵の手から救い出し、生きている限り、きよく正しく、みまえに恐れなく仕えさせてくださるのである」(ルカ1:74/75)神様の前にきよく正しく仕える——それは罪が許され、さばきをまぬがれた者の生き方であります。恐れなくみ前に立つ事は他の事では出来ないことであります。

悪魔は私たちを引き摺り下ろして、「お前は駄目な人間だ、だから到底神様の前に立つことが出来ない」と言って、私たちに罪を犯させようとして来ます。しかし、その悪魔の手から救い出して、私たちを神様の前に清く傷なく、恐れなく立たせて下さるのがイエス様の救いであります。

これはバプテスマのヨハネの父ザカリヤの預言ですが、自分の子供の使命は何か、そのあとから来られる救い主は、どういう御目的の為に御出でになるか——彼は預言しています。それは彼が考えた事ではなくて、神様が彼のうちに聖霊を満たしてそのような讃美をお与えになった訳であります。

「彼を信じる者は、さばかれない」——信じる者は、永遠にさばかれないのです。今日も神様を信頼して、神様のさばきに耐える者とされた事を感謝して、喜んでこの方にお仕えする者でありたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。

(1988.1.1 戸畑教会新年聖会 2)

## 第三章

### 命を選べ

(悪人の死を喜ばない)

【神と共にいかに生きるか】	41
【自発的に命を選べ】	41
【命と死に中間はない】	43
【悪人の死を喜ばない】	44
【緊急事態となれば】	45
【小さな決断を助けて下さる】	47
【神様はむごい方ではない】	47
【あの人は用意が出来ている】	48
【神様が乏しくなる?】	49
【人間の完成像】	50

「わたしは、きょう、天と地を呼んであなたがたに対する証人とする。わたしは命と死および祝福とのろいをあなたの前に置いた。あなたは命を選ばなければならない。そうすればあなたとあなたの子孫は生きながらえることができるであろう」(申命記30:19)

◆ここは大変きびしい選択であります。命か死か、祝福かのろいか——どちらかを選びなさいと言われていました。選ぶと言っても、2本の鉛筆のうちどちらかを選ぶと言うような事ではありません。それは私たち自身の今の命、のちの命にかかわる重大事であります。

神様はこれを選ぶについては、「命を選ばなければならない、そうすればあなたとあなたの子孫は生きながらえる事が出来る」とおっしゃいます。——ただ肉体が長く生きると言う意味ではなく、そのあとにあるように、「アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた地に住むことができる」——即ち、神様と共にあって祝福された生涯を送ることが出来るという意味です。

そもそも申命記とは、表題を見ただけでは何のことか分かりませんが、これはイスラエルの民を導いた指導者モーセが、約束のカナンの土地に入る前に、それまで(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記)に語られていた神様のおきてを纏めて復習し(11章ぐらいまで)、そのあとで、今から入って行く、約束の土地(カナン)において、どういう心構えで、どのように生きなければならないかを教えたもので、非常に良く纏まった書物です。内容は、神がモーセに対して(イスラエルの為に)授けられた命令であります。

旧約聖書は新約のひな型、あるいは新約聖書の土台になるもので、イスラエルの民が荒野を通して、神様から約束された豊かな土地に入って定着するという事は、こんにち私たちが様々な苦しみや悩みの中からイエス様によって救われ、神様と共に生活する生涯に入ることのひな型であります。

ですからこの戒め(申命記)は、こんにちの私たちにとって大切な書物であります。

◆前に申しましたように、11章ぐらいまでは纏めてですが、そのあとは、今から入って行く土地でどうするか、という事が繰り返し記されています。27章にまい

りますと、契約の確認と更新が行われています。イスラエルの民はモーセの命令に従い、レビ人の宣言のあと、アアメン、アアメンと服従の誓いをしています。

そして28章にまいりますと、再確認をされた神様の戒め（契約）に、従ったらどうなるか、従わなかったらどうなるか、ということです。生ける神様がこれを本当に要求していらっしゃる、要求されているところに従ったら、従ったように結果が出て来るし、従わなければ従わないように結果（祝福がないばかりか、むしろのろいという結果）が出る——生ける神様の命のお言葉である証拠に、そのプラスとマイナスの詳細が具体的に書いてあります。

読んでみますと、大変恐ろしいものです。「従ったらどういう祝福があるか」という部分は短かく、14節までしかありません。一方、従わなかった場合ののろい——そのきびしい結果は、15節から68節までずっと書いてありますから、4倍も長い訳で、これによって神様のお言葉に従わない事がどんなに恐ろしい罪であるかが分かります。

しかし神様は、私たちを恐怖に陥れる為にこんな事を書いておられるのではなくて、真意は「決してこののろいのようにならないで、祝福の道を生きなさい」ということであります。

29章にまいりますと、「この契約はすべての人と結ぶ——今、私の目の前で私の声を聞いているあなたがたと契約を結ぶのは勿論だが、ここに立っていない人（距離的・時間的に遠い人）とも結ぶ」と言われています。これによって、はるか後の時代の、遠い極東の地に住む私たちも契約にあずかっている訳であります。旧約聖書は、決して私たちから遠いものではありません。

30章になりますと、心を尽くして主に帰れば、地の果てからでも集められること、神の言葉はあなたの口にあり、心にあるから行うことが出来る、と語られています。そして「さあ、どうするか。これだけあなたがたに対して良く言って聞かせて、確認をして、結果が必ず出る事を示した。あなたがただけでなくて、すべての人と約束しようとしている。どんな所からでも立ち帰らせる。言葉はあなたの心にある——さあ、選びなさい。どっちにするのか。もし、あなたがたが私のおきてと戒めを守るならば、あの祝福がある」——これは命とさいわいの

道です。

しかしもし聞き従わないで背く——謙遜風の不従順で「いいえ、私は」と言  
って退く。神様が「そうする」とおっしゃるのに、「いいえ私は違います」とい  
うならば、「神様は私に対してそんなことは出来まい」ということになりますか  
ら、神様は「私を侮るものだ」と叱られます。「いや、侮ってはいません。神様  
を馬鹿にするなんて、そんなことはしていません」と言いたいのですが、神様  
のおっしゃる事を「いや」と言えば、侮ったことになり、拒絶になります。

そうすると「あなたがたは必ず滅びる」と言われます。あなた方は約束の土地  
に入っても、長く命を保つことが出来ない。たちまち滅ぼされてしまう。「だか  
ら私はもう一度言う。天も地も証人である、あなたがたはこの天地の前で私の戒  
めに従う（命の道）か、従わない（死の道）か、どちらにするか自分で選びなさい。  
しかしあなたは命を選ばなければならない」と言われます。

神様は言うだけの事は言われましたが、それ以上はなさいません。神様は人の  
心を動かすことも、人に命を与えることも、取ることもお出来になり、くると  
心を変えて信じさせる事も出来ないことはないでしょうが、それでは自分が選ん  
だことになりません。人間というのは妙なもので、自分が選んだことは一生懸命  
にやりますが、人から与えられたものは、ちょっとつまずくと「あの人が言った  
から」と止めてしまう。また、自分の気は進んでいても、始めたきっかけが人か  
ら言われたためであると、なかなか本気になって取り組まないようです。

ですから神様は何とかして自発的に、「そうだ命を選ぼう」と決心して欲しい  
と、勧めていらっしゃる訳であります。

◆ここを見ますと「命と死」「祝福とのろい」とありますが、「命と死」に中  
間はありませぬ。死んだ状態と死んでいない状態は、はっきりしています。勿論  
人間が見てどっかが分からない状態もあるでしょう。脳死を死と認めるかどうか、  
と言う論議はありますが、神様の目には、命が有るか無いかは、はっきりしてい  
ます。

神様は終りのラッパの響きと共に、私たちをたちまち栄光の形にかたどらせて  
下さると同じように、命から死に移るのも、はっきりしている訳です。

【命と死に中間はない】



かつて「灰色高官」と言うものがあって、黒ではないが白でもない。お金を貰ったことは貰ったが、それが受託収賄になるかどうか、職務権限があるかどうかなどと問題にされ、本人は「いいえ、私は関係がない」「私には大体職務権限がないし、政治資金として貰ったつもり」「秘書が貰った事で、私は関知しない」と言うので、限りなく黒に近い灰色などと言われました。

しかし神様の前には「命と死」しかないのです。ですから神様は私たちに対して「あなたは命を選ばなければならない——何としても私の言葉に従って、私の祝福のある生涯を生きて欲しい」というのが神様の切なる願いです。神様が「ご自分のひとり子を賜わったほどに」とありましたが、神様自身の命を捨てるほどに、私たちに対して叫んでいらっしゃるのは、その事であります。

【悪人の死を喜ばない】 ◆エゼキエル16:6/7朗読。これはひとりの人にたとえてエルサレムの事を言われている訳です（これはまたイスラエルの民、全体のことであり、ひいては私たちのことでもあります）。神様から選ばれた町エルサレムは、かつてどういふものであったか。野原に捨てられていたものが、憐れみで生かされたのである、と命の由来を言い聞かせておられる訳です。生れたばかりの子供が血にまみれて転がっているのですから、惨めなものです。しかしそういうものを、神様が取り上げ、洗い清めて「生きよ」、「野の木のように育て——遅く生きるものになりなさい」とおっしゃって、生かされました。

エゼキエル33:11 「わたしは生きている。わたしは悪人の死を喜ばない。むしろ悪人が、その道を離れて生きるのを喜ぶ」神様はさばき主でいらっしゃるので、悪いものは悪い、良いものは良いとけじめを付けられるのが神様ですが、そんな方が、厳格な旧約の時代に「私は悪人の死を喜ばない。むしろ悪人が、その道を離れて生きるのを喜ぶ」とおっしゃる——悪人に「生きよ」とおっしゃっておられます。

創世記 2章を見ますと、人間が造られた時に、神様は土の塵をもってご自分の形にお造りになって、これに命の息を吹き入れられた時に、人は生きるものとなったと書いてあります。神様が「生きよ」とおっしゃって、命の息を吹き入れられた訳です。

エゼキエル書37章では、神様が枯れた骨に命の息を吹き入れて「生きよ」と生かしておられます。

神様は聖なるきびしい方であって、「悪い者は滅びよ」と言われるようですが、実は「悪人の死を喜ばない——生きなさい」と言われます。また土の塵から造られた、こんな小さなもの——「素焼きの土器のような、こんなものは使い捨てだ。ちょっと使ったら割ってしまえ。何の価値もない。私にとっては生きても死んでも関係がない」そう言われても仕方がない私たちですが、神様はこれを尊く生かして下さい——素晴らしい慈しみの方であります。

◆それだけ言われても尚、「いや」と言えば、神様はどうされるでしょうか。「いや」と言わないでも、ぐずる人もあります。「そのうちに、誰とかと相談してみ、何ならちょっとまあ——」とぐずぐずする。神様のほうは命をかけて呼びかけていらっしやるのに、そんな事をしていますならば、無念ですから最後通告をされます。「もし私に従わないならば、あなたがたはこうなる！」という訳です。

【緊急事態となれば】

「あなたは命を選ばなければならない。そうすればあなたとあなたの子孫は生きながらえることができるであろう。すなわちあなたの神、主を愛して、その声を聞き、主につき従わなければならない」（申30:19/20）神様は「従いなさい。選びなさい。私は命がけてあなたに語っているのだ」とおっしゃるのに、なおはっきりしない、あるいは「いや、私はとてもそんなに出来ません」と言うならば、神様はどうされるでしょうか。もう時間がありません。緊急事態です。その人の命にかかわるとなったら、愛する故にどんな事をされるか分かりません。

いつでしたか、子供が自動車で轢かれそうになった時に、ある人がぼーんとその子供を突き飛ばして、自分が轢かれてしまった事がありました。また盲導犬が、主人におぶつかりそうになった暴走トラックに向かって飛びかかり、跳ねられて足が切れてしまったが、主人は危く救われたという話があります。

人間でも犬でもそうですが、自分が責任をもって守ろうとするものが、もし危険にさらされたら、自分の身を顧みない、あるいは相手の少々の危険を顧みない——足が一本無くなるか、それとも命が助かるか、と言ったら足を切るという

事はあるでしょう。

脱疽という病気もそうですが、足の先から次第に腐れが上って来る。早いうちにくるぶしから切ろうとか、膝から切ろうとか、命を救う為には足を切ることも、手を切ることもある訳です。

神様が命をかけて自分の子供とし、命をかけて守ろうとするものが、もし背いていって悪魔にがぶりとやられて死にそうになったならば、どうするでしょうか。ぱっと払って、引っ掻いて打ち倒す、少々怪我をするかも知れないが、むざむざ潰されてしまうよりも、神様は手荒な事をなさるかも知れません。

ある所には「愛は死のように強く、妬みは墓のように残酷である」（雅歌8）とあります。妬みは愛する余りです、愛する人が他のものにふらふら迷って行くと、それを妬んで傷付けたり、殺したり、色々な事件が起りますが、神様はご自分が非常に高い代価を払い、命を捨てて買い取ったものが、失われて行くことに耐えられませんから、引っ掻いたり、打ち倒したり、手が一本、足が一本無くなるようなこともなさるかも知れない。しかしそれでも目覚めて帰る事が出来れば、私たちにとっては有難いことです。

ホセア書を見ますと、神様がイスラエルの民を掻き裂かれると書いてあります。これは何か浅ましい行為のようですが、神様は止むに止まれない、引っ掻いて、打ち叩いて、何とかして帰さなければならないと思われる訳です。

時間が無くて間に合わないなら仕方ありませんが、まだ間に合うのです。今ならこの人は私に帰る事が出来ると思いますから、一生懸命に引っ掻いていらっしゃるのです。私は色々な方のおとずれを聞きます。深夜に電話がかかって来て、あるいは肉体の苦痛を訴えられる、あるいは家の中がこうで困りますから、祈って下さいと連絡を受けます。

それは決して神様がその人を呪って苦しめられようとしているのではなくて、愛するが故に、何とかして自分に心を向けて貰いたいということなのです。神様の命を選ばなければ少々お金を儲けても、何がどうなっても、減んでしまいますから、何とかして永遠の命にあずかり、神と共にある生涯に入れようと思っておられる訳であります。

◆私たちは何か目に見える大きな転換——「神様、私は生涯をすっかり切り替えて、このようになりました。皆さん見て下さい」というような事ばかりを考えます。天と地を呼んで証をする——天地万物の前で自分の態度をきちっとしなさい、とおっしゃるのですが、そうした人間の目に見える事ばかりを求めておられる訳ではなくて、心の中の小さな決断——心の奥底で神様の前に「そうだ、やはり私は神様に従おう。少々お金儲けをしても、偉くなっても、逆に苦しくても、せいぜい70年か80年、大した事は無い。それより神様の前に永遠に覚えられろという事のほうが大切だ」——そういう気持ちで、思い切って従ってまいりますと、神様は心を見てすぐ助けて下さる方でありませぬ。

人間同士でも相手の人の真実は分かります。同じことを話しても、表情なり、態度なりで分かります。

神様はもっと分かる方ですから、心の奥底で「そうです。私は神様を第一として生きて行きます」と決断するならば、喜んで受け入れて助けて下さいます。ですから、具体的に行動を起す事が出来ます。それは自分の熱心によるものではなく、神様が助けて下さるものであります。

◆私は自分の生涯を振り返って、そうなのですが、私も神様を選ぶという事はなかなか出来ませんでした。いつまでたっても自分が可愛い——全く手を離して自分が0で、神様が100パーセントというと、自分の生涯は一体どうなってしまうのだろうか、そのような気持ちがちょっとしておりました。

しかし決してそんな心配はいらなかったのです。神様は私たちを苦しめたり、不自由な生活をさせようとしていらっしゃるのではないのです。「人生80年、たとい苦しみの連続だったとしても、それは一時のこと、やがてあそこで、神様の永遠の祝福が得られるのだから構わない」——それくらいの気持ちでありますと、神様は決してむごい方ではありません。

「よし、苦しんでよいなら、苦しんでおきなさい」とはおっしゃらない。「精神的な幸福が大切だから、それだけでよいだろう。物質的に乏しくてもよいではないか。それが信仰というものだから我慢せよ」とはおっしゃらないで、靈的に祝福を与えて下さる時には、必ず肉体的、物質的の祝福も添えて与えて下さいます。

貧乏ではないかも知れませんが、必要なものはちゃんと満たして下さるのです。

マタイによる福音書 6章にも「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」と書いてあります。神様を第一に求めてまいりますならば、その求めは必ず答えられます。

神様ご自身が私たちのものとなって下さる——これは最も素晴らしいのですが、そうするとあとはおまけ——その基本に添った当然の結果として色々なものが出来て来るのです。神様が責任を持つとおっしゃったら、食べる物も、着る物も、住む所も、ちゃんと必要を満たして下さるのです。それが神様の祝福である、神様を敬う生活とは、そういうものだとして書いてあります。

◆世の中は反対です。おまいりをして神様なんかどうでもよい、信仰はどうでもよい、とにかく今年一年、幸福でありますように、家族が皆元気で、お金が儲りますようにと、それを第一に求めますから、神様は困られます。そういう人にお金を与えたら、もう神様に用事は無いと言って逃げて行くでしょう。だからそういう人に与える訳にはいかない。

神様を第一に求めて動かない人は、幾ら注いでも安心です。注げば注ぐほど「神様がこんなにして下さった、有難うございました。神様は何と素晴らしい方でしょうか」といよいよ感謝が大きくなります。逃げて行くどころか、いよいよ神様に従うでしょう。従うから神様はなおなお喜んで満たして下さる。その祝福はどれ程恐るべきものか分からないのです。

「あの人は大変恵まれてお金持ちだから、教会の奉仕が出来る」などと言いますが、それは反対です。お金が無い、時間が無い、あるいは知恵や力が無い中から、神様に仕えたと祝福によって知恵も力も物質も、健康も何もかも豊かに満たして下さるのです。

私はその通りであります。最初は神様に対する態度がはっきりしていませんでした。私が戸惑っているから、神様のほうも戸惑われていたと思います。「神様は本当であるような、本当でないような——いくら神様に従っても良いことはないのじゃないか、それよりも自分でどうかしようかな」という態度ですから、神様のほうも「どうしようかな、あの者にやってよいものだろうか、どうだろう

【あの人は用意が出来ている】

か。やったら逃げて行くのではないだろうか。逃げて行ったら、これは無駄になつてしまう」という訳です。ですからその時は、祝福が来ているような、来ていないような、確信のない状態であったのは当然です。

しかし神様に向かってはっきりと「あなたはどんな事でもお出来になる方です。まずあなたが私の神様であることを保証して下さい。それに伴ってあなたが物質的にも霊的にも恵んで下さるから有難うございます。神様、あなたから祝福を頂く以外に幸はありません」と手を出していますと、神様は「よし、あの者は用意が出来ている、それでは」という訳ですべての祝福を与えて下さるのです。

神様のお言葉に従うことが、どんなに素晴らしい事かはっきり知りまして、今は迷う事はありません。迷う事がないから神様のほうも迷われないのです。責任を持つと言ったら必ず持つて下さる。「さあ、私が責任を持つから私の集会にきなさい」と言われたら、神様がその集会を恵んでくださる、これは素晴らしいこととあります。

◆「わたしは、きょう、命と死および祝福とのろいをあなたの前に置いた。あなたは命を選ばなければならない。そうすればあなたとあなたの子孫は生きながらえることができるであろう」（申命記30:19）今晚、神様は私たちに対し、ご熱心をもって「この命——つまり神様に従って祝福を受ける生涯を選びなさい」とおっしゃる。サイコロを振るように1が出るか、2が出るか、「お前は2だから外れだ、仕方がない」と言うものではありません。自分で選べるのですから、「命のほうを選びなさい。（決して死を選ばないように）そして私の祝福にあずかって欲しい」と神様はねんごろに命じていらっしゃいます。

ですから今晚も、このお方に向かって「私はこんな者ですから駄目でございます」と言わない。かつて「皆さんがそんなに天国に入りたかったら、天国は一杯でしょう。私はゆっくり地獄に行きます」と言った人がありますが、そんな心配もいりません。神様は「天国（私の父の家）には住まいがたくさんある」（ヨハネ14:2）とおっしゃいます。皆が一斉に神様の祝福を貰ったら、いくら神様でも乏しくなって困るのではないか、その心配もいらぬ事です。

先日、ソ連に関するある本を読みましたら、面白い事が書いてありました。ソ

「神様が乏しくなる？」

連の小話に「ソ連という国家は世界一豊かである。何故ならば、革命以来みなが国家の物を盗み続けているのに、まだ盗む物があるからだ」とありました。要するに工場労働者が持ち出しをしたり、各個工場が計画経済のルートによらないで物を動かす——それをひにくっているらしいのです。

いくら世帯が大きくても、人間は有限であります。しかし神様は決してそうではありません。どんなに祝福を注ぎ、恵みを注ぎ続けても、決して尽きる事がない方であります。

「主のいつくしみは絶えることがなく、その憐みは尽きることがない」（哀3:22）と書いてあります。物質的なものも絶えることがない——地球の資源が枯渇するとか、汚染が蓄積されると言われますが、神様が私たちの必要を満たすという点では、決して乏しい方ではありません。

【人間の完成像】 ◆今晚も「あなたがたは命を選ばなければならない」「さあ、命を選びなさい」と言われています。私たちは、言われて従うには違いありませんが、自分の中から「そうです。私は決断をします。命を選びます」という、決意表明をしななければならない。神様が私たち人間をお造りになったご目的はそこにあります。神様から離れて、人間は決して生きられません。神様によって造られ、神様から生かされている人間が、どうして神様を離れて生きることが出来るでしょうか。神様は私たちを生かし、ご自分と繋がらせ祝福を満たして、「ああ、神様は素晴らしい方であらう」と神様を崇めさせるのがみ心であります。

創世記を読みますと、すべてのものをお造りになった時に、「はなはだ良かった——これは良く出来た」と一つ一つ喜ばれました。人間もそうであります。万物の最後に神に形どって人間が造られ「はなはだ良く出来た」と喜ばれました。

それはその時に「良い形が出来た」「うまく動いて生きるものになって良かった」と言われただけではなく、こんにち私たちが神様によって生かされ、神様から祝福を受け、神様と共に生活をして、神様に感謝する生涯を送る——それを望んで「よく出来た」とおっしゃった訳であります。

するとそのあとは、その人を通して神様のみ心が行われる。自分の事よりも、神様のことを求めるのですから、神様は借しみなく注ぎ、借しみなく溢れさせて

「すべては神様のなさる事でございます」と、私たちをしてご自分のお名前をあがめさせる。これが神様の最終的なご目的であります。

ですから今晚私たちは、神様の前において、過去のことも、将来のことも、人間は考えることはないのです。過去のことはどうする事も出来ません。将来のことは何も分かりません。第一自分が生きているかどうか分かりません。神様は今ここで「あなたは命を選びなさい」とおっしゃるのですから、私は今晚、ここで決断したいと思います。小さな決断でもよい、神様は決して軽く見られません。必ずそれを認めて「よし、助けよう。さあ」と私たちを助けて下さるのです。それは実に靨面のものであります。

電灯線をコンセントに差し込めばぱっと電球がつく。そのように神様が今晚「選べ」とおっしゃるから「はい」と選べば、ぱっと心の中に明るい灯がともります。熱くなります。それは事実であります。

神様のわざと言えば、何千年か何億年単位の話だろうと思いますが、そうではありません。神様は瞬間に答える方でいらっしゃる。1秒の何分の1でも、あるいは（原子の世界や、電子の世界の）何億分の1秒をも支配する方でいらっしゃる。高速コンピューターは1秒間にギガ——10億という仕事をします。人間が少し微細な回路を作ってさえも、それくらいの事が出来るとしたら、神様にそれ以上の事がお出来にならないでしょうか。

ですから私たちは今晚、決断をもってその方のお言葉に従い、神様のみ心を行って頂く者になりたいと思います。ご一緒にお祈りしましょう。

(1988.1.1 戸畑教会新年聖会 3)





## 第四章

### 安息に入る努力

(恵みの御座にはばからず近づこう)

【そのもの(の価値)を無駄にする】	55
【時間を無駄にする】	56
【時が満ちたあとに今がある】	57
【今年も待って下さい】	59
【延ばされたヒゼキヤの寿命】	60
【世の始めに完成した安息】	61
【不従順の悪例に習うな】	61
【安息に入る努力=恵みの御座に近づく】	63
【招かれた人は晩餐に与られない】	65
【除石拝栄、感謝載石】	67
【絶えず安息の中に】	69

「神はこう言われる、『わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、救の日にあなたを助けた』。見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である」(2コリント6:2)

◆短いお言葉ですが、私は非常におごそかな思いをもって、これを受け止めさせて頂きました。というのは、神様が私たちに対して燃えたぎる思いをもって、あるいは無念の思いをもって語っていらっしゃると思ったからです。それは「神の恵みをいたずらに受ける」という事があるからです。これには二つの面があつて

①第一はそのものを無駄にされることについて。非常に尊いものを無駄にされる——例えば、私たちが一生懸命に作ったものを、人に預けたところ、ぼんと投げ出されて、粗末にされる。せっかく大事に作ったのに、汚れたり割れたりしたら大変、どこかこちらのほうに置いてくれたらよいのに、とハラハラします。

神様は、ちょっと貴重な物というぐらいではありません。私たちの為にかけていのないご自分のひとり子をなげうって下さいました。これはご自分の命を与えるよりも大きなことです。誰でも命を粗末にされたら大変であります。

あるとき、ドライバーの先で誤って自分の手を突いて、怪我をした人がありました。「ちょっと済みません、赤チンを塗って下さい」という訳です。それで私が傷を拭いて付けて上げたのですが、「もっとたくさん、もっとたくさん、こっちまで」と盛んに言われる。そんなに付けても仕様がないと思うのですが、自分の体の事になりますと、これは人が思うようにはいきません。もっと大事に、もっと大事にと言いたい——

ある人が言われました。「義歯を作るのでもそうですが、自分の体のことならお金を惜しまないつもりです」と。

他の事では1円を借しんで敏感に反応する人が、自分の体の事になると、大枚をはたきます。

相当昔の話ですが、50億円持っていたある財産家が病気になった時、お医者さんに言ったそうです。「あなたにこの半分(25億円)あげるから何とか私の体を治してほしい」——医者も人間ですから、どうする事も出来なかったのは勿論

【そのもの(の価値)を無駄にする】

です。

人間は自分の事になったら、どんなにでもして、自分の命を救おうと思います。自分の命が無駄になるような事は決してしません。ところが神様はご自分の命を投げ出して私たちに与えて下さったのに、人がそれを無駄にする――

例えば心臓移植をしてみましょう、心臓を摘出された人は自覚している訳ではありませんが、冷凍保存の容器に臓器を入れて、運搬係員がさっと走って行く、車からヘリコプターに乗り替えて運んで行く。受取る側では一刻も早く新鮮な臓器が欲しいのですから、胸を開いて待っている――緊急輸送ですから、赤ランプを点滅して、交差点も何もかも突破して走って行く訳です。

それをもし「ちょっと待て。いくら心臓でも、そんな無茶な事はさせない――少々時間がたってもいいではないか」と止められるか、もっと極端な場合は「こんなものは何だ！」と保存庫から投げ出される。そんなことになったら、何ともやりきれない事があります。

私たちに与えられた神様の命が、途中で無駄になるならば、神様にとってどれ程無念でしょうか。そんな事は許される筈がないのです。無駄の第一は、神様の命そのものを無駄にすることにあります。

◆②もう一つは、今の運搬の例でも分かりますように、「時間を無駄にする」という事です。神様はどんなに無念の思いをもって、「今は恵みの時、今は救の日である」と語っていらっしゃるでしょうか。

私たちは、時間はこちこちと刻まれていつまでも流れている、24時間たてば一日が過ぎて行く、あと 364日たてば次の1989年がやって来ると思います。何百年先の星座の位置でもびたりと計算出来ますから、時の流れなど始まった時から全く変わらないのではないか――私たちはそのように簡単に考えますが、本当はそうではないのです。

地球上の「時」というものは、少しづつ変わっています。地球の上には海水が一杯あります。月の引力が働いていますから、月に面している海面では海水が少し持ち上がる訳です。器に入れた水がだぼだぼと揺れる様に、これが地球の自転を少し遅くする訳です。

つい数日前でしたか、うるう秒というのが1秒入れられた事をご存知でしょうか。午前8時59分59秒、それから60秒が入って9時0分0秒になりました。そういう事があり、ある計算によりますと、長い間(2000年くらい?)には2週間ぐらいずれが出来るそうです。

星座の将来の位置をコンピューターで計算しますと、20万年ぐらいのちには、織女星(ベガ)が、現在の北極星の位置に来て、カシオペアのWとか北斗七星の柄杓はぐじゃぐじゃになってしまう。そういう事がわかります。

私たちは星はいつも同じ場所にあり、「時」はいつまでも同じように流れると思っていますが、なかなかそうではないのです。「時」は神様によって始まりました、最初は無かったのです。ある学者たちの話によりますと、宇宙は現在、急速に膨脹を続けている——それを逆算していくと、今から150億年前のある一瞬——

その時は宇宙全体が水の一滴よりも小さかったに違いないということです。その瞬間に巨大な火の玉が爆発するようにしてすべてが始まり、膨脹を続けて現在の宇宙が有る——そう言います。それはあくまで人間の学問ですから、真偽のほどは分かりませんが、とにかくはじめはすべてのものが無かったのです。

創世記の冒頭に「はじめに神は天と地とを創造された」とあります。最初は何も無かったのです。そして神様が、御言葉をもって「光あれ」とおっしゃった所から次々にすべてのものが造られました。ですから「時」とは、神様の創造の時から始まり、今も神様のご支配のもとにあるのであります。

イエス様はある時に(キリストの再臨について)「その日その時は誰も知らない。天の御使たちも、また子も知らない。ただ父だけが知っておられる」とおっしゃっています(マタイ24:36)。

◆そのようにして、造られた時は、ただ同じようにずっと流れているのではなく、神様のご意思が、その中に込められ、特別に延ばされている訳であります。神様がもうこれで終りにしようと思われてから、なお少し延ばそう、もう少し延ばそう、と延ばされている時が今であります。

2ペテロ3:8/9 朗読。ある人々は「神様の裁きとか救いなんて、なんだ、そん

【時が満ちたあとに今がある】

なもの。時間は天地創造このかた永久に変らないよ」と言う。神様のさばきや、この世の終りなんて、そんな事はあるものか。宇宙はいつか分からないが、ひとりでに始まって、いつまでも変りやしない。地球は公害か人口爆発か何かで滅びるかも知れないが、天地万物は変らない、と思いますが、神様は「そうではない」とおっしゃるのです。今は神様が、1日待っても、千年待ったように、はらはらしながら待っておられる時であります。

しかし神様はいつまでも待たれる訳ではなく、必ず結末をおつけになる。始めがあったものには、必ず終りが来ます。その時のことは「主の日は盗人のように襲って来る。その日には天は大音響をたてて消え去り——」と書いてあります。

その他にもたくさん聖書を引いてみたのですが、イエス様は「時は満ちた」とおっしゃいました。イエス様がこの地上にいらっしゃって、直接に伝道なさったのは、1900数十年前ですが、その時すでにイエス様は「時が満ちた——今こそ信ずべき時である」とおっしゃいました。それからこんにちまでだいぶ年月がたちました。今は満ちてしまったあと、延ばされている時であります。

いつか銀行にまいりまして、話をしているうちに閉店時間が過ぎて、表のシャッターは下りてしまいました。しかし話が終りませんので、もう少し、もう少しと時間を延ばして、終ってから「すみませんが、こちらの通用口から出て下さい」と言われて帰ったことがあります。

丁度そのように神様は「もう救いの時は満ちた。そして過ぎようとしているのだけれども、もうちょっと延ばして、もうちょっと、もうちょっと」と時間は延ばされている——そういう時代であります。

黙示録1章には「時が近づいている」と書いてあります。黙示録に書いてある事は幻ではない、架空の事ではなくて、すぐにも起るべき事である。時が迫っている。だから神様のみ旨を、ないがしろにしない——「何だこんなことは、おとぎばなしか夢のようなこと」と言わないで、預言の言葉として朗読し、これを守る者は幸いである——とされています。ペテロの手紙では、その日の為に備えをしておきなさい。「その日を待ち望む者は、極力清く敬虔に生きなさい」と言われています。

◆ルカ13:6/9朗読。これはぶどう園に生えているいちじくの譬です。いちじくは非常に生命力が強いし、葉が特に大きい植物です。ところがぶどうは特に日照を必要とする植物ですから、大きな葉で日陰になると非常に困るのです。最近でも地中海沿岸のぶどう畑を見ますと、日本と違って背が低い種類のぶどう（棚作りをしない為か?）であって、地中海の強い日光がさんさんと注いでいます。もしあんな畑の中でいちじくが葉を広げていたら大変だろうと思います。

主人が来て、園丁に向かって「このいちじくを切り倒しなさい」と命じました。主人も全く憐れみのない人ではない訳で、「ぶどうにとっては日陰になるけれども、いちじくの実なりとも生れば（許してやろう）」という訳で、3年間待っていたのです。

ところが3年待ってもいちじくは全然実がならないので、ぶどうはどれほど損をしたか分からない。もう我慢が出来ないから「切りなさい」と言った訳です。園丁は「今年もそのまま待つて下さい。今年、この周りを掘って良く手入れをして、肥料をやってみます。来年実がなったら結構、もしならなかったら、その時は仕方がない。切り倒して下さい」と言って、主人をとどめたという譬です。

イエス様の譬は、深い真理を含んでいる訳ですが、私たちはいちじくの木です。神様の前に果たしてどれだけ実がなっているのでしょうか。さっぱり実がならないかも知れません。自分に実がならないだけでなく、他の木の実がなるべきものを覆って邪魔しているかも知れない。自分では分かりません。人間は他人の事は見えても、自分の事はどうしても見えない。目の玉は自分の体に付いていますから、絶対に自分は見えないのです。ですから自分自身がどんな者であるかも知りませんし、他人に迷惑をかけているのも分からない。

神様はそんな者を、すぐ「切り倒せ」とおっしゃらないで、3年も待たれる。そしていよいよ待ちきれないから「切れ」と言われたところが、園丁（これはイエス様のことです）——イエス様が私たちの為に「ちょっと待つて下さい」と執り成して下さいました。十字架の上のお祈りがそうです。「父よ、彼らを許したまえ。彼らはその為すところを知らざればなり——ちょっと待つて下さい。彼らは実がならないで困ったものですが、もう一度肥料をやってみます。今年一

年待つて下さい」そう言って今も執り成して下さっているのです。

今はそのようにして延ばされた時であると教えられた訳であります。

◆その他にもたくさんの例がありますが、昔ユダ王国のヒゼキヤ王様は、ある時に神様から「お前は死ぬから、家の人に遺言をしなさい」と言われました。王様は壁に向かって、激しく泣いて祈ったと書いてあります（列王下20章ほか）。壁に特別の意味はないのですが、人を避けて神様の前に集中するという意味です。「神様、今まで私は出来ないながら、何とかしてと思って一生懸命にあなたにお仕えて来ました。これからいよいよこの王国が、神様のお言葉に従うようにと願っている時に、私が死んでしまったら、何も出来ません、どうぞ憐れんで下さい」と泣いて祈りますと、神様はその涙を見られました。

身勝手に「死にたくないから、長生きさせて下さい」と言うのではない。自分の使命を果たして、神様のみ旨が行われるようにという求めですから、神様は15年命を延ばされました。彼の死病は悪性の腫瘍だったようで、干しいちじくで排膿して急速に治りました。

ヒゼキヤは感謝して「神様、そのしるしを下さい」と求めたところ、日時計の日影が10度退いたと書いてあります。日影が退いたという事は、太陽が逆に動いた訳です。そんな事は無いだろうと私たちは思いますが、時間を支配しておられる神様ですから、そういう事がお出来になった訳です。

しかし、そのあとがいきませんでした。ヒゼキヤは感謝して生活を始めましたが、人間は弱いもので、次第に「これで儲かった。当分は大丈夫」と言う気持ちになったのでしょう、神様の前に高ぶりました。そしてバビロン王から見舞いの使者が来た時に、自分の宝の蔵をことごとく見せて誇った訳です。「誇る」とは言わなかったのですが、自分にそういう気持ちがあったから、「どうだ」という訳で見せたのでしょう。

その時に神様がすぐ後から、「お前は何をしたか。お前が見せた、このすべてのものは残らずバビロンに運び去られる時が来るであろう。お前の子たちも連れ去られ、バビロンの王宮で宦官となるであろう」と言われました。ある書物によると、ヒゼキヤはそのあと、へりくだったと書いてありますが、それを見ます



時に、残され延ばされた時に置かれている私たちはいかにすべきであるか——神様の前に高ぶって、再び捨てられないように、十分に自覚しなければならないと教えられた訳であります。

◆ヘブル4:1/16朗読。6/11節に「その安息はいる機会が、人々になお残されているのであり——わたしたちは、この安息にはいるように努力しようではないか」とあります。安息に入れるのに、入らないで落ちて行く人が起こらないように、私たちは努力をしようではないか、とおっしゃっておられるのです。今年神様は「ひとり子を賜ったことにより、永遠の命を得させる」とおっしゃいましたが、この安息は永遠の命の生涯を言われている訳です。

神様はその安息を今から作るというのではないのです。お客様が来られるなら、お料理を作らねばならない。さて何を御馳走しようか、というようなことではありません。神様のみ業は世の始めのさきから出来上がっていたのです。

天地創造のとき、神様は7日間に、目に見えるすべてのものをお造りになったように、安息と永遠の命の恵みは完全に出来上がっておりました。イエス・キリストを十字架につけて下さったことによって、私たちが「はい、有難うございます」と言いさえすれば、すでに出来上がっているものを頂くことが出来る。ところがなかなかそれを受けることがないので、神様は無念であります。

◆6節の「そこで、その安息にはいる機会が、人々になお残されているのであり、しかも、初めに福音を伝えられた人々は、不従順のゆえに、はいることをしなかった」というのは、どういう意味か——イスラエルの民がエジプトを出て、ホレブからセイル山の道を経てカデシバルネアに来た時に、神様はモーセに「私がイスラエルの人々に与えるカナン之地を偵察してきなさい」と言われました。そこで各部族から選ばれた12人が40日かけて偵察してきました。

しかしその時に、12人のうち10人は「あそこは良い所には違いないが、強い先住民族がたくさんいて、町々は堅固であり、攻め込んで行くな自分たちは滅ぼされてしまうでしょう」と言ったのです。

しかし他の2人(カレブとヨシュア)は「いや、確かに困難ではある、しかし神様がおっしゃった通りに、実に豊かな乳と蜜の流れるような所である。強い先

住民族がいると言っても、神様が行けとおっしゃるのだから、我々は勝つことが出来るに違いない。ただ主に背いてはならない」と言いましたが、

その当時から多数決原理が働いたのでしょう、「それでは10人の言うほうが本当だろう。ああ、我々はエジプトか荒野で死んでいたらよかったのに——なぜこんな所まで来て殺されなければならないか」と反逆を始めました。

それで神様は激しく怒られて、「私が入れと言っているのに、それを行けない、行かないという事は、私にその能力がないと私を侮るものである！」——これはこの世の「遠慮」とは違います。神様があの土地に入れて下さるのは、約束ですが、また命令でもあります。恵みの命令であります。

「命を選びなさい——命に入れ」と言われるのです。それを彼らは拒みましたから、神様は「そうか、お前たちは『我々はあそこに行ったら滅ぼされる』と言ったが、お前たちの信仰の通りになる。お前たちは一人も約束の国に入れず、荒野に引き返し、そこで朽ち果てるまで40年間さまよってきなさい」と言われました。

これは結局は全員死刑であります。当時生きていた(20歳以上の)大人は40年の間に全部死んで、当時子供であった者や、荒野で生まれた者たちがカナンの国に入った訳です。

「不従順のゆえに、はいることをしなかつたのであるから、神は、ある日を『きょう』として定め、長く時がたってから、先に引用したとおり、『きょう、み声を聞いたなら、あなたがたの心をかたくなにはいけぬ』」(ヘブル4:6/7)——1回失敗したのです。はじめの人たちは40年の間に死に絶えました。そしてその後には生れた人たちが「今度は入りなさい」と言われ、信仰をもって入りました。

これは、そもそも救いに与かるべきイスラエルの民が捨てられ、異邦人である私たちが、イエス様の恵みによって、この安息に入れられるということのひな型であります。神様は私たちに「まだその機会が残っているのだから、さあ、入りなさい」と言われている訳であります。

あの当時、入った、入らなかった、というのは、目に見えるひな型の話ですが、

こんには真理の話であって、「信じる者はすべて安息（救い）に入れられるという恵みの機会が、今、来ている。さあ、ここで入りなさい」——と言われていた。これをもしまた拒むならば、同じように荒野を放浪しなければならない訳です。

だから神様は「そういう事がないように——今度こそは入りなさい」とおっしゃる。完全に出来上がって私たちの為に備えられているのですから、「はい、有難うございます」と入りさえすればよい。

「入れてげよう」と言われているのに「入らない——（悪意でなくて、私は入れませんと言うのも同じです）」という事になりますと、神様は容赦なさらない、「どうか入って下さい」とはおっしゃらない。「お前がそう言うのなら、信仰の通りになる」——私たちは実際に入れなくなるでしょう。

ですから「そうならないように」——神様は、私たちがどんなに捨てられても何の痛痒も感じない方ですから、自業自得で滅びて行く者など知らん顔ですむのですが、それを憐れんで下さいます——「そうならないように」「一人も滅びることがない——備えられた命の恵みに皆入ってきなさい」と言われる。

ヘブル4:11「したがって、わたしたちは、この安息にはいるように努力しようではないか。そうでないと、同じような不従順の悪例にならって、落ちて行く者が出るかもしれない」と警告されています。

◆「この安息に入るように努力しよう」と勧められていますが、「努力」と言っても、人間のいわゆる頑張りではありません。

外国人が日本に来て驚くことは、日本語の「どうも、どうも」と「頑張り」だという話ですが、「頑張る、頑張る」と皆が言う。しかし神様の前に頑張るのはいけません。神様の言われる努力とは、自分が力んで何か良い行いをして、神様の為に一生懸命に奉仕をして、献金をして献身をして、という事ではありません。

努力とは16節「だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか」——これが努力なのです。

私たちには大祭司なる神の子イエスがおられて、私たちの弱きを思いやり、私

【安息に入る努力＝恵みの御座に近づく】

たちを助けて下さる。私たちと同じようなすべての試練の中を通して、私たちの事を思いやり得る方が、タイミングの良い助けと救いを与えて、神様の恵みに入れて下さるのです。だからはばかりせず、恵みの御座に近づく「イエス様、私はこんな者ですが、神様のお言葉に従い、あなたに信頼することが出来るように、どうか助けて下さい」とはばかりせず――

はばかりと言うのは、自分でぐじぐじ考えて、遠慮したり、退いたりする事でしょう。そういうことをしないで、「来なさい」と言われたら「はい」と近づいて「どうぞ、そうして下さい」と信頼する――これは無理なことをお願いするのではないのです。「せよ」と言われるのに、今までしなかったことを叱られているのですから、「御免なさい、前には、いたらん事を言いました。入れとおっしゃるから、入れて下さい。どうぞ信仰を持つことが出来ませんから助けて下さい」と言って飛び込んで行くなら、「うるさい」と言われる筈はないのです。

「来なさい」と言われ、「入れてやる」というのがみ心ですから、「あなたの所に参りました。入れて下さい。どうぞ助けて下さい」と言って、どうして拒まれるでしょうか。「そうか、よく気がついた。よく来てくれた。さあ、お前の為に備えられた所に入りなさい」と迎えられる、これは当たり前であります。

ですから神様が、私たちに対して「この安息に入るように努力しよう」と言われても、これは「努力」ではないのです。何と言ったらよいでしょうか。「この安息に入れるのだから、素直になりなさい」という事です。「どうぞお願いします」と神様のもとに近づくならば、この永遠の命の生涯――何とも口で表現出来ない――神様が私たちの責任を持って、神様が私たちと直通状態になって下さる――そういう素晴らしい生涯を送らせて下さるのです。

ですから救いは、決してむつかしい事ではないのです。「私は熱心が足りないから、信仰年限ばかり長いけれども、さっぱり駄目でございます」と言われる方があるようですが、熱心は必要がないのです。神様が、すっかり用意を整えて「入りなさい」とおっしゃっているのに、今までぐずぐずしていたのですから、「御免なさい」「どうぞ入れて下さい」と恵みの御座に行ったらよいのです。そうすれば神様のみ心が私たちのうちに遂げられ、神様もお喜びになるし、私たち

も喜びます。これは入らないほうが、どうかしていると思います。

だいぶ前のことですが、ある人から「これこれこういう本があって、これは買わないほうが馬鹿だと思う」という話がありました。私がおその人を信用して、手紙を出して本を買ってみましたら、なかなか素晴らしい良い本でした。

神様は少々の良い本どころではありません。私たちに永遠の命の恵みを注ぎ、神様が私たちの嗣業となり、また、神様が私たちを嗣業として下さる(!) —— そういう生涯に私たちを入れて下さる。「入れ」と言われるのに入らなければ大損ですし、そんな事をあまりやっていると、神様の怒りを招く。

神様は憎いのではないのです。私たちを愛するが故に、ご自分の折角の恵みが無駄になり、時間が無駄になり、永久に過ぎ去って取り返しがつかなくなることを愛いて、「これでも分からないか。私に帰ってきなさい」と、ある時には引っ掻いたり、叩いたりすると書いてあります。引っ掻くとは、はしたない人間の行動のようではありますが、神様は愛の余り、妬みの余り——自分が極限まで愛しているのに、他のものにふらふらと迷って行くのを見ると、そうしなければおられないのです。

ある時にはイスラエルの民を殆ど殺してしまって、僅かに残った者を再び増やして神様の恵みを継がせるという事をなさいましたが、私たち個人についても、極端な場合には、手を切ったり足を切ったりなさる事があるかも知れない——

大地震で倒れたビルに挟まれた人を救い出す為に、むごい話ですが、足を切ったりします。このままでは潰れて死んでしまう。足を一本切っても命を救わなければならないという訳です。神様は愛の故に、私たちを救おうとして、いよいよの時は、そんな事をなさるかも知れない。だから「そんなにならないうちに、早く帰って来て欲しい」というのが、神様の今の焼けるような思いであります。

◆ルカ14:15/24朗読。これも神様の恵みと、それを拒む人の記事であります。ある所を読みますと、王様が王子の為に披露宴を催したというのですから、随分盛大なものだったと思います。あらかじめ招待状を出しておいたので、その人たちの所に僕を送って、「さあ、お出で下さい。用意が出来ました」と言わせました。ところが皆断るのです。

【招かれた人は晩餐に与られない】

「私は土地を買いましたので、行って見なければなりません。どうぞお許し下さい」こんにちで言いますなら、不動産業者と約束の時間がありますからという訳でしょう。頭を搔いてどこかに行ってしまったのです。他の人は「私は新しい牛五対（10頭）を買いましたので、それを調べに行くところです。どうぞお許し下さい」牛も高価なものですから、よくよく調べなければなりませんので——という訳です。もう一人の人は「私は妻を娶りました。今日は妻の実家のほうに行かねばならないので、一寸都合が悪くなりました。お許し下さい」と言って断ったのです。

「お許し下さい」と言う答えは逆だと思のです。何か苦役を強いられて「ちょっと来なさい」「いや、今日は行く事が出来ません。今日は勘弁して下さい」というのは違うのです。王様の宴会に招いて御馳走するという良いことです。招かれた人が「御免なさい」というのは、どういう事なのでしょう。王様のほうが「そうですか、せっかくのよい機会に来られないで、すみませんね」と言いたいようにあるのですが、その人たちは一様に断ったのです。

招待客が皆断るので、主人は怒って僕に対して、「町に行って、表通りからも、裏通りからも、貧しい人や体の不自由な人、目の見えない人、足の悪い人、とにかくここに連れて来なさい」と言うので、僕は出て行って、連れて来たのですが、まだ空席があります。

「それでは道に出て行って、無理やりにでも、通っている人を連れて来て、この家が一杯になるようにしなさい」「私は宣言する、招待されていた人で、わたしの晩餐にあずかる者はひとりもないであろう」と主人は怒ったのです。

この主人は、神様のひな型であります。私たちの為に盛大な晩餐が備えられて、完全に用意が来ています。私たちのする事と言ったら行くだけです。ユダヤの習慣では仕事着のまま行けば、入口で礼服（日本の礼服とは違うのでしょうか、ちょっとした上っ張りのようなものでしょう——これはイエス・キリストを意味します）を貸してくれるので、それを着て座ればよいと言うことです。あとは次から次に御馳走が出て来て、それを頂く訳です。

選民と言われるイスラエルの民はイエス・キリストを拒んで捨てられました。

こんにちユダヤ教というものがありますが、イエス様を信じません。「我々は神の選民である、あのイエスは救主でも何でもない、ラビ（当時の教師）の一人かも知れないが、救主ではない。それで神様どうぞ（旧約）聖書に約束された真の救主を下さい」と言って、今もお「まだ来ない、まだ来ない、さあ、早く来て下さい」と待っている——それがユダヤ教徒ですから、したがってイエス・キリストを通して与えられた神様の救いに入ることは出来ません。

神様は言うべき事は言い尽くされたのですから、その上でユダヤ人が「我々は信じない、我々はこうだ」と言えば、神様は「そうか、それなら信じた通りに行きなさい」と言われる。こうしてユダヤ人はイエス様を信じないまま、こんにちまでまいました。

ところが異邦人である私たち——本来、神の選民ではありません。救いとは縁のなかった者であります、イエス様が（異邦人も含めた）私たちすべての為に死んで、永遠の命に至る道となって下さった——と信じましたから、今こうして神様の豊かな晩餐にあずかっている訳であります。

◆私は今日、警戒されましたのは、これがまた、逆転するおそれがあるということ。不意に地震が起こってひっくり返るというような意味ではありません。私たちが情性で生きるようになって、「私は大体よい人間でした。私は異邦人だ

【除石律榮、感謝載石】

が選ばれて、今は信仰によって神の民でございます。私は結構でございます。もう大丈夫」と言って、初々しい心が無くなりますと、今度は、晩餐にあずかれない招待客になります。

「いや、私は結構です。私も、もう何十年の信者で、真面目で立派な信者でございますから、神様の恵みをそんなに求めなくても——御免なさい、ちょっと今日はお許し下さい」と逃げて行くかも知れない。人間というものは、いつの間にかかたくなになって行くのです。

例えば、神様から恵まれて感謝するのはよいのですが、感謝したその次の瞬間には、こだわりの大石になってきます。「昨日はあんなにして恵まれた、本当に良かった」——「昨日恵まれたから、今日はもうこれでよかろう。今日はもうそんなに神様を求めなくてもよいのではないか」という事になります。

ラザロが甦った時の事を思い出しますが、イエス様は「石を除けなさい」と言われました。しかしお姉さんたちは「ラザロは死んで四日もたった、暑い時で腐って臭くなっているに違いない」と言います。ついに石を除けますと「信じたら神の栄光を見る」と言われた通りに、ラザロは甦りました。

ラザロは感謝して、その後に設けられた感謝会の席に座っていました。ラザロの中にはもう新鮮な感謝がないのです。イエス様から甦らされて、死ぬべき者（と言うより、事実死んでいた者）が生かされたという感激がなくなっている——ラザロは大勢の中に座って居るだけだった、と書いてあります。

「石を除けたら栄光を見る」と言われ、不信仰の石を取り除けて「わあ、神様は素晴らしい、イエス様は神の子救主、死人を甦らせて下さった！」と感激した。その感激と「ああ、これは良かった」と思った感謝は、次の瞬間には、その人にとって不信仰の大石のように、あるいは何か汚いものようになってしまう。

それを見ました時に、私は神様の前にいつでも新鮮な感謝をしたいと思いました。神様のほうも私たちに対して、いつでも新鮮な御馳走——干からびた御馳走を作って招く人はありません——新しい立派なものを作って、私たちを招こうとしていらっしゃる。ですからいつでも新鮮な気持ちで、神様の前に出なければならぬと教えられました。

それも自分で新鮮になろう、なろうとねじを巻いても、体を打ち叩いてもなる事は出来ないものであって、「安息に入る為に大祭司の所にはばからずに来なさい」とおっしゃっているのですから、ありのまま、その方の所へ行くことであります。

これもイエス様が私たちに与えて下さる、大きな救いの一つであります。私たちはマンネリになって、かさぶたが出来るようにだんだん感激が無くなって行くのですが、それをいつでも新鮮にして下さるのは、イエス様であります。イエス様は私の為に、常に十字架の上に流された血潮を示して「このようにして私はお前の為に十字架にかかった。私は今日、お前を生かす。お前は今日、私の所に来て、新鮮な感激をもって生きなさい。神様の命にあずかりなさい」と励まして下さいます。

「招かれた人で、わたしの晩餐のあずかる者はひとりもない」——招かれる



のが当然と思う招待客にならないで、「私のような者も招いて下さるのですか！」と言う謙虚な路傍の人となり、感謝をもって神様の恵みにあずかり、絶えずそれを保ち続けることが出来るように、イエス様に近づきたいと思うのであります。

◆「わたしたちはまた、神と共に働く者として、あなたがたに勤める。神の恵みをいたずらに受けてはならない。神はこう言われる。『わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞きいれ、救の日にあなたを助けた』。見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である」(2コリント6:1/2)

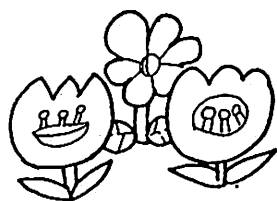
今、神様は私共に新鮮な(永遠の)命の恵みを与えようとしていらっしゃる。しかもその時は残りが少ないかもしれない。延ばしに延ばされた特別な時期であって(神様は別に人間のせつかけのような方ではありませんが)時は満ちて、過ぎようとしているのですから、神様は何とかして、「今という時に――」と今朝も私たちに迫っていらっしゃると思いました。

ですから私はこの時に、絶えず永遠の命の恵みを頂き、新しく新しく生かして頂けるように、たえず大祭司のもとに近づいて、時期を得た助けを頂きたい――そのように願っている者であります。そうするならば神様は、喜んで私たちに安息に入れて下さる。安息というのは、ずっとそこに安息という状態があって、そこに入ったら「これでもうよい」というようなものではありません。

私たちは何十年か前にこの地上に命を与えられて以来、ずっとひとりでの生きているわけではありません。いつも新しく食物を食べ、成長し、色々な生命活動を続けて来たから、今、生きているのであって、そのように神様は常に私たちを顧みて、時期を得た助けを内外に施して、新しく新しく導こうとしていらっしゃる。

ですから今日も、神様の恵みがどんなに素晴らしいものであるかを自覚すると共に、今は神様が私たちに働こうとしていらっしゃる、かけがいの無い時であるという事を心にとめて、永遠の命の恵みに与かりたいものと思います。ご一緒にお祈りしましょう。

(1988.1.2 戸畑教会新年聖会 4)



## 第五章

### 人の命は持ち物によらない (全世界を儲けても命を損したら)

【審判者なる神を恐れよ】	73
【毛髪の数も知る神】	74
【聖霊を汚すか尊ぶか】	74
【人の命は持ち物によらない】	75
【全世界を儲けても】	76
【神の報いを渴望したモーセ】	77
【「知る」と「領有」】	78
【神様の尺度、人の尺度】	79
【今はどんな時か】	81
【今晚の分からぬ身】	81

「自分のために宝を積んで神に対して富まない者は、これと同じである」

(ルカ12:21)

◆今今お読みしましたルカ12章には、色々な例話が記されています。パリサイ人のパン種に気を付けなさいという話、5羽2錢で売られている雀も、忘れられていないということ、あるいは御使に逆らう者、聖霊を汚す者の話、遺産分配のことから愚かな金持ちの話——色々あります。これらはみな神様を恐れなさいという事であります。神様を恐れ敬うという事は、どんなに尊いことであるか、そうでなければ神様の前に報いを失う、そうするとどんなに物を蓄えていても何にもならないという事です。

最初の偽善の問題は、パリサイ人やサドカイ人は偽善者ですから、例えば盃やお盆の外側を清めるが、内側は食欲と邪悪で満ちている、即ち彼らは上辺では正しい行いをして、取り澄ましているが、内側は汚いものが一杯入っている。偽善とは、神様の目の前に行動するのではなくて、人間の目を恐れる事です。

人の目の前にきれいに立派にする、そして「自分たちはこういう者でございます」という。ところが神様の目によれば全部見通しです。覆い被されているものは全部現れてまいります。隠れているものは必ず知られてきます。暗闇で話したことは全部明るみで聞かれます。密室で囁かれたことは屋根の上で言い広められます。

ダビデがバテシバの件で罪を犯した時に、神様は「彼の罪は大勢の人の見ている目の前で、日の下にさらされるであろう」と言われました。その預言の通りに、実子アブサロムが父ダビデの命を狙い、父の妻たちを辱めるという事が、公然と行われました。

神様は目に見える世界よりも、もっと根本の事をおっしゃっていらっしゃる、「体を殺しても、それ以上何も出来ないものを恐れる事はいらぬ」と言われるのです。私たちは「命あってのものだね」と、体が死んでしまったら大変と思いますが、神様は「体を殺すだけなら、少しも怖いことはない。真に恐るべき方は、殺したあとで、更に地獄に投げ込む権威のあるかた、これこそ真に恐るべき方である」とおっしゃるのです。

神様は、審判者でいらっしゃる。また、最後に物事を決定する方であって、その決定には誰も口出しも、手出しも出来ない、そういう方でいらっしゃる。だから私たちは、人の目の前ではなくて、神様の前にどうあるかという事を、絶えず考えなければならないのであります。

【手廻の数も知る神】

◆そんな偉大な方ならば、私たちのような人間は10束ひとからげにして、どうでもよいと無視されるか、というと決してそうではなくて、人間どころか雀1羽も神様の前に忘れられない。文語訳聖書では、5羽の雀が2銭で売られているのではないかと書いてありました。昔の2銭ですから、1万倍にしても200円ですか、大体そんなものでしょう——（中略）——何千羽の雀など、どれも同じ顔でどれがどれか分からないと思いますが、神様はその1羽も忘れられない。

養鶏をしている人は1羽々々の鶏を見て、「あれはこれだ」と顔を識別するという事でした。又、大分県高崎山の日本猿の「えさ場」に行きますと、1頭1頭の猿に名前を付けて観察している人がいますが、私たちは神様から雀よりも、猿よりも、あるいは鶏よりもはるかに優れたものとして造られていますから、決して忘れられないのです。

「神様は頭の髪の毛までも皆数えられている」とあります。私たちは櫛けずって、毛が抜けたり、気が付かないうちに生えてきたりしますが、その数を「現在何十万本である」と正確に知っている人はないでしょう。しかし神様はそれをことごとく知り尽くしていらっしゃるのです。体の内部についてもそうでしょう。私たちの体には細胞が50兆とか、60兆あるとか言われますが、神様はそれぞれにきちっと命を与えて、ひとつひとつを設計図に従って複製し、増殖して、いらぬ物を捨てて行って、現在差し引き何個あると知り尽くされている方でありませう。

私たちの体ばかりではありません。天地万物あらゆる現象の大より小に至るまで、すべての量・質ともに知り尽くしておられます。その方を恐れ受け入れる事がなければ、決して神様から「よし」とされ、報われることは出来ませう。

【聖霊を汚すか尊ぶか】

◆「だれでも人の前でわたしを受けいれる者を、人の子も神の使たちの前で受けいれるであろう。しかし、人の前でわたしを拒む者は、神の使たちの前で拒まれるであろう。また、人の子に言い逆らう者はゆるされるであろうが、聖霊をけ

がす者はゆるされることはない」(ルカ12:8/10)

どんなに不従順で、たとい人の子(イエス様)に言い逆らったとしても「御免なさい」と信ずれば許されるが、聖霊を汚すならば——聖霊をけがすとは、神様がイエス様を立てて、その(十字架の)血の故に、すべての罪を許すとおっしゃる、(これを私たちに当てはめて下さるのは、御霊の働きによるものですが)それを拒む——「何をそんなことがあるものか」と拒みますと、許される道を自分が拒んでしまいますから、永久に許されることはありません。ですから決してそういう事がないように、とされている訳であります。

ここまでのところは逆らう話ですが、聖霊を尊び従うならばどうなるか——どんな迫害や困難の中で、どこに引かれて行って弁明するときも、決して思い煩う必要はない——聖霊がその時々を教えて下さると記されています。

◆これらの事があったあとで、イエス様はある人から遺産の分配について口添えを頼まれました。これはよくある事であって、「先生こういう事情です。兄がこんな事を言って、本当に困っています。どうか兄にちょっと言って下さい」と言う訳です。「それは兄が悪い」と言いますと、「先生がこんなに言われた、だから神様のみ心だ」と、それをふり翳して利用されるのでしょう。「遺産を分けてくれるように」とは「兄貴が欲張りで困りますから、私にもっと分けてくれるように、言って頂きたい」と言う訳です。

イエス様は「私はあなたがたの家の裁判人でも、分配人でもない——ただ一つ言えることは、『人の命(幸福)は持ち物(の多少)にはよらない』」と言われました。人間は互いに張り合って、「俺のほうがちょっと余計に物を持っている。お前は駄目だ」とやるかも知れませんが、神様の前には持ち物の多少は問題ではありません。たくさん物を持っているから、私に命をたくさん下さい、あるいは良い命を下さいと言っても、これは通用しません。

神様の前における命は(今年の標語にありますように)「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ3:16)とある通りで、御子を信じる者に、神様が(永遠の命を)与えて下さるのであって、その時に祝福として

【人の命は持ち物によらない】

富むことが出来る——富む事によって幸福になると考えるのは逆であります。それでも人々は分からなかったのでしょうか、イエス様は一つの譬をお話になりました。

金持ちの畑が豊作で、穀物や食料をしまう事が出来なくなったと言うのです。農地とは有難いもので、僅かな土地でも生産力は大きいものですが、金持ちの広い畑が豊作ですから、次々に生産物が運び込まれて来ても、しまって置く所がない。そこでその人は「今までの蔵を壊して大きいものを建てて、それに全部しまっておこう、これで当分は安全だ。食い飲みして楽しく遊ぼう」と思ったのです。ところが神様が「愚か者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そうしたら、お前の用意したものは誰のものになるか」とおっしゃいました。

ですから物を持っているという事は、私たちの本質的な幸福とは関係がないのです。神様に覚えられ、「よし」とされて永遠の命を与えられる——これは物の形で説明は出来ませんが——神様が私たちの責任を持って下さって、私たちの父となり、私たちを子供として下さる——そうなりますと、少々物が有るとか、無いとかは関係がないのであって、むしろ物がたくさん有って「これで大丈夫」と思うことは、危険なことでもあります。

◆マタイ 16:24/28朗読。25/26 節「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう。たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか」これは、有名な「弟子たちの信仰告白」のあとの事ですが、ここに逆説（パラドックス）が記されています。見たところ逆のようであるが、実はそれが真理であると言うものです。自分を捨ててイエス様に従うと、命が与えられる。しかし自分の命を大事にしていると、それが失われるという事です。

それでイエス様は「たとい人が自分の事を一生懸命に考え、物をたくさん蓄えれば幸福になるのではないかと、全世界をもうける——（実際にそんな人はありません。世界一の金持ちが、何百億ドル持っていると言っても、神様の富の前には取るに足りない僅かなものです）仮にそんな人があったとしても、自分の命

を損したら何の得になるか——神様から『お前はそれで終りだよ』と言われたら、たくさん物を持っていても何にもならないではないか』と言われたのです。

本当の欲張りとは、一体どういうものだろうかと思はれました。それは人の報いではなく、神様からの報いを望む人、その人が真の富める者だと思つた訳です。目に見えるものはやがて消え失せてしまいます。

◆ヘブル11:23/27朗読。26節「キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見ていたからである」モーセはイスラエル民族がエジプトにおいて奴隷であった時代に、レビ部族の子供として生まれました。その当時エジプト王パロは、イスラエル人が強大になって行くのを恐れて、生れた男の子を皆殺せ、という命令を出していました。モーセの両親は、これを3ヶ月間隠していましたが、いよいよ泣き声が大きくなったのでしよう、隠しおおせなくなったので、葦で編んだ小船(?) (籠のような物にピッチを塗って、水が入らないようにしたもの) に、赤子を寝かせてナイル川に流した訳です。

流すと言っても、勢いよく水が流れている本流ではなくて、岸近くに水草がたくさん生えて、水がどよんでいる所に流したらいい。そこへたまたまパロの娘が水浴にきてそれを見付け、開いて見ると、赤ん坊が泣いたものですから、「可愛い」という訳でそれを貰って行こうとした。

それを物かげから見ているモーセ(赤子)の姉ミリアムが走って行って、「王女様、その赤ん坊を連れて行っても、お困りでしょうから私が乳母を呼んで来ましょうか」と言って、自分の母(つまり赤ん坊の実母)を呼んできました。そこで王女は「あなたはお乳が出るのだったらこの子を預けますから、育てて私のところに連れて来て下さい、養育費は私が出しますから」そういう事でモーセは成長して王宮に引き取られました。その後、40歳まで、エジプトの王宮で王女の子供として、帝王学を学んだ訳でしょう。様々な知恵も知識も技術も、すべてのものを身に付けたと思われまふ。体力的にもかなり鍛錬されたことでしょう。

40歳になった頃、彼は自分がイスラエル人である事を知って、パロの娘の子と言われることを拒絶して、王宮を飛び出した訳です。もし王宮に留まれば、どん



な贅沢も出来たでしょうが、彼は「罪のはかない歡樂にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待される事を選び」、たとい「キリストのゆえにどんなそしりを受けても、それはエジプトの宝にまさる富である」と考えたからです。

王宮を抜け出すと、早速奴隷を打ち叩いているエジプト人の監督をねじ伏せて打ち殺して、(先程、体力的にもかなり鍛われていたに違いないと言ったのは、ここのことです) 砂に埋めました。

あくる日、また現場に行くと、今度は奴隷(イスラエル人)同士が喧嘩をしている。片方が無茶な事を言って、相手を苛めているので「なぜそんな事をするか」と言うと、「誰がお前を裁判人にしたか。昨日、エジプト人の監督を殺したように私を殺す気か」と言いましたもので、モーセは昨日の件が発覚したに違いないと恐れてエジプトを逃げ出しました。そしてミデアンの地(こんにちのシナイ半島の東?)に入り、その祭司の家に寄留し、やがてその娘と結婚しました。

80歳になって、ある日彼が羊の群れを連れてホレブの山に行きましたところ、そこで神様の召しを受けて、エジプトに遣わされた訳であります。そのようにしてモーセの120年の生涯は、40年ずつ三つに分かれています。

①エジプト王宮にいた時代、

②エジプトから逃げてミデアンにいた時代、

③エジプトに遣わされイスラエルを導き出してカナン(の直前)まで連れて行った時代、

と分かりますが、彼は最初の40年で罪のはかない歡樂の生涯を捨てて、何とかして神様に従いたい。たといどんな苦勞があってもよい、神様から報われる生涯を送りたいと切望してまいりました。

私はそれを見ました時に、モーセは本当の意味で欲張りだな、と思ったのです。

【「知る」と「領有」】  
人間は、お金を溜めるとか、人を蹴落としてでも昇進する——それらは悪い欲張りですが、自分を捨て、全世界を捨てても、神様の報いを望むというのは、素晴らしい(良い意味の)欲張り生涯だと教えられました。

◆マタイ13:44/46「天国は、畑に隠してある宝のようなものである。人がそれを見つけると隠しておき、喜びのあまり、行って持ち物をみな売りはらい、そし

てその畑を買うのである。また天国は、良い真珠を捜している商人のようなものである。高価な真珠一個を見いだすと、行って持ち物をみな売りはらい、そしてこれを買うのである」これはいずれも宝の話です。ある人は畑に素晴らしい宝が隠れている事を知ると、全財産を売り払って、その畑を買う。又ある人は高価な真珠を探していて、素晴らしいものを見付けると、これも自分の持ち物を全部売り払って買う。これは非常に確かな「賭」なのです。素晴らしい宝であることははっきりしています。あるいは非常に高価なものを買うという事は、次に誰かがもっと高く買ってくれるのでしょうか。ですから買う訳です。天国についての譬ですから、勿論目に見える宝のことを言われているではありません。

この人たちもまた、大変な欲張りであります。自分の一切をなげうち、全世界を投げ出してでも、神様の前に値打ちある物を買って、自分の物にするという事です。字引をひいて見ますと「知る」と「領有する」とは同じ語源から出ているそうです。「領」の字を「しる」と読む事も出来るそうです。

そこで私が考えましたのは、「知る」と「領有する」とは、同じ語源かも知れないが、どういう関係が有るだろうかと言うことです。その結果、分かりましたことは、知ったことに対して、自分の一切を賭けて行く、それによって、それを自分の物として領有することが出来る、と教えられました。

ですから今年、神様が私たちに対して「とこしえの命を与えて下さる」という事を知らせて下さいました。「今がその時である」と神様は奥義を開いて下さいました。あと、こちらがする事は何かと言うと、それに自分が賭ける——神様がそんなに素晴らしいものを下さる、もうその時が無い、今、求めなさいとおっしゃるので、それに従って自分の生涯を傾けて行く——すると神様はそれを決して軽んじられません。必ず助けて、私たちの生涯を、モーセと同じように全うさせて下さると教えられた訳です。

◆「あらゆる食欲に対してよくよく警戒しなさい。たといたくさん物を持っていても、人のいのちは、持ち物にはよらないのである」(ルカ12:15)

お正月に、ある人の評論が載っていました。「年の初めに豊かさを考える」という話ですが、持ち物が豊になるという事は果てしが無い。そしてたえず拡大し

【神様の尺度、人の尺度】

ていかないと、不安になってくる。又、豊かになると、他人（他国）を差別するようになる——日本は、ヨーロッパ諸国を追い抜かれた小国という目で見はじめた——とありました。

日本人は残念なことに神様を恐れるという事がないので、自分が少し豊かになると、人を差別する。「人の命は持ち物によらない」のに、何という事だろうかと思いますが、これは万人の内に秘められた肉性かも知れません。

しかし神様の前では、物の多少や見掛けは問題ではありません。貧しい人は神様から捨てられた人だ——それは誤解であります。神様が祝福して下さったら豊かになる筈だ。だからあの人が貧乏なのは、神様が祝福して下さらないからだ、クリスチャンと言ってもつまらない、と言う人がありますが、それは間違いであります。

神様の前に喜ばれる人には、神様が命を与えと言われる。「有難うございます」と頂いてまいりますならば、それは神様の前に最も富める人と認められます。人間の目と、神様の目は全然違います。イエス様はレプタ二つを献金箱に投げ入れた婦人をさして、「この教会にいる人たちの中で、最大の捧げ物をした人である」と言われました。

先程の金持ちは「お前の魂は今晚取り去られる」と言われましたが——昔ベルシャザル王様は、神様から「メネ・メネ・テケル・ウパルシン」と言われました。その意味は、メネは「お前の治世をずっと数えて、これで数え終った」。テケルとは計ったという意味で「お前は王様としての目方が足りない（だから今晚限り王位を退けてしまう）」と宣言された訳ですが、その晩のうちに、彼は殺されて、国は二つに分かれたと書いてあります。

神様の御覧になる所と、人間の見る所は違うということです。神様は人間の歴史をも動かす方、その上に手を置かれる全権者、審判者でいらっしやいます。その方が「永遠の命を与えよう」とおっしゃるのですから、「はい、有難うございます。イエス様が私の所に来て下さって、かけがいのない永遠の命を与え、神様の前に最も富める者とし、尊ばれる者として、受け入れて下さる——有難うございます」と今受け入れる者になりたいと思いました。

◆「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日」とあります。「時」は、いつまでも同じように流れて行くように思いますが、決してそうではありません。「時」は神様の前において、はじめに造られ、ある時まで続きますが、それで終りになる。「時」は、神様が万物をお造りになるまでは無かった訳で、ある時が来れば終る訳です。

「私はアルパであり、オメガである——最初であり、最後である」とおっしゃるという事は、そのあとさきは無い訳です。しかもその間も同じように流れているのではなくて、神様がある時まで、また、次にある時までと区切られます。今は「時が満ちた」とおっしゃったあと、忍ばれ、延ばされている時であります。

ヒゼキヤ王様は、15年命を延ばされて、神様の前に高ぶったりいたしました。私たちが果たしてどうでしょうか。神様から時を延ばされ、命を保たれて「もうお前の命の終りはそこまで来ているのだが——もうしばらく、もうしばらく」と待たれている今、「なに、神様の裁きなんて——万物は少しも変わってはいない。当分自分勝手なことをして、もし、信仰が必要なら、死ぬ直前にイエス様、信じます、と言って天国に行こう。それが一番とくだ」と、どうしてそんな事が言えるでしょうか。

神様は「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日」とおっしゃいますが、私たちは誰も明日のことを知りません。明日どこか「今晚、お前の命を取られたら、どうするのか」と神様は迫っておられます。

◆ある伝道者が、伝道集会に行ったところ、大変偉い人がいて、「先生、そんなことおっしゃっても、私は死ぬことなんか恐れませんが」と言うものですから、その先生が「そうですか、それでは私と一つ約束をして欲しい。今晚、あなたが家に帰ったら『今晚、私は必ず死ぬ。死んだら必ず地獄に行く』と100回書いてほしい。本当に100回ですよ、約束して下さい」と言って、別れたそうです。

家に帰った人は、「何のそれくらい」と書きはじめたところが、何遍か書いたら、もう書けなくなったのです。「今晚、必ず死ぬ。死んだら必ず地獄に行く」と迫られ、「先生、御免なさい。私は悪うございました。どうぞ救われるように、お祈りして下さい」と言って来たそうであります。

私たちには「今」が、それほど切迫していません。「何、まだずうっと生きて行く。私は何歳だから、平均寿命70何歳まで、あといくらぐらいある」と思っているから、真剣にならないのですが、神様は「今だよ」とおっしゃる——という事は、明日は分からない、いや今晚が分からない。私たちは実は、そういう時に置かれているのです。そう考えればそうだ、というのではない、考えなくても実際にそうなのですから。

ですから自分の為に宝を積んで、神に対して富まないならば、どうなるか分からないのです。私は、今日ここで、神様から真に豊かな者にして頂く為に、御子イエス様をお受けして、約束の永遠の命を豊かに満たして頂きたい、そのように願っている者であります。ご一緒にお祈りしましょう。

(1988.1.2 戸畑教会新年聖会 5)

## 第六章

### 信仰によって生きよ (恵みの御霊を侮る者は重刑に価する)

【神様から喜ばれるには】	85
【信仰のあり方が鍵】	87
【見えるものは問題ではない】	88
【神の形に造られた人間の墮落】	89
【緊急事態にぐずぐず言っていたら】	91
【神の道と人の道】	92
【新しい生きた道】	93
【御言葉を無視する者は死刑以上】	94
【信仰に立って命を得よう】	96
【神様の求めはただ一つ】	97

「『わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない』。しかしわたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立って、いのちを得る者である」(ヘブル10:38/39)

◆ここには私たちの信仰にとって最も重要な「義人は、信仰によって生きる」というお言葉が書いてあります。これはハバクク書、あるいはローマ人への手紙にもあります。

私たちは神様の事をなかなか知ることが出来ません。一体どうする事が、本当に神様に喜ばれることなのだろうか。逆にどうする事が神様に喜ばれないのだろうか——人間の世界の「良い」「悪い」とは違いますから、「それは誰が見ても良いことではないですか。神様、喜んで下さい」と言って、押し付けるような事をするとう重大な間違いを犯します。

最初にそういう事をしたのは、創世記 4章に記されているカインという人です。アダムの子供で、アベルの兄であったカインは、農夫となって一生懸命に働き、自分の働きの実(つまり農作物)をもって、神様に対する供え物としました。「神様、どうですか、こんなに立派な物ができました。これを献げましょう、さあ、喜んで下さい」という訳です。しかし、彼は自分の熱心・努力も神様の恵みである事を、それほど感謝していなかったのではないか。神様はそれを退けられました。

弟のアベルは羊飼いですから、自分の群のうちから初子と肥えたものを献げました。これは自分の働きによらず、イエス様(神の小羊)の血によって礼拝させて頂けるといふ信仰告白でした。

二人の供え物は、職業がら自然なように見えますが、神様は、アベルのほうを受け入れて、カインを退けられましたので、カインは妬んで、野原でアベルと一緒にになった時に、弟を刺し殺して埋めてしまいました。これは聖書に記された最初の殺人事件であります。

彼(カイン)は神様から問われても心をかたくなにして、追放された訳ですが、これらを通して私たちは神様の前に、何が喜ばれ、何が退けられるか、知ることが出来ます。

「神様から喜ばれるには」

私たちは初めての人と会う時には、色々と調べて行きます。特にインタビューして、大切な取材でもしよと思えば、予めその人について調べ、その人の書いた本などをよく読んで、どういう事をどういうふうに質問したら、よく話してくれるだろうか。

また、自分は取材をするのですから、あとから自分が書いたものを読む人々が、どういう事を聞きたがっているだろうか——そういう事を持って行く訳であります。

私たちが人間に対してさえこれほどするならば、神様についてどれ程尋ね求めでも足りないと思います。神様は一体どういう事を喜ばれるだろうか、どういう事をしたら、神様は喜んで下さるのだろうか、どういう事をしたらお嫌いになる（あるいは刑罰を加えられる）のだろうかという事を知らなければなりません。幸いなことにここを読みますと、神様のお気持ちがはっきり書いてある訳です。

それは「わが義人は、信仰によって生きる」——これはプラスの面です。ところが神様の前に正しい人——正しいと言っても、この世の中の正しいのとは違います。この世の中で正しいと言え、人間の約束事に違反していないという事であって、約束事はしょっちゅう変ります——例えば、交通法規ですと、この道路は制限速度が40キロ、ここは60キロ、この道は一方通行とか、たえず変ります。ですから、昔はこの道はこう行けた、と思って入って行くと、そこに進入禁止の標識が立っていたりします。長い目で見たらクルクル変っている訳です。

しかし、神様がお決めになった事は変りません。私が正しいと認めるのは「信仰によって生きる人である」——その人は私の喜ぶところ、受け入れるところであると言われます。

その次は逆の場合であって、「もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」——神様が喜ばないと言われるのは重大なことです。ですから最後の節で「わたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立って、いのちを得る者である——命を得る者となろうではないか。さあ、このように行くではないか」と勧められている訳です。

◆鍵はただ一つ「信仰」です。信仰によって生きるのか、それともそうでない



のか、それによって神様の前に受け入れられるか、捨てられるかが決まってまいります。

信仰と一口で言っても、ある人々は初詣のように、どこかに行って、チャリンとお金を投げて、ガラガラと鳴らして、手を合わせる——それが信仰だろうと簡単に考えます。しかし、それは形だけのことであって、本当にその人の中にどういう気持ちがあるのでしょうか？大勢の人が行くから、自分も行って見ようというそれだけの事ではないでしょうか。

しかし神様は真実な生ける方であって、「信仰とは、望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認することである」と明快におっしゃっています。将来の遠いことであるかも知れませんが、必ずそうなると確信する。そして、まだ見ていない事実を確認する——それが信仰であると言われるのです。

まだそこまで行ってない、そこまでなっていない、あるいは自分がそこまで到達出来ないが、それは必ずそうなっていると確信する。まだ自分の手で触っていない、見ていないけれど、それは事実そこに有る——そのようになっていると認める。これは幻ではない、神様が必ずそうするとおっしゃるので、自分がずっと行けばそうになっている訳です。

私はかつて軍艦に乗って大砲を打つ訓練をしたものです。大砲は目標より少し横を向いている訳です。「どーん」と打って、相手の船がはしって来ますと、弾がこう行って、丁度そこで出会って命中します。飛行機の射撃でもそうでしょう。（発射する時点では）何もない所に向けて発射する訳です。

「望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認する」とは、幻を見る訳ではなく、神様が必ずやって下さるから、私はそこを狙いますと、どんと行けば確かに命中しますから、神様は真実だったと分かります。そのように生きる人が神様から喜ばれる人であって、そうでない人、即ち「まだ見えない事は有るかどうかわからない、神様が言われても、どうかわからない、そんなものは信じない」と言う人は神様から喜ばれない人であります。

人は「この目で見なければ承知しない」と言いますが、人間の目はいい加減なものであって、自分の目で見たとと言っても、それが本当にそこに有ったかどうか

分かりません。そういう事はたくさん例があります。

色々な光学技術を用いて、そこに無いものを立体的に見せるという事が出来ませんが、人間の目はたやすくごまかされます。繋がっていないものを繋がっているように見せる事は簡単に出来ます。テレビでも8ミリでもそうですが、1秒間に15, 16回もばっばっばと画像を切り替えると、切れ目が見えませんが繋がって動くように見えます。

ですから人間が「神様、そんな事をおっしゃっても、それは分かりません。私が確かめなければ——」と言っても、その人間の目自体が大変あやしいものであります。ですから物事の真理は、神様の手の内に有るのであって、神様が「こうする」とおっしゃったら、そうなるし、「そうしない」とおっしゃたらならないのです。

神様が「ひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」とおっしゃったら、そのままそれを頂戴して、「はい、有難うございます。こんな者にもイエス様の血によって永遠の命を豊かに与えて下さるから、有難うございます」と、まだ自分の魂の内に何の変化も起らないようであっても、「イエス様がそうして下さるなら、私の心の内に永遠の命を満たして下さる、有難う御座います」と信頼していく、そうすると、神様は喜んでその通りにして下さるのです。

「何、そんなこと分かるものか」と言っている人は、永久になりません。ならないから「やっぱり駄目ではないか」という事になりますが、その人の信仰の通りになっている訳です。

【見えるものは問題ではない】 ◆「わが義人は信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」——実は見えるものは問題ではないのです。私たちにあって確かに食べるものも必要ですし、着るものも必要です。住む所も必要ですが、信仰によって生きる時に、すべてのものが満たされるのです。神様のことを抜きにして、この地上のこと、食べること、飲むこと、着ること、あるいはお金を溜めた、商売が儲かったという事だけを追い求めて、「ああ、良かった。神様を拜んでいたから神様が助けて下さった、有難うございました」と言う人は間違いで

あります。

「自分の為に宝を積んで、神に対して富まない者はこれと同じである」とありますが、神様から認められるものがなかったら、ぼーっと消えてしまいます。

「お前の魂は今晚取られてしまう。そうしたらどうなるか」と言われれば、そのまま永久に忘れられてしまうのであります。

ですから目に見えるものによって一喜一憂するのは、本当に愚かな事であって、目に見えるものが何か出て来て「わあ、恵まれた」と言い、少し思うように行かないと「これは呪われたのではないか」と考える――しかし、そんなことは問題ではありません。

神様の祝福を受けるなら、目の前のことは問題ではないし、また逆に神様の祝福を止どめられますならば、あとが怖いのです。もし命に与かることがなくて、永遠の滅びに落ちたなら、私たちはどうする事も出来ません。永久に苦しまなければならぬのであります。

◆「信仰を捨てる」ほうの例は、このページのすぐ上段に書いてあります。ヘブル10:28/31朗読。「神様とは何と喧しい方だろう。人に罰を当てる恐ろしい方だ――そんなややこしい方にはかわりを付けないほうが無難だ。教会に行くのを止めておこう」と、ある人は言うかも知れません。

しかし神様はそんな事を言われている訳でないのであって、今年の標語にありますように、何としても私たちに永遠の命を与えなくてはならない。そういう切なる思いを持っていらっしゃるのです。

何故かと言うと、私たちは本当は、永遠の命を満たされなければ生きて行くことが出来ないのです。動物的に生きて行くことは出来るかも知れません。食べて、飲んで、子供を産んで、年をとって、死んで行く――それだけでは人間として生きているのかどう分かりません。犬や猫とあまり変わりません。「人間だって猿の一種だから、そんなものさ」とある人は思いますが、ところがそうではないのです。

人は万物の霊長として尊く造られ、魂を与えられました。なるほど形は猿やチンパンジーに似ていますが、彼らは目に見えない世界を知りませんし、まして、

眞の神様を知る事は出来ません。それは人が神の形に尊く造られ、命の息を吹き入れられて、「人すなわち、生けるものとなりぬ」とあるからであります。

これは人間の身勝手ではありません。ある人々は「人間は高ぶっている——生きとし生けるものはみな同じ筈なのに、人間だけが高ぶって、動物を殺したり、束縛したり——」と言う人がありますが、神様は私たちを彼らと違うものとして造られたという事は事実であります。

ですから「野の花を見よ、空の鳥を見よ、あれを美しく養って保っていらっしゃる方は、あなたがたを遥かにすぐれたものとして造り、責任を持って下さらないであろうか。だから思い煩うことはないではないか」と言われています。神様は何とかして私たちが、目的に適って生きる者となるように願っておられる訳であります。

だいぶ前のことですが、ヒマラヤの山中で、狼に育てられた少女がありました。人間の家に収容され、肉体的にはかなり成長して、当然立って歩ける筈ですが、いつまでも四つ足で歩いて、犬食いで食べる。人が近付くと「うーっ」と狼のようにうなっていました。収容した人が何とかして人間として生かそうと、随分苦労されたらしいのですが、ほとんど言葉を話すことも出来ないまま、年若くして死んだという事です。

それと同じように私たちが、神の形に造られ、命を与えられて、目に見えない方を敬っていく——エデンの園でそうであったように、神様と共にある生活を送らせようと思ったのに、背きに背いてとうとう神様を無視するようになり、「私は猿の子孫だ」というようになってしまいました。そして動物と同じように生きることしか知らなくなりました。

ですから神様は、そういう人間を再びご自分に帰らせて、神の形に造られた尊い人間として生かそうと、大変なご苦労をなされた訳であります。すなわち、ご自分のひとり子イエス様を、この地上に送って、私たちのすべての背きの罪を許し、私たちを再び命（→永遠の命）に立ち返らせようとされました。それが今年の標語であります。

◆神様は「そのうちに」というのんびりした事は言われません。無為に時間を

引き延ばして待つ訳にはいきません。人が生きるか、死ぬかという時に、「そのうちに——何とか生きてらいいけれども、生きなかつたらしかたがない」とは言われません。

家内の兄の子供が軽度の心臓奇形で手術した事があります。当時の技術では体温をずっと下げ、代謝を押さえておいて、心臓を完全に止めた状態で手術をしました。(人工心臓などを用いませんでした) 終ってから電気刺激によって心臓にショックを与えて再び動かす。そういうことをやった訳であります。

その時に、家内の兄は自分の心臓が止まったように堪らなかったと言います。心臓にショックを与えて、再び動けばよいけれども、動かなかつたらどうしようか。何とかして動いてほしいという訳で、真剣に祈りました。神様の憐れみで手術は成功し、今は元気になっております。

相当に進歩した医療技術によって支えられているのですから、安心してよい訳なのですが、それでも自分が死ぬように苦労したと言います。

神様は私たちの(親子どころではない)造り主であって、ご自分の形に尊く造って命を保って下さっています。それが全く死んだ状態——それよりもっと悪い状態、狼のような、あるいは動物のような状態になっているものを、一刻も早く引き返そうとしておられるのですから、「まあ、当分こういうことでも、仕方がない」そんなことは言われません。

何としても、私たちを神様に引き返そうと、ご自分のひとり子を十字架につけて、私たちの罪を処分して下さいました。神様は全能者でいらっしゃいますから、神様が「こうする」とおっしゃったら、みな従うべきであります。「ああ、そうですか。全能者がそうお定めになったのですから、私は救われ、罪許され、永遠の命にあずかり、神様と共に生活することが出来ますから、有難うございます」と、当然言うべきなのですが、なかなか人はそう言いません。

「いいえ、神様、そうはおっしゃいますが、私はそんな人間ではありません。月とスッポンのように——私は泥水の中でばちやばちややっている泥亀のように駄目な人間ですから、とても救われません。そのお話はだれかに持って行って下さい。私は諦めます」そういう人がたくさんいます。

ですから神様は、やきもきして、こんなに私が言っているのに、どうして聞いてくれないのか。もし私の恵みの言葉を聞かないならば——もし従わないと、そのようにならないばかりか、さばかれます。非常によく切れる刃物は、料理には使いやすいでしょうが、悪用すれば凶器となります。

聖書のみ言葉は一面では、私たちの患部をえぐり取って、永遠の命にあずかせて下さる「生かす」メスにもなりますし、逆に従わない者にとっては、刑罰に陥れる恐ろしい「さばき」のメスになります。ですから神様は、そうならないように何とかして私の言うことを聞いて欲しいと願っておられる訳であります。

◆「わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」

「神の道と人の道」 私たちは自分なりに長年信仰をもって来ましたが、神様の前に喜ばれることと、嫌われるということは分かっていると思います。神様に一生懸命に仕えて、神様を第一にしたらよいのでしょう。神様のお嫌いになることは、こういうこと、ああいうことでしょう——ところが、良くここを見ますと、神様のおっしゃることと、人間の考えることは違う訳です。

それは前にも出て来ましたが、「信仰によって生きる人」であるとはっきりおっしゃっています。ですから神様の前には、目に見える事は、問題ではないのです。たとえば自分が神様の前にこんなに熱心だとか言っても問題ではないのです。礼拝の出席率が〇〇%ということも問題ではありません。

では礼拝にはそれほど出なくてよいのか——そうではありません。神様のおっしゃっておられるのは、「信仰によって生きる」ことで、ものが問題ではないのです。私はたくさん神様に献金しました。羊や牛をたくさん献げました——それも違います。神様が問題にしていらっしゃるのは、目に見えないところであります。

だから自分がたくさんお金を儲けたから、「これで神様から恵まれました」と言い、お金が儲からなかったら、「神様から呪われた」と言う——これも違います。神様はそんな目に見える事ではなくて、実はそのあとの、目に見えない所が本当は大事なのです。何十億儲かったとしても、神様の祝福のほうがはるかに

素晴らし。また目に見える所で病気になったから捨てられた、何か事件が起ったから、私は呪われたと思うのですが、そんな事は軽いことであって、本当に怖いことは、神様の前に永遠に捨てられることであります。

ルカ16章には、そういう人の記事があります。「助けて下さい。こんな熱い所、苦しい所で私は火に焼かれて、喉が乾いて仕方がない。どうぞ誰か来て、水に指を浸して私の舌を濡らさせて下さい」と叫びましたが、許されませんでした。

「お前は生前良いものを受け、私の言うことは聞かないで、自分の為に宝を積んで、神に対して富まなかった。どうする事も出来ない」と言われました。結局自分が第一で、目に見えるものだけを追い掛けていた訳です。その結果、多少は儲かったかも知れないが、魂がふっと取られたら、永遠の滅びであります。自分の為に宝を積むのではなくて、神様について富むべきであった訳です。

だから自分が儲かったから祝福を受けたのではない、損したから呪われたのではありません。あるいは物質的に乏しい人が神様から祝福を受けてないのか、そうでもないのです。「お金持ちが神様から祝福を受けている。ああ、羨ましい」それも大違いであります。神様は決してそうではなくて、あくまでも信仰によって生きる事を喜ばれる。信仰を捨てる人は、神様によるこぼれない人です。

「モーセの律法を無視する者が、あわれみを受けることなしに、2,3の人の証言に基いて死刑に処せられるとすれば」(ヘブル10:28)——申命記17章、19章に、他の神に仕える事が書いてあります。当時、金や銀の神様を拜んだ人は、「わたし以外のなにものも拜んではならない」と叱られました。

ところが今、私たちに対して神様はそんな事はおっしゃいません。おっしゃろうと思っても、私たちは第一金銀の神様など、飾ったり拜んだりしていません。

しかし神様のお言葉を、自分の頭で考え、目に見える物差して計って「いや、そんなことはない」と判断しますから、神様が「それは私の言うこと違う。それが他の神を拜んでいる事になるのだ。他の物の考えかたを、お前は拜んでいるではないか」と、神様はお嫌いになる訳です。

◆ヘブル10:19/25朗読。イエス様が十字架にかかって、肉体を裂かれて下さったことによって、私たちの為に神様に近づく道が開かれたと書いてあります。そ

【新しい生きた道】

れはたった一つの道で、永遠の命の道であります。「私は熱心ですから…たくさん献金をしていますから…神様の前に胸を張って近付けます」と言う道ではありません。

ある大工さんは「私は今、教会の工事をしているから、神様の前に胸を張って出られます」と言われていましたが、そうではなくて、イエス様がご自分の肉体を裂いて、新しい道を開いて下さったから、そこを通過して神様に近付けて頂けるのであります。

エルサレムの神殿の幕が上から裂けたと書いてあります。上から裂けたのですから、下のほうはまだ繋がっている、それをぐっと引き離してしまう。人間がカーテンを裂くなら、下から裂くでしょう。力が足りなければ鉄で少し切っておいて、びっと裂くかも知れません。

上から裂かれた——という事は、神様がそうされたと言うことです。その新しい生きた道を通して、神様の前にはばからず近付くことが出来る、だからそうしなさい、とおっしゃるのですが、私たちはそれに対して「いや、そんな事は出来ません。私は駄目な人間です」と胸を張って言う。ですから神様は「それは違う」とおっしゃる。

「私は駄目です」というのは遠慮のようで、人間社会では時に美德と思われます。あまり凶々しいよりも、少し遠慮気味に「いや、わたしは」と言っていると、何となく奥ゆかしいようではありますが、神様が「肉体なる幕を通して、ここから入ってきなさい」とおっしゃるのに、それを「いいえ」と言えば、激しく叱られます。

◆「モーセの律法を無視する者が、あわれみを受けることなしに、2,3の人の証言に基いて死刑に処せられる」——これはあまりにひどいようです。お言葉に従わないで、「いいえ、私は…」と言えば死刑になる！——それは極端ではないかと思いますが、事実モーセの律法を無視すれば、2,3の人の証言で死刑にされました。

石打ちの刑であれば、証人が石をもって最初の一撃を加えると、他の人たちが次々に石を投げて、死刑が執行されました。



神様が私たちに対して、お怒りになるのは、私たちの常識とは違う訳であります。私たちは何か汚れたことをした、あるいは何かに失敗した、この約束に背いたという事を悪いことと思って、自分で消気てしまいます。「ああ、私は駄目な人間だ」と思います。ところが神様は、そんな事をおっしゃっていないのです。

信仰を捨てる者、私の言葉に従わない人、違ったことを考える人が、一番悪いのであって、その人は死刑——死刑どころではないのです。モーセの時代に神様のお言葉を無視した人が、死刑に処せられたとすれば、現在私たちが、神の子を踏みつけ、自分がきよめられた契約の血を汚れたものとし、恵みの御霊を侮るならば、どんなにか重い刑罰に価することでしょうか。

私たちは神の子を踏みつけたりはしてないと思いますが、「神の子供が死んで道を開いた、十字架の血はあなたがたの罪を全部許した」とおっしゃるのに、「いいえ、そんなこと」と言えば、神の子を踏みつけて、その血を踏みみじったことになる、神様はそうおっしゃるのです。「恵みの御霊を侮るのか。私がおんなにして恵むというのに、私を侮るならば、死刑どころでは済まない」——死刑よりも重い刑罰とはどんなでしょうか。

それは永遠の火の中に投げ込まれる事であります。「自分自身が復讐する」とおっしゃるのですから、恐ろしいことでもあります。「生ける神の手のうちに陥る事は、恐ろしいことだ」と書いてあります。神様がご自分の命を捨てて愛して下さっているのに、それを拒むのですから、お怒りになるのは当然です。

人間関係でも、命懸けで愛している人が他の人に近づいたら大騒動になります。神様が私たちに対して、熱い思いを傾けていらっしゃるのに、私たちがこれを無視し、あるいは侮る——「私を愛しているなんて、そんなことがあるものか。愛しているのなら、もっとどうかして欲しい」と言ったらどうなるのでしょうか。

イエス様が十字架にかかっておられる時に、ある人々が「あなたが救主なら、そんな所にかかっていないで、自分で降りたらどうだ。そうしたら信じよう」と言いました。これははらわたをえぐるような言葉です。

「神様は救うとおっしゃるが、私のような者を救いきれますか。どこに神様の救いがありますか」と言うことは神様の恵みの御霊を侮る事になります。神様は

どうなさるでしょうか。黙っている事は出来ません。どんな恐ろしいことになるか分からないと思います。

私は昨年から、この新年聖会の為にお祈りしているうちに、神様のそういうきびしい一面を教えられました。あまりにきびしいので「神様、これでは標語として掲げることが出来ません。どうか憐れんで下さい。恵みのお言葉を下さい」と祈りました時に、これらの御言葉を与えられたのです。

神様の思いが強ければ強いほど、また、その時が迫っていればいるほど、きびしくおっしゃらなくてはおられない———そういうお気持ちである事を、ひしひしと教えられた訳であります。

◆神様の前には、何がいけない事であるか、何が喜ばれることであるか、よく心にとめなければならぬと思いました。あくまでも信仰によらなければならぬという事であります。目に見えるものは信仰ではありません。

先日から靈感商法というのが話題になって、統一協(教)会(世界基督教統一神霊協会)がからんでいるらしいという事で、だいぶ問題になりました。壺を売ったり、何とかという印鑑を、とんでもない高いお金で売りつけるのだそうで、その時に人を恐れさせるような事を色々言って来るそうです。

「あなたは病気をして、〇〇でしょう。それはこういう事をお祭りしていない、こんな事をしていないからです」——「祝福を授けられる為に、これを買いなさい」そう言われるものですから、恐ろしくなってそれを買う。被害届けもあまり出ないので、どれくらい被害が隠れているのか分からないという事でした。

私たちは目前に見えることを、「これは呪われているのではなからうか。それでは、この壺を買ったらよいのではないだろうか」と考えますが、神様の呪いは、もっともっと恐ろしいものです。そんなものを買ったぐらいで罪を許されることは出来ません。

私たちはきびしいさばきのお言葉を聞きますと、「ああ、恐ろしい」と思いますが、神様は決して私たちを脅したり、刑罰を加えようとしておっしゃるのではなくて、「そうならないように———あなたがたが、もし拒み背くならば、そうならざるを得ない。もし私のお言葉に従い、信仰によって生きるなら、どんなに

でも祝福を与え、永遠の命を満たそう」とおっしゃっておられるのです。

ですから39節「しかしわたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立って、いのちを得る者である」——これは、神様が私たちの手を引いて下さるような情景です。「さあ、今、わたしの言葉に従って、信仰によって生きようではないか。そして私の与える永遠の命を豊かに受けて、私の前に富む者となってほしい」と誘っていらっしゃる。

ですから私も「神様、どうぞ、信仰の無い者ではありますが、何とかして信じさせて頂きとうございます。退いて叱られ、自らも不幸に陥るような事が、どうして出来ましようか。神様、どうか助けて下さい。信仰を与えて下さい」と、今晚進み出たいと思います。

私たちの手を引いて「さあ」とおっしゃる方は、必ず助けて下さいます。手を引いておいて、ぱっと放すようなことは決してなさいません。真実をもって、良いわざを始め、全とうして下さいます。

「たとえどんなに失敗があり、今まで背き離れていたとしても、ただ一度、イエス・キリストが十字架にかかって下さったことによって、罪が許され新しい道が出来たではないか」と招いて下さいます。ですから私は、そのお言葉を侮る事をしたくないと思います。「ああ、有難うございました。こんな者ですけれども、あなたが道を開いて下さったとおっしゃるから、有難うございます。契約の血を汚れたものとしません。私をすっかりきよめて、神様の前に立たせて下さると信じます」と申し上げたいと思います。

◆恵みの御霊を侮ることなく、今晚、素直になりたいと思います。神様が私たちに求められるものは、ただ一つ「信仰によって生きる」という事だけです。私たちが小さな信仰を持ちはじめますと、それを助けて聖書に記されたすべての恵みを私たちのうちに注ぎ込んで下さいます。

今晚、心を切り替えようと決心しますならば、神様はもうすでに見て下さっています。そして必ず助け、私たちが態度を改め、生活を切り替える事が出来るようにして下さいます。

こちらがはっきりすると、神様のほうもはっきりして下さいます。こちらが暖

【神様の求めはただ一つ】

味にしますと、神様のほうもはっきりする事が出来ません。ですから今晚、このお招きと、導きに従って、「はい、そうさせて頂きとうございます。どうぞよろしくお願ひ致します」と神様にお任せする生涯でありたいと思います。ご一緒にお祈りしましょう。

(1988.1.2 戸畑教会新年聖会 6)

## 第七章

### 神の恵みをいたずらに (今、心に留めねば、押し流されてしまう)

【栄光の神が語って下さる】	101
【いたずらの三面】	101
【気付いた時が今になる】	103
【強く心に留めなければ】	104
【プラスの報いを受けるなら】	106
【「またにしよう」は悪魔のささやき】	107
【すぐ服従———实例】	108
【すぐ従うのは謙遜を現す】	110
【神様のお心を察する】	111
【恵みの言葉が成就】	111
【ああ主のひとみ、まなざし】	112
【具体的行動を起せば】	113

「わたしたちはまた、神と共に働く者として、あなたがたに勤める。神の恵みをいたずらに受けてはならない。神はこう言われる、『わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、救の日にあなたを助けた』。見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である」(2コリント6:1/2)

◆私たちは神様を直接見ることは出来ません。あるいは聞くことも出来ません。それは私たちとは全くレベルの違う方であるという事もありますが、たとい聞いてもそれを理解する事は出来ないでしょう。

イスラエルの民はシナイ山で律法を与えられた時に、その恐ろしさでただ震えるばかり、山はごうごうと火に燃えて、地震で轟いて——その中をモーセ1人が召されて山に行きましたが、民は山の麓に近付くことも出来ない。恐れおののいて「やめて下さい、私たちは死んでしまいます」と言って恐れたと書いてあります。私たちがもし直接に神様の栄光を見るならば、それよりもっと恐るべきものではないでしょうか。

時々日蝕があって、ガラスに煤をつけて観測しますが、決してレンズを覗いてはいけません。それは太陽の光が目の中に焦点を結びますと、目を痛めてしまうからで、必ずよく煤を塗った黒いガラスを通して見なければならぬと言われます。太陽の輝きは、神様の輝きの何千億分の1か、あるいは何兆分の1か、あるいは何京分の1か知りませんが、とにかく神様は遥かに偉大な方であって、私たちが太陽の輝きひとつ眩しいとか、痛むと言うならば、神様の輝きを拝して生きている事はできないでしょう。

イザヤも神様の臨在に触れて恐れおののいています。しかし、幸いなことに「わたしたち(御霊)はまた、神と共に働く者として、あなたがたに勤める」——神様の御霊は神様自身でありますが、このように御言葉を通し、私たちに對して、神様ご自身の御旨を語って下さるので、大変幸いだと思ふ訳です。

◆「あなたがたに勤める、神の恵みをいたずらに受けてはならない——」とあります。今年の(新年の)標語として、この三つが与えられました。第一の御言葉は

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子

を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」であります。

私はこの御言葉を読みました時に、神様が命がけて私を愛して下さっていると思いました。命がけ——人間はよくそういう表現を使いますが、神様の命がけは、本当に命をかけ、命を捨てて下さったのです。

ご自分のひとり子——大きな痛みを乗り越えてひとり子を十字架につけ、この世——という曖昧になりやすいのですが、「私個人」を愛して下さった。それは御子を信じることによって、私が永遠の滅びに入らず、永遠の命にあずかるためであるとおっしゃる。この御言葉を味わわして頂くとき、その深みに恐れおののくばかりであります。

この恵みのお言葉をいたずらに受けないように——「いたずら」というと色々な事が考えられますが、

①まず神様の命がけのご愛と、そのみ心を軽んじてはならない——神様のご愛を軽く考えてはなりません。人間の世界で「命がけ」と時々言いますから、神様が「ひとり子を賜ったほどに」とおっしゃるのも、これは形容のしかたで、そういうふうにご熱心を言い現しておられるのだらうと思いますが、実はそうではないのです。神様が命をかけて私たちに注いで下さっている賜物は、どれ程恐るべきものであるか、それは「永遠の命の尊さ」逆に「永遠の滅びの恐ろしさ」を知ってまいりますと、これはいたずらにするどころではない、大変なことであります。

②もう一つの「いたずら」は時期を失することです。あとのほうにも出て来ますが、神様が今、私に与えようとしていらっしゃるものを、「そのうちに——もう一度良く読みなおして——分かたら従いましょう」と言うようなことを言います。これでは時期を失います。私たちが日常生活の中でも時期を失するという事は非常に具合が悪いので、微妙なことをてきばきとやっている訳ですが、神様のことになりますと「いたずら」にいたします。「そのうちに」とか「もう少し分かたらこうしよう、ああしよう」と言って、尊い機会を流れ去らせてしまう事があるのではないのでしょうか。

③もう一つは、頂いたものを生かすという意味でも「いたずら」にする。私た

ちは貴重なものを持っていても、これを死蔵していたら何の役にも立ちません。神様の尊い賜物を与えられて、私たちがそれを生かさなければ、生かし得る機会を逸したという意味で大きな損失であり、神様の前に罪であると教えられた訳です。

◆「神はこう言われる、『わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、救の日にあなたを助けた』。見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である」私たちは「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日」と言われても、あまりピンとこないものです。聖書は何千年も前に書かれて、それ以来このお言葉はずっとここに書いてある。ですからそんなに切実に「今が恵みの時」とは思わない訳ですが、しかし、この世の中のものでも、人が気付いて読んだ時にはじめて生きるのであって、それまではじっと寝ている訳です。

家内が最近、家庭百科事典を時々出して読んでいます。豆の煮方がどうか、数の子の漬け方がどうか、盛んに勉強している訳です。私はそれを見て思いますのは、家庭百科そのものはだいぶ前から有りましたし、勿論その記事は買った時からそこに書いてあったと思います。しかし、今年はじめて読んで「こんな事が書いてある、それではこうしよう」と言った時に、はじめてその内容が生きて来る訳で、それまでは全然役に立たなかった訳です。

神様の恵みのお言葉——ひとり子を賜ったほどに、私を愛して永遠の命を与えるとおっしゃる——しかしかつての私は神様の事を全く知りませんし、お言葉に従うことをしませんから、私にとってはただ死蔵されているだけで、何の役にも立ちませんでした。しかし、私が目覚めて「ああ、神様はこんなにおっしゃっている」——「それでは私も神様に従わせて下さい」と、積極的な行動が始まってから、私のうちにすべての事が動いてまいりました。

神様が働いて下さるのは、家事やお料理のしかたではなくて、「私たちの願いを聞き、弱い時に助けて下さる」という事です。それを神様は発動しようとしておられる——ずっと昔から約束されている事で、イザヤ49章にこの事が書いてあります。それは神様のみ心であって、いつでも発動する約束のお言葉ですが、それがなかなか発動しません。



「今は恵みの時、救の日」と言われても、発動するかどうか分かりません。こちらの態度次第です。「ああ、そうですか」と言っていれば、今日も空しく過ぎ去って行くに違いない。しかし「これは大変だ!」と気付けば、今というのは1月3日午前10時38分、今の事なのだ——神様が私に対して今、私の願いを聞いて、私を助けようとしていらっしやるのなら、私は神様に何を願い、何を助けて頂くか。自分の乏しいこと、弱いこと、普段はこんなものだと思っていたが、神様が「助けるぞ」と言われたら、ちょっと見直してみる、「これは大変、私はどうしようか——まず神様に注目しよう」という事になります。

◆その時を、いたずらにしますと、すべては過ぎ去ってしまって、何にもならないと言う事です。それはヘブル人への手紙に書いてあります。

ヘブル2:1/4 朗読。ここに「わたしたちは聞かされていることを、いっそう強く心に留めねばならない。そうでないと、おし流されてしまう」と書いてありますが、時というものは一方向にしか流れず過ぎ去って行きます。決して帰りません。しかもそれは一度だけであります。

ある人々は人間は生れ変って、次の世ではどうなるかと言います。今度もし生れ変ることが出来たら、男になりたいか、女になりたいか、などと言う人があります。インドあたりでは輪廻——命が巡って行くと考えて、いま悪い事していると、今度生れる時に動物になったり、犬猫になったりしてしえたげられる、だから今、良い事しておかねばならない、などと言います。そういう考え方の中には、時というものは2度も3度も巡って来るように思う思想がある訳でしょう。

しかし聖書には「一度死ぬことと、さばきを受けることは定まっている」とあります。時は一方向に流れており、人の一生は生れて死んで神様の前にさばかれる——そのように定まっていると書いてあります。インドの人がどう考えたからといって、あるいは学者がこうだろうと言ったとしても、変るものではありません。審判者である神様がそう定めたのですから絶対に変ることはないのです。ですからもし、私たちが今という時を無駄にしますと、今は永久に帰ってこないのです。「あの時は」と言った時は、もうそれよりずっと過ぎた時です。

「御使たちをとおして語られた御言が効力を持ち、あらゆる罪過と不従順とに対して正当な報いが加えられた」というのは、昔律法を与えられた時、それに対して、従わない場合は罪の償いをさせられる。そのまま放置しておきますと「罪を犯せる者は死ぬべし」と神様がさばかれます。ですからそうならないように「御免なさい」と祭司の所に獣を持って行って神様に獻げてもらう。獣の頭に手を置いて「この獣と私は一つでございます。私が罪の結果殺されるべきですが、この獣が今から殺されます。どうぞ、この血に免じて許して頂きたい」と言って、獣を殺して血をささげて、神様の前に許されました。これは人間が勝手にした事ではなくて、神様が「そうせよ、そうしたら許す」とレビ記に記されていることです。

昔の律法は真理についてのひな型です。こんにち私たちは牛や羊などの獣をささげてでなくて、イエス様が私たちの身代り——あがないの羊となって、十字架の上に血を流して下さった事によって、私たちの罪が許されるという福音が与えられました。それが天地創造以来の神様のご意志であった訳です。

ひな型に対してさえ御言葉は効力があり、背いた者に対して正当な報いが加えられたとするならば、真理については尚更ではないか、と言われている訳であります。

真理については1章の初めから書いてあります。「御子は神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿であって、その力ある言葉をもって万物を保っておられる」(3節)——昔は預言者あるいは御使によって律法を語られましたが、今の終りの時になると、御子によって私たちに語られる。語られるというのは、口で語るだけではなくて、そのご生涯の全部が、私たちに對する神様のメッセージであるということです。

神の栄光の輝きであり、神様自身である方が、私たちの為にかかって、罪を許し、永遠の滅びに入るべき者に対して、永遠の命を与えて下さるというのは、神様のメッセージですが、こんな尊い救を私たちがなおざりにしてすっと流れ去らせてしまったなら、自分が損失を招くのは当然で、自業自得ということではすまないであって、神様の報いを逃れられないと言われるのです。「私がこ

れだけ命がけて話している事を、軽く考え、あるいは無駄にするのは私を侮るものだ」と言われる訳です。

民数記 13-14章を見ますと、神様がイスラエルの民を約束の地に入れようとされた時、多くの人々は従いませんでした。12人の斥候が約束の土地を探って帰り、その中の10人は「なる程良い所には違いないが、強い民がおり、堅固な城壁があって、背の高い人種が住んでいた。私たちが入って行ったら必ず殺されてしまうに違いない。私たちは誰か新しい指導者を立ててエジプトに帰ろう」と申しました。

神様は大変お怒りになって、「私を10回も侮る者たちは決して許さない」とおっしゃって、荒野に40年間放浪させられました。その間大人は全部荒野で死亡した訳であります。それが神様のきびしい報いでした。

「わたしたちは、こんなに尊い報いをなおざりにしては、どうして報いをのがれることができようか」——かつての40年の荒野の旅は今の私たちがかがみであって、今この真理の時代にイエス様の救いを軽んじ「そんな十字架なんか」と言いますと、どうして報いをのがれることができるでしょうか——神様の恵みのお言葉を聞いて、これを拒み、押し流されるならば、再び悔い改めに立ち返らせる事が出来ないと書いてあります。ですから私たちは、神様のおごそかな宣言をよく心に留めなければなりません。「強く心に留めなければならぬ」と言われているとおりであります。

「ア  
プ  
ラ  
ス  
の  
報  
い  
を  
受  
け  
る  
な  
ら  
」

◆逆に言いますと、きびしいお言葉の中に恵みが隠されていると思いました。それは「御使たちをとおして語られた御言が効力を持っていた」のです。現に命の言葉として、人を生かし殺す力を持っており、そして「罪過と不従順とに対して正当な報いが加えられたとするならば」、逆に私たちが、力あるお言葉に従うならば、どんなに恐るべきアプサスの報いを与えられるのでしょうか。

「この救は、初め主によって語られたものであって、聞いた人々からわたしたちにあかしされ、さらに神も、しるしとさまざまなわざとにより、また、御旨に従い聖霊を各自に賜うことによって、あかしをされたのである」(ヘブル2:3/4) ——主によって最初語られ、聖徒を通して伝えられ、また聖書を通し、色々な

機会をとおして私たちに証をされました。

神様のお話はいわゆるお話ではなくて、証、保証です。確かなものであるという事を証明される為にもう一つ別のルートで神様が証をされる。それはしるしと不思議と様々な力あるわざ、また、御旨に従い、聖霊をお与えになって、今度は内から私たちに「確かである」と証して下さる。これは私たちにとって大変素晴らしいことであります。

◆チャンスを逃さない為に、押し流されない為に、なすべきことは（私たちはすべてのチャンスを知らないのですから）「はい」とすぐ従うことであります。人間が時を計るのはなかなか難しいそうで、株の極意は「まだはもうなり、もうはまだなり」ということだそうです。「もうよかろう」と思った時はまだで、「まだまだ」と思っていると、もう過ぎてしまうと言われますが、

私たちはどんなに考えても神様のチャンスを知ることは出来ません。コンピューターで気象の予測とか汚染の予測とか色々やりますが、それは皆過去のデータを積み上げて、それを延長する、「こうなるであろう、こういう変動をするであろう」と予測するものであって、そのものずばり、いついつどうなるという事については誰も知る事は出来ません。

それを知っておられるのは父なる神様だけであって、これは誰にもお委ねにならないと書いてあります。子（イエス様）も知らない、と言われる程に神様はチャンスをお委ねになりません。それは神様の主権の本質であると思います。

ですから私たちが今、神様の恵みのお言葉を聞きました時に、「またにしよう」というのは「悪魔のささやき」であります。私たちは簡単に「またにしよう」と言いますが、もし人間が神様から「またにしよう」と言われたらどうなるでしょうか、「お前の心臓を何億回も動かして疲れたから、今日は一休みしてまたにしよう」と言われたら、私たちは生きて行くことは出来ません。しかし神様は決してそうおっしゃらないで、「今、答え、今、助ける———今が恵みの時、今が救の時」とおっしゃって、不真実な私たちに対しても、ご自分の真実をつらぬいて下さっていますから、生れた時からこのかた（いや生れる前から）、心臓は正確に鼓動を続けています。

【「またにしよう」は悪魔のささやき】

動物などの発生の顕微鏡写真などを見ますと、まだ体の形もはっきりしないうちに、そのもやもやした卵の一部で小さな赤いものがピクピクと動いている。それは心臓であります。私たちが同じでしょう。それ以来動き続けている心臓が私たちがこうして今、支えている。それは神様が不真実では有り得ない方であることを現しています。そのようにして生かされているのに人間は「またにしよう」と言い、「あとからまた――都合次第でぼちぼち」と言います。神様は「すぐ、一番に」と私たちに期待していらっしゃるのです。人間の身勝手は決してしてはならないと教えられた訳であります。

◆色々な人たちの服従の記事がありますので読んでみたいと思います。

マタイ4:18/22 朗読。これは2組の兄弟(4人)の献身の記事ですが、シモンとアンデレが海で網を打っている、これは漁師ですが、「わたしについてきなさい。(あなたがたは今、魚を捕っているが)人間をとる漁師にしてあげよう」と言われました。彼らはすぐに(ここに注目したいのですが)網を捨てて、イエス様に従いました。次に、ヤコブとヨハネという兄弟がお父さんと一緒に舟の中で網を繕っていました。そこで彼らをお招きになると、舟も父も置いてすぐイエス様に従いました。このようにして12弟子が次々に召される訳です。

列王上19:19/21に、エリヤがエリシャを召した時の記事がありますが、それもやはりそうなのです。エリシャは牛を使って畑を耕していましたが、エリヤが側を通って黙ってコートをかけました。彼はすぐに走って行って、「先生、家の者に別れを告げて来ますから」と、牛を殺し、車を薪にし、煮てふるまいをして、すぐに別れを告げてエリヤに従ったと書いてあります。ただコートをかけられただけでエリシャは迅速にエリヤに従いました。これは神様の召しによるものでした。(列王上19:16)

これらを見ますと、私たちが神様のお言葉に従う、自分が決断をするという事は、「すぐ」しなければならない訳です。すぐしないと出来なくなる、機会を失う――後からもう少ししっかり準備をして、きちっと従おう(?) などと思っていると出来ません。「今」心の中に示された時、「そうだ」と思った時に、とにかくすぐ一歩踏み出しますと、あとは次々に従える訳であります。

赤ちゃんが歩き出す時もそうでしょう。しっかり大きくなり、力もついて、歩けるようになってから歩こうと言う人はない訳です。必ず這ったり、高く足を伸ばして這ったり、物に掴まってばたつと倒れたりしているうちに、2,3歩あるきだし、たちまちどンドン歩いて行きます。私たちが、神様の赤子であるのに、いつの間にか大人になって「いいえ、私は恥ずかしい事は出来ません。やるからには、最初からうまい事やらなければ恥ずかしい」とやっていますから、いつまでも出来ないのであります。神様の前に恥ずかしいも、出来ないもありません。「おいで」と言われたら出て行ったらよいのです。

〈赤子〉

ペテロは嵐の湖の上で、イエス様が近付いて来られたのを見て「あっ、先生、あなたでしたか」と言いました。他の弟子たちは「あれよ、あれよ」と見ているばかりでしたが、彼は「先生、では私に命じてみもとに行かせて下さい」と言って、すすすつと歩きだしたのです。「来なさい」と言われるが早いか、波の上をすつと踏んで実際に歩いた訳です。

〈ペテロ〉

こんにち人間的に考えて「そんな事はあり得ない」と思います。それが私たちの足を止める訳です。ペテロはすつと踏み出して、さつと歩いて行った。途中で「あっ、自分は水の上を歩いている、こんな事は有る筈がない」と思ったとたんに沈んで「イエス様助けて下さい」と叫びました。すると「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったか」と手をとって引き上げられ、一緒に舟に乗せて下さいました。その時に波風はすっかり静まったと書いてあります。ペテロは積極的な人であって、悪く言えばおっちょこちょいで、すぐに飛び出す――しかしそれが従うことの出来る秘訣だった訳であります。

私が神様に従わせて頂くのもそうだと思います。最初にバプテスマを受けさせて頂きたいと思った時に、誰にも相談をしませんでした。両親はクリスチャンですから、話したら喜んでくれたかも知れませんが、私は神様がこんなに愛して下さいと分かった時に、「はい、そんなに愛して下さい方があるのなら、私もその方を愛していきたい。その方が従えとおっしゃるのだから従いたいと思います。だから人の前にも、神様の前にもはっきりとしてバプテスマを受けさせて頂きたい」――

〈わたし〉

従えるようになったら従おうというのではなくて、愛して下さったのですから、私にも愛させて下さいと何も分からない、何も出来ないが、踏み出したのです。その頃、他にもバプテスマを受けたいと言う人があり、何人かと一緒に洗礼を受けました。それが私のスタートでした。

その後、色々な変遷がありました。神様の前に献身させて頂いて、こんにちまで歩ませて頂きました。不忠実な者で行ったり戻ったりした私ですが、こんにちいささかでも神様に従わせて頂く事が出来たのは、何も考えずに（石橋をたたいて行くという式の考えではなくて）海の波の上に踏み出して行くような気持ちがありましたから、主が助けて下さったのであります。

とにかく私たちの心のうちに決断を与えられた時は、それにさっと従う———本当に自分の気持ちが極限までいって「従います」と踏み出せば、その次の行動は出て来る訳です。お言葉からずっと間を置いて後ろのほうの椅子に深く腰掛けて、「それでは、どのように立ち上がろうか」と考えていますと、どうしても前に行くことは出来ないのです。

◆すぐ従うのは謙遜を現します。神様の前に謙遜に従うと、「従う者に賜う聖霊」とあるように助けて下さる訳であります。

ルカによる福音書15章の、放蕩息子はお父さんの所から飛び出しました———兄貴と二人に財産をどうせ分けてくれるのだらうから、お父さんの生きているうち———元気な今のうちに財産を半分分けてくれと言って、持ち出して放蕩に身をもち崩しました。

何も食べる物がなくなり、金の切れ目が縁の切れ目で、人から皆追い出されて、誰も相手にしてくれない。豚飼いになって、豚の汚物にまみれながら、豚の餌箱の中にある豆殻をそっと嘔んで見て、その時にはじめて彼は本心に帰り、「自分はどこからこんな事になったのだらうか。お父さんの所にいれば良かった。雇い人がたくさんいて皆食べているのに、私は息子でありながら、こんな所で飢えて死のうとしている。そうだ、お父さんの所に帰ろう。私が悪かった」と決心をしたのです。

そこまで心が決まった時に「どうやって帰ろうか」とか「恥ずかしい」とか

「どこからどう行こうとか」とか考えないで、彼はふっと立ち上がったと書いてあります。立ち上がってどんどん歩いて行きました。するとお父さんの方が遠くから見て、とんで来て抱き締めたと書いてあります。彼がすっかり自分の家に帰る手順を考えて、使用人たちの目の前であまり恥ずかしく無いように体面を保って——と考えていたら、帰ることは出来なかったでしょう。本心に帰った彼はすぐ立ち上がりましたから力を与えられて家に帰ることが出来た訳です。

◆「神はこう言われる、『わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、救いの日にあなたを助けた』」(2コリント6:2)人間どうしだったら——殊に日本人は相手の気持ちを察することをします——心配りをします。言わず語らずだけれど、こういうことなのだな、という訳で黙って何かをする。悪い人は黙って賄賂を持って行く、賄賂を受け取ろうと思う人は、「持ってきなさい」とは言わないけれども、口ぶりで相手は察する訳です。これは何か持って来いと言っているのだらうとお願いに行く。

神様は私たちに対して、「恵みの時に、あなたの願いを聞き入れるぞ、救いの日にあなたを助けるのだぞ、今は恵みの時、救いの日」と、これだけ言われたら分かります。「私は助けるのだよ、今、助けるのだよ」と手を開いていらっしやる。

「願いを聞く」と言われるのですから、私たちは願う——「神様、あなたは願いを聞き、弱きを助ける」とおっしゃるから「この事を聞いて頂きたい。これだけは是非聞いて頂きたい。助けて頂きたい」と、私たちが神様の事を察して行動を起しますならば、神様はそれに対して必ず助けて下さいます。

◆イエス様はある会堂に入れ、係の者から、イザヤ書を手渡されると、その61:1/2「主なる神の霊がわたしに臨んだ。これは主がわたしに油を注いで、貧しい者に福音を宣べ伝えることをゆだね、わたしをつかわして心のいためる者をいやし、捕われ人に放免を告げ、縛られている者に解放を告げ、主の恵みの年とわれわれの神の報復の日とを告げさせ、また、すべての悲しむ者を慰め」——を読まれてから、黙って巻いて(昔の聖書は巻き物ですから)返し着席されました。皆、何のことだろうかとイエス様を見ましたところ、「この言葉は、あなたがたが耳にした今日、この日に成就した」と言われました。即ち、自分が(旧約)聖

「神様のお心を察する」

「恵みの言葉が成就」



書に預言された救主であることをおっしゃった訳です。

ですから多くの人々は、イエス様の口から出る恵みのお言葉を喜んだと書いてあります。「ああ、そうだったのか。神様は今、私達を顧みていて下さる！」—— 700年以上も前の預言が今、成就したと信じたのです。

この時から更に2000年近くたちましたから、それだけイザヤの時代は遠くなりましたが、神様は「見よ、今のことだ」とおっしゃる。「あ、そうでした、今でした、有難うございます」と私たちが目覚め、お言葉を喜んでお受けした時が「今」になるのです。すると神様は確かに私達を助けて下さるのです。

ですから私は今朝も、神様に対して心を向けました。「お前の願いを聞くのだよ、お前の叫びを聞いて助けるのだよ、今だよ」と言われるから、私は「ああ、そうでしたか、気がつきませんでした。けれども今、どうぞ顧みて頂きたい」——何がどうなるよりも、神様から顧られて保証を与えられることは、最も素晴らしいことでもあります。

◆「顧みられる」とは、じろっと見られると言うことではありません。すべてを知り尽くす、あるいは「よし」とする、あるいは「こちらにきなさい」と招かれる。目が物を言うと言いますが、深い心のこめられたものであります。イエス様が捕らえられ引かれて行く時、ペテロは遠く離れてついて行きました。ある所でイエス様は（廊下のような所？）引かれて行く途中、下から見ているペテロを振り返られました。

その前にペテロは3回イエス様を拒みました。女中さんから目をとめられ、「あなたはあの人と一緒にいたでしょう」と言われると、「いいえ、私はあの人を知りません」と言いました。暫くして、他の者が「お前は、あの人仲間だろう」と言いましたので「違う」と答えました。だいぶたってから、また他の男が「たしかにこの人は彼と共にいた。あんたはガリラヤ人だろう。なまりで分かる」と言いますと、「いや、絶対に違う。私はあの人を知らない!」と誓いました。

「死んでも私は従います」と言った人が、イエス様の預言とおり、3度、拒絶しました。そのペテロが悲しい思いをもって、イエス様を見上げた時に、イエス様は慈しみの目をもって、振り返られました。それを歌ったのが讃美歌 243番

「ああ主のひとみ、まなざしよ」という歌です。イエス様はそのように願みて下さる方です。

私は今、自分の姿を考えます時に、満足すべきものでも何でもありません。しかし、神様は「さあ、いま来なさい」とおっしゃっている、そのまなざし、その呼び掛けに対して、私もまた、いま心を向けました。神様は私としっかりとした線で繋がったように願みて下さって、私を「よし」として下さる——「よし」とは、神様の保証であります。「永遠の命を与える」とおっしゃったら、与えて下さる。「救う」とおっしゃったら、救って下さる。「守る」と言ったら、守って下さる。「私は命を捨てて、お前を愛している」とおっしゃったら、確かにそれが私に通じてまいります。私は今、そのように内から力を与えられ、確信を与えられ、喜んで神様の前に立たせて頂いている訳であります。私の手に何も有る訳ではありませんが、神様が呼びかけていらっしゃる。はっと気がついて、それにお答えするだけで、神様は確かに私に対して保証を下さる訳であります。

◆「『わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、救の日にあなたを助けた』見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である」(2コリント6:2)神様は今日、聞く者に対して、今日、生き働いて下さいます。それはどんな時でも真理であります。御霊は私たちにいたずらにしないように勤めておられます。特に「いたずら」の第3点にあげました「活用」とは、具体的行動ですから、「願い」「叫び」「求め」など行動を起してまいりますと、神様は確かに私たちに対して保証を下さる。命を捨てて愛して下さった方が、どうして私たちに対して通じないでおられるでしょうか！

【具体的行動を起せば】

人間どうしても誠意があれば必ず通じます。行動か表情か、何か物のやり取りか、何かを通じて相手に分かります。「神様は私たちを顧みると言われるが、何をしてくれるのだろうか」と思いますが、何であるかは分かりません。神様は、私たちに対する熱情を何らかの形で必ず現して下さる。これはどんな人から愛されるよりも素晴らしいことではないでしょうか。

「今は恵みの時」とおっしゃるので、恵みの機会をのがさず、この方に対して心に向けて行動したい。本心で用意をしたいと思えます。神様が「さあ」

とおっしゃったら、すつと出て行けるように心の備えをして、従わせて頂きたい  
と思います。ご一緒にお祈りしましょう。

(1988.1.3 戸知教会日曜礼拝 新年聖会 7)

## 第八章

### 今がその時

(迅速に従うには準備が必要)

- |                 |     |
|-----------------|-----|
| 【すべての量は神様の手中に】  | 117 |
| 【法則の作り方を定める】    | 118 |
| 【油を用意しなかった乙女たち】 | 118 |
| 【準備は本気の証拠】      | 119 |
| 【主を迎えそこなった人】    | 120 |
| 【天に宝を積みそこねた人】   | 121 |
| 【あれが解決したら従おう】   | 122 |
| 【従わせた方が責任を持つ】   | 123 |

【すべての量は神様の手中に】

「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある」（伝道の書 3:1)

◆ここには様々な「時」があります。時と言えば、永遠から永遠に互って流れて行く時もありますが、時期——つまり「今だ」という時があるというのです。二つの出来事の時期が定まって、はじめて時間の長さというものがはかられます。「時」について学問的に問うならば非常に大きなテーマであると思います。

(文末に参考文献を記してあります)

生まれるのも、死ぬのも、植えたものを抜くにも、殺すにも、いやすにも、すべてそうである。以下に、壊す・建てる、泣く・笑う、悲しむ・踊る、石を投げる・集める、抱く・やめる、捜す・失う、保つ・捨てる、裂く・縫う、黙る・語る、愛する・憎む、戦う・和らぐ——とありますが、神様がこれらすべてのものの主権者であり、時期を定め給うという事であります。

もしこの箇所を、神様抜きにして読むならば運命論になると思います。なるようにしかならないと言うことです。しかし神様を信じて読むとき、私たちには今しかないのであって、今従うべきであるという事を教えられます。

私は先程、科学事典で単位の構成について調べて見ました。(種々の単位の組み立てを立体的な図面に現すことが出来ます————中略————)

時ばかりでなく、長さも重さも、すべて人間がはかる量は、神様の手の中にあると思います。例えば、空に雲が浮かんでいます。雲は小さな水滴が空中で集まっているものですが、そこにはなにがしかの重量がある訳です。大雨になりますと何億トンという雨が降る訳で、それだけのものが空中にかかっています。

「水の間におおぞらがあつて、水と水とを分けよ」（創世記1:6）と言われた時空の上の水と下の水（海）が出来ました。上の水にも重量があるはずですが、人間ははかる事が出来ませんが何十何グラムまできちっとあるはずですが。

(雲の高さについて——雲の流れる方向について——雲の流れる速度について——星の高度について——この部屋の温度について——時計の振り子について——略)

私がいつも思うことは、人間は色々な量をはかったり、考えたり、計算したり

しますが、真実を知る事は出来ない。しかしはかれないものにも全部量があるはずです。神様はそのすべてを知り尽くし、すべてのものを支配しておられます。人間は生意気にも「そんなことはあり得ない。奇跡？今どき、そんな事があるものか——」などと言います。

【法則の作り方を定める】

◆私たちがものを考える時、当然私たちの知っている法則にもとずいて考えます。しかし神様は（現在私たちを支配している）法則を越えた方でいらっしゃいます。法則の基をお造りになった方です。

それは国会の議院運営委員会が、どのような段どりで法律を作ろうかと議論するようなものです。

そのような神様の法則によって造られた私たちが、造り主である神様を否定して、信じられないなどと言うことは全くナンセンスです。

私が昨年5月、大阪の民族学博物館に行きました目的の一つはHRAFコード（全世界の民族学の資料を整理するコード）を調査する事にありました。私が民族学を研究する訳ではありませんが、そのコードの作り方、その基礎にある考え方を学んで、自分なりのカード整理法を作ろうと思った訳です。

また、同じような考え方から、K書店の類語辞典にありました語彙の概念の分類表を研究しました。

その他NDC（日本十進分類法）やUDC（国際十進分類法）も研究しました。分類・整理作業そのものではなくて、そのやり方を考えた訳です。

神様は素晴らしい調和のもとに、現在万物をご支配になっておられます、「神のなされることは皆その時にかなって美しい」とある通りです。これによって私たちは神様を崇める訳です。

【油を用意しなかった乙女たち】

◆「すべての事に時がある」とおっしゃるのは、私たちが時期を失せず、迅速に従う事を求めておられるのです。もしその機会を失えばどれほど不幸であるか幾つか教えられました。

マタイ25:1/13 朗読。これは天国の譬です。花婿を迎えに出る役の乙女があって、その10人のうち5人は賢く、5人は愚かであったとあります。昔のことで明りを持って行く訳ですが、灯芯に油をしませて火をつけていますから、油をたえ

ず補給しなければなりません。賢い者たちは自分の明りと一緒に油壺に油を用意しましたが、愚かな者たちは明りだけしか持ってきませんでした。花婿の到着が遅いので、待ちくたびれて皆寝てしまいました。明りを消したとは書いてないので、つけ放して居眠りをしたのでしょう。

「さあ」と言うので起きてみると明りは消えかかっています。用意していた女たちはすぐに補給しましたが、用意のない女たちは補給する事が出来ません。

「あなたたちの油を分けて下さい」と言いましたが、油壺と言ってもそんなに大きなものではないので二人分は無い、「あなたがたに分けて上げるほどは無いから油屋さんに行って、油を買って来たほうがよいでしょう」と言っているうちに花婿が来たので、用意の出来ていた女たちは、花婿を迎えて宴会の席に入ってきました。

油を買いに行った女たちは、夜中ですから、油屋さんを起してやっ買って来ました。急いで帰って来ましたが、すでに彼らは門の中に入って戸が閉められていました。そこで、「ご主人様どうぞ開けて下さい。わたしたちはあなたから命ぜられて待っていた誰々です、どうぞ開けて下さい。あなたはわたしたちをご存知ではありませんか」と言ったのですが、主人は「はっきり言うと、わたしはあなたがたを知らない（そんな人には用事がない）」と言う訳で門を閉められてしまいました。

私たちがイエス様を待っている時、用意をしていなければ、いざと言う時に間に合わない、閉め出されてしまうという事であります。これは24章の方にも、「あなたがたも思いがけない時に、人の子が来るから、用意をしておきなさい」と書いてあります。

◆迅速に従う為にはあらかじめ準備がいらいます。陸上の選手でも、水泳の選手でもそうですが、まさに出かかって倒れて行く、フライングをするほど、用意してピストルを待ちます。

日常生活の中でも用意をすると言うことは、本気である事を表わします。例えば皆様がおうちに帰って食事の支度をなさる時、この家の主婦として自分がしなければならないという自覚がありますから用意をします。「さあ、食べるぞ」と

【準備は本気の証拠】

言って食べられる訳ではありません。私たちが神様から、「今従いなさい」と求められている事を自覚しますと、本気で用意をします。

ダビデはある時、「わたしは今晚お祈りをしているが、明日の朝お祈りに答えられた時のために備えをして待つ」と言っています。これは本気です。待っていますから、その通りになって行きます。本気でない、準備をしない人はそうならないでしょう。

今日の午後の集会でもそうですが、「さあ、行こう、必ず行くぞ」と用意をしている人が出席出来た訳です。「いや、もう今日はよかろう、ちょっと家の用事もあるし止めておこう」と用意をしなかった人は出て来られなかった訳です。用意をした通り、自覚した通りになって行く訳であります。天国の結末は、集会に出られるとか出られない、あるいは食事が一回抜けたとか抜けないどころではありません。神様から天国の門を閉ざされて、「お前は知らない」と言われたら、取り返しがつきません。どんなに戸を叩いて「ご主人様、開けて下さい」と言ってもそれっきり、開けて貰えなかったのです。

私たちがどんなに長い間信仰生活に励んだとしても、最後に居眠りをして、扉を閉められたならば、文字通り私たちの人生は水の泡になってしまいます。ですから常に従うことが出来るように、備えをせねばならないと教えられた訳であります。

◆雅歌 5:2/8朗読。これはイエス様を迎えそこなった人の失敗談です。「わたしは眠っていたが、心はさめていた」——半分覚め半分は眠って、扉を叩く人の音も声も聞いていた訳です。「わが妹、わが愛する者、わがはと、わが全き者よ、あけてください。わたしの頭は露でぬれ、わたしの髪の毛は夜露でぬれている」と言われる——この場面を描いた(?) レンブラントの有名な絵があります。蔦が絡み付いた扉の外で、明りを持ったイエス様が扉を叩いておられる——

うつらうつらしながら、心の中では「わたしはすでに着物を脱いだ、どうしてまた着られようか」「すでに足を洗った」また起きて着物を着て面倒臭い、扉を開けに行ったら又足が汚れる、子供たちも一緒に寝ていると思ったかも知れません。



そうしているうちに、「愛する者が掛けがねに手をかけて」がちゃがちゃと開けようとしているのを聞いて、「ああ、そんなに願っていらっしやるのか」と心は踊りました。「では開けに行こうか」と思って、起きて開けに行ったところ、没薬がしたたりました。没薬は死体に塗る薬ですから、イエス様のしるしであります。

「ああ、イエス様だったのか」と思って、急いで開けて見たのですが、もうその方は帰り去って、どこにも見あたらない。町の中を歩いてみると夜回りたちが居たので、聞きましたが教えてくれないどころか、かえって打って傷付け上着をはぎ取ったというのです。ガードマンが強盗するようなもので、これは悪い伝道者の譬という事です。

これも、時をいたずらにした人の失敗の記録です。ここをよく味わって、自分に引き比べてみたいと思いました。

◆もう一つ、ルカ16:19/31朗読。これは大金持と、その門前にいた乞食の話であります。この金持は紫の着物や細布を着て贅沢に遊び暮らしていました。勿論食べ物もおいしいもの、珍しいものを腹一杯食べていたでしょう。その門前にラザロという乞食がいて、全身できもので覆われていました。不衛生ですから化膿して、食卓の屑で飢えをしのごうと望んでいました。この金持もまんざら冷たい人ではなくて、乞食に余り物を恵んでやろうと言う気持があったようです。

ラザロの体から膿が出ているから、犬が来てそれをなめる。そのうち乞食は死んで父アブラハムのもとに送られました。金持も丁度その頃に死んで黄泉に落されました。目を上げて見るとアブラハムとその懐のラザロが大変平安に見えるように見えます。自分は火の中で熱くて苦しくて堪りませんから、「どうぞラザロを遣わして、その指先を水でぬらし、わたしの舌を冷やさせて下さい。わたしは火の中で苦しみもだえています」と願いました。

地獄と言っても、火葬のように人間が灰になってしまえば、痛いも苦しいもないと思いますが、そうはならないのです。永久に火で焼かれて、「熱い、熱い、苦しい、苦しい——しまった、しまった、ごめんなさい」と言い続けなければならない。金持はそういう中で苦しみもだえていましたから助けを求めた訳です。

【天に宝を積みそこねた人】

すると「あなたは生前良いものを受け、ラザロのほうは悪いものを受けた」——天国と地獄は逆転するという意味ではないのですが、金持は自分のために宝を積んで、神様について富むことをしなかった訳で、今苦しみもだえています。一方ラザロは良い心を持っていたのでしょ。今ここで慰められています。

神様が審判者として決定された事は、くつがえすことが出来ません。両者の間には大きな淵があって、どちらからどちらへ渡ることも出来ないと言われました。

そこで金持は、「ではわたしはもう仕方がないとしても、わたしの父の家に5人の兄弟がおります。ラザロを遣わして、こんな苦しい所に来ないように警告をさせて下さい」「いや、彼らにはモーセと預言者がある」——つまり教会があり伝道者がいるからそれに聞きなさいという事です。「いえ、死人の中から行く人があつたら、皆びっくりしてきつと聞くでしょう」と言いましたが、「いや、そうではない。教会あるいは伝道者に聞かない人は、たとい死人の中から甦つた人があつても、それを信じない。こんなおかしな事を言つて、どこから来たのか気が狂つているのだらうとしか認めない。だからその言つところを聞き入れる事はない」と言われました。

自分の与えられた財産を用いるチャンスを失えば、取り返しがつかないという事です。神様の決定が下れば人はどうすることも出来ません。

神様は私たちに、「すべての事に時がある、今日お前がはつと気が付いたら今がその時なのだ、明日では遅すぎる——第一明日はもう無いかも知れない、だから今日私に心を向けて従いなさい」——本心になつて私に心を向けるなら、私は助けようとおっしゃいます。

こういう幾つかの例を読みますと、神様は私たちに対して非常な危機感を持つて警告していらつしやうと思ひました。

◆ヤコブ4:13/17 朗読。私たちは「自分の目の黒いうちは」とか「来年はこうするぞ」とかよく言ひます。ところがここには「『きょうか、あす、これこれの町へ行き、そこに1か年滞らし、商売をして一もうけしよう』と言う者よ——」とあります。これは私たちが普通言ひそうな言葉ですが、神様は「よく考へてごらんなさい、あなたがたの命はどんなものであるか、実はあすのこともわからな

い身ではないか。使命のある間は地上に遣わされているが、その時が来ればただちに帰らなければならない。だからそういう事は言えないのであって、むしろ、主のみ心であれば、生きながらえもし、あの事この事もしよう、と言うべきである。それ以上に出る事は、神様の前に高ぶる悪である」と言われています。

今従わないで置いて、先にどうしようとか、こうしようしようとか、出来るとか出来ないとか、「あの事がこうなったら、私は従うのですが——」と言う人は従えないのです。従うと言ったら、今従わなくてはと言われます。ですから「すべてのわざに時がる」と言うのは、「今従いなさい」「お前には今しかない」と言われている訳です。

主はベテロに向かって、「汝はわれに従え」と言われました(ヨハネ21章)。私はあそこを読む時に、その中に時間の要素が入っていると思いました。つまり「汝は今われに従え」という意味です。今従わなくては明日は従えない。明後日は勿論従えない。そのうちに自分の命も分からない、だからあなたは今従いなさいと言うことです。今、神様が生かして下さっていることは確かなのですから、私は今ここで力を尽くして神様に従ってまいります。それは決して、「なるようになる」という事ではないのです。神様は信頼に対して必ず責任を持って答えて下さいます。

◆伝道の書 3章にかえて——神様がすべてのものをご支配になっておられるという事を認めるならば、私たちは今迅速に従い、また次を従うために本気で用意をしておく事が必要です。

「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある」全部をご支配になっておられる方が、一番良い時を見て、一番良い所に私たちを置いて「今従いなさい、見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日です。わたしはひとり子を賜わったほどにお前を愛して、永遠の命を与えようとしている」とおっしゃるので「はい、有難うございます。こんな者でございますけれど、あなたを求めます。願いに聞くとおっしゃいますから願います。また私を助けるとおっしゃったから、あなたを求めます」と求めてまいりますと、あとの事は従わせた方が責任を持って下さいます。

【従わせた方が責任を持つ】

人間の世界でもそうでしょう、「こうして下さい」と言う場合には、その人の将来の事を考えています。ですから「はい」と従って下されば、次はこうしましょう、次はこうしましょう、あるいはこういう事が起って来たらどうしようと言う事は全部考えてある訳です。冷たい人間、知恵も力も限りある人間がちょっと考える事でも、その段取りがありますが、神様は私たちにとってどんなに偉大な段取りを考えておられるでしょうか。今ここで従うなら、次は神様が開いて下さる。従わなければ次は開けません。

ですから自分の生きることも死ぬことも、神様に任せてしまって、今日すべてのものの支配者に自分を投げ掛けて行きたいと思います。「今しかないのだよ」とおっしゃるので、この方の前に何としても従わせて頂きたいと思います。また次を導いて頂きたいと願っています。

「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある」(伝道の書3:1)と一緒に祈りしましょう。(1988.1.3 戸畑教会新年聖会 8)

#### 参考文献

- |                             |      |      |      |
|-----------------------------|------|------|------|
| 時とはなにか<br>(暦の起源から相対論的「時」まで) | 虎尾正久 | 講談社  | 1969 |
| 時間<br>(その哲学的考察)             | 滝浦静雄 | 岩波新書 | 1976 |

## 第九章

### 十字架の事実を仰げ (誰があなたがたを惑わしたのか)

【イエス・キリストは何の為にあるのか！】 127

【キリストは福音のかなめ】 127

【人の心の動きやすさ】 128

【あなたはどこにいるか】 129

【すべては十字架から】 132

【イエス・キリストは何の為にあるのか！】

【キリストは福音のかなめ】

「ああ、物わかりのわるいガラテヤ人よ。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に描き出されたのに、いったい、だれがあなたがたを惑わしたのか」（ガラテヤ3:1）

◆ガラテヤの教会は初めパウロの伝道によって、単純にイエス・キリストを信じて、命の恵みにあずかり大変喜んでた訳です。ところがパウロが去ったあとに、律法主義者たちが現れ、救いの完成には律法を守り、割礼を受ける事が必要であると主張したのです。

3節に「あなたがたは、そんなに物わかりがわるいのか。御霊で始めたのに、今になって肉で仕上げるというのか」とあります。肉とは肉の割礼の事で、創世記17章にあります。神様が先祖アブラハムに契約を与えられ、「あなたがたはわたしの契約を守り、わたしの民である証拠に男子は生れて 8日目に肉体に傷を付けなければならない」と命じられた訳であります。

律法主義者たちは、イエス・キリストを信じて救われたにしても、割礼は受けなければならないと教えた訳であります。

そこでパウロは、「そうではないのだ。あなたがたは律法を守って、立派な行いが出来たから救われたのか、それとも福音を単純に信じてイエス・キリストの十字架の血によって罪が許され、神様の命にあずかる事が出来たのか。御霊を受け、あれ程大きな経験をしたことは無駄であったのか——律法による割礼を受けなければならないと言うなら、イエス・キリストは何のためにあるのか」と言う訳です。パウロは非常に憤慨して、（文語訳によると）「愚かなるかなガラテヤ人！」と書いております。「馬鹿やろう」という激しい勢いで、この手紙を書き送っているのであります。

◆「十字架につけられたイエス・キリスト」とは、決して飾り物ではありません。救いの本質であり、また救いの鍵、福音の要であります。

ですからパウロは自分がイエス・キリストによって、罪人のかしらから使徒と変えられ、神様の全権大使として遣わされたということについて、大変感激して、「わたしは罪人のかしらであったのに、わたしを救うためにイエス様がこの地上に来て下さった。これはまさしく受けるべき言葉である」と言って、その生涯を

傾けてイエス様に従ったのであります。

行いが出来なかったところか、神様に激しく背いていた者であったのに、イエス様の恵みによって救われたのですから、彼はその一事を人々に伝えました。

1コリント 1章、2章あるいは15章に書いてありますが、自分は十字架につけられたイエス様以外のことは何も知るまいと言っています。

1コリント1:22/24 朗読。「わたしは十字架につけられたキリストを宣べ伝える」——しるしを求める人たち、あるいは知恵を求める人たち、色々あるけれども、神様は上から——宣教の愚かさをもって信じる者を救うこととされた。「なんだ、あんな十字架が」と言われる十字架をもって、人を救われるのだから、「わたしは十字架につけられたキリストを宣べ伝える」と言っています。

1コリント15:1/5朗読。パウロは、「わたしが一番大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身が受けたことである。すなわちイエス様によって救われて、新しくされ、聖霊に満たされ、使命に遣わされた。全く正反対の生涯に入れられた。イエス・キリストが十字架にかかって死んで、3日目に甦られたことは多くの人の証言からも確かである」と言っています。

【人の心の動きやすさ】 ◆私はガラテヤの教会の人々を見る時に、人間はいかに動きやすいものであるかと思います。パウロが去った僅かのちに偽兄弟とか、壊したものを再建する人、あるいは肉において見栄を飾ろうとする者たちが宣べ伝えた教えによってたやすく動かされました。「なるほど、神様が喜ばれることは、昔も今も変わりがない筈だ。ではこの先生たちの言う通り、割礼を受けなければならない」と言い始めたのです。

「パウロは間違っている、神様のみ心は昔も今も変わらないのだ。キリストの十字架ばかり言って、律法は全部やめてよいと言うのか」と言う訳です。「彼は大体イエス様に直接お目にかかって師事した人ではない」というような事を言ってパウロを中傷する。こうしてガラテヤの教会はたちまち十字架を見失って行く訳であります。

魂が惑うことは恐ろしいことであります。肉体についてならば、例えば視力検査表を見て、リングの欠けが上にあるものを左斜め上に見たり、色覚異状の検査

で数字が見えたり、見えなかったりするくらいの事でしょう。

しかしガラテヤの教会は、イエス様と正反対の方向に惑って行った訳です。「おきての行いで救われるのではない」というのが、おきての行いが必要というように彼らは移って行きました。

ですからパウロは激しい勢いをもって、「十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に描き出されたのに、いったい、だれがあなたがたを惑わしたのか」――なぜそんなものに騙されるのかと激しく叱っている訳です。

今晚私たちに対して、このみ言葉を与えられたのは、私たちにとってもひとごとではないからです。人の心は自分自身にとっても、甚だ手に負えないものであります。「心は万物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている」とエレミヤ書に書いてあります。

ですから「物わがりのわるいガラテヤ人」ではなくて、「物わがりのわるい伊規須、十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に描き出されたのに、いったい、だれがあなたがたを惑わそうとしたのか」――と私はここで自分を反省させられました。人間の目はたえず十字架から他に移ろう移ろうとしてまいります。いつの間にか動いてしまうのです。

十字架から目をくらまされ、イエス様のことを忘れて、「私はもう長いクリスチャンでございます。神様の前に喜ばれるには、やはり人の前にもちゃんとしてクリスチャンらしく行いも正しくしなければならぬ。この世の中で良いことは神様の前にも良いことに違いない」とだんだん移って行きます。神様に従った結果として、行為が出て来るのならよいかも知れませんが、形を作らなければならぬとなってきますと、これは間違いです。

◆「十字架につけられたままなるイエス・キリストが、目の前にあらわされている」とありますので、私は今晚もう一度イエス・キリストの十字架を見せて頂いた訳であります。

ルカ23:32/43朗読。これは十字架の現場であります。ここにたくさんの人物が登場しているのでそれに印をつけてみました。イエス様は別にして、

#### ①民衆

【あなたがたがいてるか】



②役人——他の箇所を見ると、つかさとか祭司長という意味らしい

③兵卒ども

④犯罪人の一人

⑤もう一人の犯罪人

⑥（名前は出ませんが）25節で暴動と殺人のかどで獄に投ぜられた者（これはバラバです）。彼はイエス様がかけられる前に、十字架から取り下ろされ釈放されました。

あとの方には、イエス様を知っていた者たちとか、女たちも登場しますが、43節までの現場にはこの6種類の人が記されています。

「あなたはどこにいるのか」（創世記 3章）とアダム、エバが問われたように、私はこの現場の中でどこにいてイエス様を見ているのだろうかと問われました。人々や役人、兵卒たちはイエス様を死刑にする執行者側です。民衆は傍観者です。また、犯罪人の一人はイエス様をそしています。「あなたが救主なら、降りてわたしを救ってくれ、そうしたら信じてやろう」しかしもう一人は心砕けて、「イエス様、どうぞ、御国にいらっしゃった時は、わたしを覚えて下さい」と申しました。また、バラバは自らが無罪で放免されて、自分の代わりにイエス様が死んだという事を知った訳であります。

いったい、私たちはここで、どこにいるのでしょうか。あるいは傍観者でしょうか。かつてはそうでした。また死刑を執行する側でしょうか——私は別に刀や槍を持ってイエス様の体を傷付けることはないと思いますが、自分が罪を犯す事は、イエス様を再び十字架につける事になります。また、犯罪人の一人のように、自分の悪いことは柵に上げて、「わたしを救ってくれたら信じてやろう」と言う人でしょうか。あるいは十字架にかけられて心砕け、イエス様に求めている人間でしょうか。

色々な立場に立ち得ると思いますが、私はバラバだと思います。イエス様が、私のかけられるべき十字架にかかって下さった。それは神の子が罪なくして十字架にかかって死んで下さるものです。そして「父よ、彼らを許し給え。彼らはそのなすところを知らざるなり」と祈っておられる——それを見た時に、私はも

う何も申しあげる事は出来ないのであります。「主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである」と書いてあります。

ガラテヤ人への手紙には、「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」と書いてあります。私はそのように、「ああ、わたしのためにイエス様が十字架にかかって、すべての罪を負い、永遠の滅びに陥るべき者を、永遠の命に入れて下さる」と思いますと、神様の前に何も申し上げることは出来ないのです。

婦人たちが、刑場に引かれて行くイエス様を見て、「おかわいそうに」と言って泣いている所がありました。イエス様はそういう事を期待しておられるのではないのです。神様は私の為にあえてそういう事を行って下さったのですから、神様の御旨に従い、生かして下さる方に従って行く以外に生きる道はない訳です。

「愚かなるかなガラテヤ人、十字架につけられたまいしまなるイエス・キリスト、汝らの目の前にあらわされたるに、誰が汝らをたぶらかししぞ」——私は今晚、この方の前にもう一度出させて頂いて、十字架そのものを、よくよく見詰めさせて頂きたいと思いました。

イザヤ書45章に、「地の果なるもろもろの人よ、わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる」と書いてあります。イエス様は別に難しい勉強をして、何か熱心・努力をして、クリスチャンらしくなって、何年か年功を積んだら救おうとはおっしゃらないで、「わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる」とおっしゃいました。

イエス様が私の為死んで下さったと知りますならば、もはや、自分中心の生き方をする事は出来ません。ドイツの封建時代にジンゼンドルフ伯爵は美術館の十字架の絵を見て、その前で立ち尽くし動くことが出来なくなり、「(閉館)時間ですから帰って下さい」と言われて、彼はそのまま教会に献身してしまったという話であります。

それは、「われを仰ぎのぞめ、さらば救われん」という神様のお言葉そのものであります。別に誰が何を言った訳でもない。しかし彼は、その絵に、「わたしはあなたの為にこのことをした。あなたはわたしの為に何をなしたか」と書いてあったのを見て、彼は城に帰ることが出来なかったという事であります。

【すべては十字架から】 ◆イエス様を信頼する事によって、すべての恵みが流れてきます。御霊はその保証をして下さいます。使徒行伝 1章、「あなたがは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」と神様がお約束下さったように、ペンテコステの日に弟子たちの上に御霊を注いで、彼らが道筋にかなっているという事を保証されました。こうして御霊が主人公となって使徒行伝が綴られてまいりました。私たちは、クリスチャンとして、イエス様に従うにはどうしたらよいだろうか

と研究する必要はないのであって、あのイエス様が私たちの為に十字架にかかって下さった、という一事が私たちのうちにはっきりしますならば、イエス様は御霊を注いで私たちの主人公となり、神様に従う生涯を全うさせて下さる——それは自分の計画、努力によらず神様が完成されることであります。

今晚もこの方の前に「ああ、物わがりのわるいガラテヤ人よ」といわれないように——かつては物わがりが悪かったかも知れませんが、今晚、「十字架につけられたままであるイエス・キリストが目の前にあらわされて」とおっしゃる、この方を仰いで、神様が私たちのうちになそうとしていらっしゃる御旨に全く自分を委ねてお従いさせて頂きたいと思えます。そうするならば、自分の計画によらず、神様のみ心が行われて、「なるほど、神様という方は素晴らしい方である」と神様の名が崇められる訳であります。

人間のした事によっては、決して神様は崇められません。自分がうまい事をやったのだ、私が計画を立て熱心に準備をしたからだという事になりますが、自分の計画を放棄しますと、全く神様のわざが行われ、神様の名が崇められる訳であります。

私が聖会のためにお祈りして、教えられる点をカードに書いて行きますが、自分の考えで進んで行きますと、直前になって、それがぐっと変わる訳です。全く違った事を教えられる場合があります。

その時に思いますのは、神様が聖会の主人公であられるという事です。私は物わかりが悪くて人間の熱心や計画で——計画と言っても、自分が考える訳ではないのですが——こういうことに違いないと進んで行きますと、神様は「愚か者、違う！わたしに従いなさい」とぐいと変えられる訳であります。

その時に私は従順に従ってまいります。そうすると、集会のあとでは、「なるほど、自分の考えていたこと、期待していたことと神様のなさった事はこんなにも違うか」という事が分かって感謝をします、そして概要集を吹き込んで、一回の集会が終る訳です。

今晚も神様は、「お前はこの十字架につけられたままであるイエス・キリストを仰ぎ望みなさい」と言われる、それだけであります。そこから全部流れて来る。あの栄光の主、輝かしい十字架の上から神様のすべての恵みは流れてまいります。エゼキエル書に、神殿の下から川が流れ出て、だんだんと流れて行くうちに、深い広い流れとなって人々を潤しあるいは押し流す——という事がありました、そのように、私の為にイエス様が死んで下さったと言う一事を仰ぎ望んでまいりますと、そこから私の生涯についても、あるいは教会についても、更に色々なことについても、神様が大きな流れを起そうとしていらっしゃると思われたい訳であります。

神様は、あれもこれも研究して——とはおっしゃらない、マルタに向かって、「無くてならぬものは多くはない。ただ一つである。マリヤは良きかたを選んだ」と言われましたが、私たちはあれこれと考えやすいものですが、私はここで悔い改めて、ただ一つ、主はわたしのために十字架にかかって下さったという一事を見つめていきたいと思えます。

ヤコブの手紙には、「真理のおきてを一心に見つめてたゆまない人は、実際に行く人である。こういう人はその行いによって祝福される」と書いてあります。今晚もこの方を仰ぎ見て、十字架に聞き従いたいと思えます。ご一緒にお祈りしましょう。

(1988.1.3 戸畑教会新年聖会 9)



## 第十章

### 真理を行っている者は光に来る (神を恐れる事が第一)

【三日間のまとめ】	137
【裁く為でなく救う為】	137
【信じられなくなるという裁き】	138
【真理を行うとは】	139
【神を恐れ分を知る】	139
【命を与えるのが御旨】	140
【旧約と新約】	141
【不信の力が働く中で】	142
【神様の御計画による】	142

「しかし、真理を行っている者は光に来る。その人のおこないの、神にあってなされたということが、あきらかにされるためである」(ヨハネ3:12)

◆今年この三つの標語を与えられました。右にあるのが、

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」

このみ言葉を味わいますと、神様のご熱心がどんなに恐るべきものであるか、また今という時がどんなにかけがいのない時であるか、そしてまた、その恵みの時を無為に過ごしたならば、どのような恐るべき刑罰(報い)を受けなければならないか——神様がお怒りになるというよりも、自ら恵みの機会を断ち切ってしまう——という事を強く教えられた訳であります。

今という時、いかに私たちが自発を要するか——神様がどんなに手を開かれ、招かれても、こちらに進み出る姿勢がなければ、何物も動かないという事をしみじみと教えられた訳であります。

只今お手元に差し上げました資料の、上左に①がありますが、これは第1回目の集会という意味です。ただ今は10回目ですから右の中ほどに括弧10とあります。済んだ所には副題がついております。例えば①には「命を捨てて下さった御愛」(御子を信じる者に永遠の命の自覚)というふうに書いてあります。このような経過をもって、神様は、ただ今申しました幾つかの項目について迫って下さった訳です。

◆神様が、「ひとり子を賜わったほどに、この世(——つまり私たち)を愛して下さった」と言う事はいかに恐るべきことであるか——自分の命以上に尊いものを賜わったのです。永遠の滅びに陥るべき私たちを、ご自分に繋がるものとし、死を乗り越えさせ、命を与えようとして下さった。この為に御子を世に遣わして、永遠の救いを与えて下さった——これは実に驚くべきことであります。

神様がもしこの世を裁かれたらどうでしょうか。ノアの洪水の時の事を思い出すと——神様はこの時、世のすべてを滅ぼされました。「人の思いはかる事は悪いことばかりである。わたしは地の上に人を造ったことを悔いる」とおっしゃって、水をもって人も獣も這うものも、空の鳥までも完全に滅ぼされました。そ

のあとで神様は、「二度と地を滅ぼさない。わたしは人の故に再びこれを呪わない」とおっしゃいましたが、人間の悪はますますつってまいります。「滅ぼさない」とはおっしゃいましたが、悪をそのままにしておく事が出来ません。

そこで神様は人間に律法をお与えになって、これを外から変えようとされた訳です。しかし人間は外から変えようとしても変わりません。これは神様の失敗という事ではなくて、人間がどんなに熱心・努力をもって、神様の前に全くなろうとしても、出来ないという自覚を与えられたと思うのです。神様はノアの時に約束されたように再び呪わないのですが、これをそのままにしておく事は出来ません。どうしても悪を取り除かなければならない。

そこで、遂にご自分のひとり子イエス・キリストをこの地上にお遣わしになって、私たちのすべての罪を取り除く——イエス様を信じて罪許され、死ぬべき者が生かされることによって、内から人間を変える——ことをご計画になった訳であります。

「彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである」（18節）——イエス様をこの地上に遣わされたのは、私たちを裁くためではなくて、救う為ですから、イエス様を信じさえすれば、誰も裁かれることはない訳です。

「信じられなくなるといふ裁き」 ◆「有難うございます」と申し上げれば、神様の救いにあずかる事が出来るのですが、それを人間はなかなか信じない、かたくなな者であります。また、一度決心しても、たやすく移り動いてまいります。駈れますから、自分の身を同じ状態に保つ事がなかなか出来ません。

ここに「信じない者は、すでにさばかれている」とありますが、何を裁かれているかと言いますと、彼らは自分が信じる事が出来なくなってしまうのです。そのあとに、「さばきというのは、光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛したことである」（19節）と書いてあります。神様の裁きは外から来るというよりも、自分が信じられなくなってしまう、信じないから信じられない——これは当然のことですが、光よりもやみを愛して行く事になります。



物事は何でもそうですが、「このようにしよう」と思えばそうなる行く。

「これは駄目だ、自分はこんな事は出来ない」と思えば決して出来ません。

「私はイエス様の救いにあずかるような者ではありません」と言っていますと、自分自身がどんどん退いて行くこととなります。20節に、「悪を行っている者はみな光を憎む。そして、そのおこないが明るみに出されるのを恐れて、光にこようとはしない」とあります。悪とは光を憎むことで、真の光であるイエス様を憎んで、イエス様の所へ近付こうとはしない。神様を恐れ敬わないところに、イエス様を信じるといふ事はあり得ないことであります。

◆「しかし、真理を行っている者は光に来る。その人のおこないの、神にあってなされたということが、明らかにされるためである」(21節)

ここにある「真理」とは一体なんであるか——(新約)聖書の中にかくつも出て来ますが、なかなかむつかしい事です。哲学的に言いましたら色々なことが言えると思いますし、聖書にもそのものずばりの説明はありません。

しかし、私は聖書的に見て、真理とは「福音そのもの」である、ある所を読みますと、「イエス様そのもの」である、また、「神様の言葉」であるとありますし、また、「御霊は真理である」とも書いてあります。

「真理を行っている」とは、つまり、神様を恐れ敬って従うという事でありませう。そうする事によって自分を知り、光であるイエス様に来るようになる訳であります。

◆伝道の書12:1/14 朗読。ここの結論は、「神を恐れ、その命令を守れ」という事です。神様を全能者として敬い、自分がどんな者であるかを知らなければ、私たちに下される裁きの恐ろしさ、また命と恵みの尊さを知る事は出来ません。人は、「私は知りませんでした、分かりませんでしたから——」と言いますが、神様は世のはじめのさきから、ご自分の創造された天地、あるいは自然のあらゆる現象を通して、私たちにご自分を現しておられるのであって、「知らなかった、気が付かなかった」と言うことは出来ないと書いてあります。これはローマ人への手紙第1章にあります。

自分自身のことを考えて見ますと、人間はどんなに大きな神様の手の下に生か

【真理を行つとは】

【神を恐れ分を知る】

されている者であるか、そして決してその手を越える事が出来ない者であることを、しみじみと教えられます。

「ちりは、もとのように土に帰り、霊はこれを授けた神に帰る」——人間がどんなに大きなことを言っても、どんなに健康で長生きしたとしても、結局は土に帰り、霊はこれを授けた神に帰ります。

昨日ですか、新春対談番組で、医者と学者が対談をしていました。「人間が人の体に色々な手を加える事が出来るようになったが、延命だけをはかる事が、人間にとって本当に幸福なのだろうか」と話し合っていました。人は死ぬ時は死ななければならぬという事です。その事を悟るならば、私たちは謙虚になることが出来ます。神様の前に、人間はあくまで造られたものであって、すべては神様のご支配のもとにあります。

「アルパでありオメガである」とおっしゃる方が、万物をお造りになって、すべてのものをご支配になっているが、やがてすべてのものは過ぎ去って行く。その中で、今という時を定めて、私たちをこの地上にお遣わしになり、使命を与えていらっしゃる。ですから、神様に従うことをしないならば、生きていくことは意味がなくなりますし、神様が「駄目だ」と言って結末をお付けになれば、どんな恐ろしいことになるか分かりません。

旧約聖書にたくさんの例がありますが、神様が滅ぼすとお決めになれば、何者も惜しむ方ではありません。ノアの時は、ただ 8人だけを残して、ことごとく滅ぼされました。

◆しかし、出来るならば、何とかしてその中からいくばくかを救いたい。はじめ、神様の形にかたどって尊くお造りになったものを、むざむざ滅ぼすことは好まれない。そこで私たちを救う為に、イエス・キリストを十字架につけて、私たちのすべての背きの罪を許し、立ち返らせようとして下さいました。

ですから、今年、新年聖会が始まる前に、お祈りをして教えられたことは、「どうしても命を選びなさい」と言うことです。永遠の命を私たちに与えることは、神様の何よりも大きな御旨であると教えられた訳です。

そういう自分であり、そういう厳かな神様である。また、恐ろしい裁きが待つ

ている時に、「今」という時を定めて、立ち返る機会を与えて下さいました。かけがいのないご自分のひとり子を十字架につけて、「帰れ」と招いて下さる事は、どんなに感謝であるか——しみじみと教えられ、学んだ訳であります。

私たちの心は非常に動きやすく、頑なになりやすいものです。こんにちユダヤ教では、神様を恐れ敬うと言いながら、お遣わしになった救主を拒んでいます。私たちはユダヤ教について云々しますが、ひとごとではないと思います。私たちもまた、イエス様を信じて、「私はこうしよう」と言いながら、たやすく移り変って転落してまいります。

自ら不信仰の悪循環によって後退し、あるいは背く事がないように、神様を恐れ敬い、イエス様が私たちの所に来て下さったことを、受け入れなさいと言われる。イエス様を信頼してまいりますならば、信仰を与えられ、保証として、神の子の権威を与え、永遠の命を与えて下さる——このように約束されている訳です。

◆ヨハネ1:9/11朗読。これは信じない者、光よりも闇のほうを愛した者の姿ですが、イエス様がこの地上にいらっしゃった時に、多くの人々はイエス様を受け入れませんでした。彼ははじめから世におられた方であり、実は創造者であったのですが、世はそれを知らず、イエス様を殺してしまいました。

私は自分の心の状態を考えます時に、やはり同じであったと思います。神様を敬うことを知りませんので、その方がお遣わしになったイエス様を受け入れる事が出来ませんでした。

私は最初、教会にまいりました時に、旧約聖書と新約聖書の区別がよく分からなかったのです。翻訳の意味ではないかと思っていました。しかしのちに「やく」は約束の「約」である、「古い約束」と「新しい約束」と知りましたが、それがまた良く分かりませんでした。

今分かりますのは、旧約聖書において、神様はご自分の主権をはっきりとしていらっしゃるという事です。殊にイザヤ書40章あたりからは、神様はこれでもか、これでもかと言うように、私たちに対して、「わたしのほかに神はない」と繰り返し主張していらっしゃいます。旧約聖書の最後（マラキ書）にまいりまして、

「あなたがたのわたしを敬う事実が、どこにあるか。わたしがもし主人であるならば、わたしを恐れる事実がどこにあるか」と言って結んでおられます。

神様が主権者である事を徹底された上で、その方がお選びになり、お遣わしになった救主を受け入れなさい。これによってすべての罪を許す事を定める——これが救いです。それによって、神様の救いがどんなに確かなものであるか、と言うことが明らかにされました。

それまでは救いを聞くことは聞きますが、土台の無い家のように——旧約聖書のことがはっきり分かりませんから、どうもイエス様の救いがはっきりしない——神様は愛だそうだ、イエス様は私の為に命を捨てて下さったそうだ、これは有難いことだ、というぐらいの事で終っていた訳ですが、もし救いがなかったなら、私はどんなに消え失せ、流れ去っても仕方のない者であった、それを救う為に、ご自分のひとり子を十字架につけて下さったと知った時に、救いがどんなに尊くどんなに確かであるかを学んだのであります。

【不信の力が働く中で】 ◆こんにちこの世には、光を受けず、光に従わない「不信」という大きな力が働いています。しかし21節は、非常に恵みの招きだと思いました。そのような中で、神様を敬って、神様が定めお遣わしになった光に来て、イエス様を受け入れるならば、すべての賜物は私たちに与えられ、その保証として神の子の権威を与えられるし、命を与えられる。

ご自身が永遠から永遠に互る方であるように、私たちに對して永遠の命を与えて下さる、肉体は必ず失われなければならないものですが、それを乗り越えて神様の前に覚えられとう事を教えられた訳であります。

【神様の御計画に】 ◆聖会の流れについて、聖会の各集会の為に神様から教えられた所は、これをカードに書き止めてまいります。少し先の集会になりますと、記入する事が少ない訳で漠然とした状態です。近い集会はそれがかなりはっきりしてまいります。

しかし、神様の御旨は、私の予測して来たところとしばしば変わる訳です。同じ聖書のみ言葉であっても、お話の内容が大きく変わる事があります。ですから、イエス様がゲッセマネでお祈りなされたように、「しかし、わたしの思いを遂げようとするのではなく、あなたのみこころを行ってください」と神様の前にお委ね

して手を放す訳であります。

それによって、この聖会のすべては神様によって導かれている事が、明らかになります。神様が一番良いことをしておられると信じさせて頂いている訳です。

神様は今日も、ご自分が全能者であることを現わそうとしておられます。「御子を遣わして、あなたがたに永遠の命を与えようというわたしの計画を受け入れてほしい」「わたしに心を向けてほしい———そうしたら、すべてを遂げ、永遠の命を与えられていることを明らかにしよう、と望んでおられます。

この方の前にもう一度へりくだって、導きを待ちたいと思います。ご一緒にお祈りしましょう。

(1988.1.4 戸畑教会新年聖会 10)



## 第十一章

### 神の和解を受けよ (全能者が和解を願うとは)

- 【そんな事があり得るか!】 147
- 【この嫌らしい者に】 147
- 【反逆者を和解の使徒に】 149
- 【神様の柔和・謙遜】 151
- 【御霊を消すな】 152
- 【遠慮は無用】 153
- 【こんな平和条約があるだろうか!】 154
- 【増殖する救い】 155

「神はわたしたちをとおして勧めをなさるのであるから、わたしたちはキリストの使者なのである。そこで、キリストに代って願う、神の和解を受けなさい。神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである」(2コトント5:20/21)

◆「神の和解を受けなさい」と書いてあります。私はこれをじっと味わいました時に、神様が私たちに和解を求められる——そういう事があり得るだろうか、と思います。しかも「キリストに代って願う、神の和解を受けなさい」と書いてあります。

ある年とったお母さんがどこかに出掛けられる時、若い夫婦が「おばあちゃんどこへ行くの」と聞かないというのです。ある人が、「それではお互いに困るじゃないですか、——おばあちゃんも若い人に知らせるし、お嫁さんのほうもおばあちゃんに尋ねたらいいじゃないですか」と言いますと、自分は年長者だから、若い者から聞くのが礼儀じゃないだろうか。年寄りのほうから一々断って、「どこどこに行きますからよろしく」などと言うのは筋が違う——と言って、なかなか打ち解けて心を開く事が出来ないと言います。

年上とか年下とか言っても僅かなことです。あるいは嫁とか姑とか言っても大したことはありませんが、私たちと神様とは、どれくらい違うでしょうか。神様は私たちの造り主であります。「み年の数ははかり知られず」と書いてあります。人間は長生きをしても、100歳とか120歳とかですが、神様のお年は何歳でしょうか。

宇宙の果は150億光年であると言われます。それをお造りになった神様は151億歳ぐらいでしょうか、そうはいかないと思います。造るものと造られるものとは全くレベルが違います。ですから神様のお年は分かりません。

それなのに、神様が私たちに向かって、「和解をしてほしい」とおっしゃる——どういう事なのでしょう。お声を一つ聞いても、私たちは震え上がるような気がするのに、神様が、「お願いする」とおっしゃっているのです。

◆私たちがよほど良い者ならいざ知らず、どれ程神様の前に嫌らしい者でしょうか。自分から罪を犯して、神様に背いて行った私たちであります。アダムとエ

【そんな事があり得るか！】

【この嫌らしい者だ！】



バは私たちのひな型でもありますが、神様のお言葉を曖昧にして、「欲はらみて罪を生み、罪なりて死を生む」となりまして、神様に向かって高ぶり追出されます。神様は何度も何度も引き返そうとされましたが、人間は心を頑なにして、一時「ごめんなさい」と言う事はあっても、またすぐ頑なになって行く——人間の心は実に始末の悪いものです。

マラキ書に、「お前たちが、わたしを敬う事実がどこにあるか」と言われています。私たちは神様の前に、はなはだ悪い人間であります。いやな人間なのです。大体は良いけれども、ここが少し悪いと言うようなものではありません、とにかく理屈抜きに「いやだ」と言う、そういう人間かも知れません。

先日、ニューヨークの日本人学校の補習校の問題をテレビ特集で見ました。日本人がアメリカの高級住宅地の大きな家をどんどん買い締める。日本の感覚からするとかなり安くて、相当な家でも10万ドル（1200～1300万円）ぐらいであるそうです。

ところが不動産屋が中に入って、日本人が買うからとどんどん値段を吊り上げて、100万ドル出そうと言う業者が出てくる、そうすると周辺の土地や家屋の値段が上がって、アメリカ人が困ってしまう。どんどん食い荒らされて、税金が払えなくなるので自分たちが売って出て行くような現象が起こるそうです。

補習校に行く日本人の子供たちが、ニューヨークだけで5000人ぐらいいるそうです。というのは、日本人の親はアメリカの学校のレベルが低いと見る訳で、日本に帰ってからの事を考えて補習をする訳です。

アメリカの学校は土曜日曜が休みですから、例えば土曜日にどこかの使っていない校舎を借りて、日本人の一日補習校にしたいと思って交渉に行くとは断られる。とにかく、非常に嫌われています。

またアメリカの学校に入学させてもらっても、英語が分かりませんから、すぐには授業について行く事が出来ませんので、教室のうしろに日本人の先生が来て分からない子供を集めて二か国語授業をする。

するとアメリカ人たちが、「我々の税金で、なぜあんな嫌らしい奴らの子供を教育しなければならぬか」という訳で怒るらしい。なかなかこれは大変なこと

だと言われています。

色々な事情はあるでしょうが、日本人の存在そのものが嫌われる、いやらしい奴だ、何をしても自分たちと考えが違う、やり方も違う。よその惑星から来たような人種で、いやになってしまう。世界にソ連と日本がいなかったら、どんなに平和に過ごせるだろうという話もあります。

私たちは世界で生きて行く事は、なかなか難しいものだと思いますが、神様の前には一体どうでしょうか。神様は私たちに幾ら言っても言っても、言うことを聞かない、人間同士の間で嫌らしいぐらいですから、神様はもっと嫌らしいかも知れません。もうこんな人間は相手にしたくない。他の人は救ってもよいが、日本人はお断りだと言われても仕方がないかも知れません。

ところが神様は決してそんな事はおっしゃらないで、非常に嬉しいことに、神様は私たちに対して差別なく、非常な低姿勢で、和解をしてほしいとおっしゃる。背く者に対して和解してほしいと、ご自分のひとり子を十字架につけ、私たちの罪を許し、義とするとおっしゃるので、これは驚いて、何とも言うことが出来ない訳であります。

私たちは一体どうしたらよいのでしょうか。私はもう頭を上げることが出来ません。「ああ神様、有難うございます」——有難うも言えない、何と言ってよいか分からない、そんな事があるのでしょうか！と思います。

悪いのは私であって、私が背いて神様と戦争状態になったのですから、「ごめんなさい、もう再び神様に背きません。従順に従うことが出来るように助けて下さい。どうぞ僕を新しく造り変えて真実をもってお仕える事が出来るようにして下さい」——それ以外に私の生きる道はありません。

◆パウロははじめイエス・キリストを信じない人でした。神様のみ心にかなうのは、自分が立派な行いをして、正しく律法を守って従うことだと思っていました。ですからクリスチャンが現れて律法ではないのだ、イエス・キリストを信じる事によって、神様の前に罪が許されて、義とされる、というのを聞いた時に、彼は大変なことだと思ったのです。

これは異端である。破壊分子である。こんなものをはびこらしては大変だとい

「反逆者を和解の使徒に」

うので、彼は縦横に走り回って、鬼検事としてクリスチャンを捕まえては投獄し、あるいは迫害を加えました。

しかし、彼が逮捕状を持ってダマスコに向かい、その町の近くに来た時に、天からの光に打ち倒され、「お前はなぜわたしを迫害するのか」「あなたは誰ですか」と聞きますと、「わたしはお前が迫害しているイエスである」と言われました。彼は光に打たれて目が見えなくなり、人から手を引かれてダマスコに入りました。

そこで聖徒であるアナニヤが来て、「兄弟サウロよ」とお祈りしてくれました。その時に、目から鱗が落ちるようにして、見えるようになり、今までの生活から180度転換して、イエス・キリストの使徒となりました。迫害の急先鋒であった人が、イエス・キリストの宣伝者と変えられてしまったのです。

ですから16節に、「それだから、わたしたちは今後、だれをも肉によって知ることはすまい。かつてはキリストを肉によって知っていたとしても、今はもうそのような知り方をすまい」——かつてはイエス・キリストはヨセフの子、あんなものが救主であるものか——パウロはそういう知り方をしていたのです。しかし今はもうそのような知り方をしない——しないと言うか自分で気が付いたのではありません。光で打ち倒され、目がつぶされて、「わたしはあなたが迫害しているキリストである」とのお声を聞いて、イエス・キリストは神の子・救主であって、決して人ではないという事を知った訳です。

ですから、彼はイエス・キリストによって生かされる者となって、「キリストにあるならば、新しく造られた者である」と言われている通りになりました。それは全く神様から出たことであって、人間が力んでも分かることではなく、出来る事ではありません。

「わたしは罪人のかしらであった。文字通り迫害の先頭に立っていた者を、イエス・キリストが私と和解をして下さった。神様はイエス・キリストを通して私と和解して下さい、更に異邦人の使徒として、福音を携えて行き、多くの人をイエス・キリストと和解させる務めを自分に授けて下さった。これは二重にも三重にも驚くべき事である」と、彼はここで証しをしている訳であります。

自分が和解の福音を委ねられて、「あなたがたに勧めをする」——これは人間から人間に送っている手紙ではなくて、神様がご自分のみ心をこのようにしてあなたがたに伝えておられる。だから、「神様の和解を受けてほしい」——その為に、神様はご自分の真実を現そうとして、ひとり子を十字架につけて下さった。神様は全部カードを切ってしまうと、あと私たちがもし信じなければ、イエス・キリストを捨ててしまっただけ損かも知れません。それほどに神様は全部を投げ出して、私たちに答えてほしい、和解を受けてほしいと願っておられる訳であります。

◆詩篇81:8/16 朗読。神様はイスラエルの民に対して、非常に厳しい一面をお持ちでした。しかしここを見ますと、何と優しいことをおっしゃっておられるでしょうか。「勧告する」などと、神様が私たちにおっしゃる必要はない訳です。「こうせよ」と言われればよい。「しなければ打ち殺す」それでも当然でしょう。何もおっしゃらないで抹殺されても誰も何とも言えません。

しかし神様は穏やかに、私たちに対して「勧告する」または「聞き従うことを望む」——またあとのほうにあります、*「わたしに聞き従え、わが道に歩むことを欲する」*とおっしゃっています。神様は私たちに対してそれ程柔和な謙虚な方であります。

イエス様はある時に、「わたしは柔和でへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷はかるい」とおっしゃっておられます（マタイ11章）。イエス様は父なる神様を現しておられます。

詩篇 8篇には、「いかなれば人の子をかくも顧みられるか——なにになれば、こんな者を心にとめられるでしょうか」と書いてあります。

イザヤ書65章には、「背く民に対して、ひねもす手をのべられる神様である」と書いてあります。

どこを見ても、神様は私たちに対してへりくだった者となり、「わたしは仕えられる為に来たのではない——仕えるために、かえって多くの人のあがないとして、自分の命を与える為に来た」とおっしゃっています。あくまでも主は謙遜

でいらっしやいました。それは神様自身の謙遜を現しておられます。

◆ 1テサロニケ5:16/22 朗読。これは大変素晴らしい所です。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について感謝しなさい」とおっしゃる。これは難しいことをせよと言われるのではなく、そうさせて下さるという約束であります。そのあと19節に、「御霊を消してはいけない」——喜んで感謝して踊り上がりたいのですが、そればかりではいけない。一方では、神様が細い声をもって語っていらっしやるお声を消してはいけない。「いや、なに、そんなことがあるものですか。私は知りませんよ」と言う、あるいは「ちょっと待って下さい。今忙しいからあとにしましょう」と言いますならば、御霊は語ることをやめられるでしょう。

人間でもそうです。対話をしていて、相手の人が自分の事ばかりどんどん言って、人のことを聞かなければ、「もう言っても駄目だから待っておこう」と暫く黙ってしまうかも知れません。相手の人が全部言ってしまってから、それでは言っただけよ、しかし、間に合わなければ仕方がない、という事になります。

私たちは対話の間(ま)を大切にしなければなりません。いつ発言のチャンスを相手に渡すかという事です。そうしないと相手の人は話ができません。ちょっと一瞬相手に渡して、話しはじめなければ、またこちらが発言してもよいのですが、こちらが言い放し、向こうも言い放しとなりますと動物の喧嘩のようなことになります。これでは話になりません。

神様は非常にデリケートに、私たちに対して間をはかっていらっしやると思います。こちらが「はい」と聞けば、また語って下さる。こちらが話すばかりですと、神様は黙ってしまわれます。人間同士の対話よりも、もっと気を付けなければなりません。永遠の命にかかわる重大事であります。数十年の生涯どころか、100年にも1000年にもかかわる事かも知れません。アブラハムの時代からこんにちまで3000年か4000年、彼の受けた祝福の道に従って、私たちが今祝福を受けています。

「預言を軽んじてはならない」——神様のお言葉を軽んじるという事は、私たちにとって非常に不幸なことです。ヘブル 6章にあります、**「預言をなみす**

る者は、再びこれを悔い改めに立ち返らせることは出来ない」とおっしゃいました。

私たちがちょっと失敗した、あるいはうまくいった、と喜んだり悲しんだりしますが、神様のことは永遠にかかわります。再び悔い改めに立ち返らせる事ができないような所に落ち込んで、ルカ16章の金持のようになりましたら、取り返しがつきません。人間の目に見える、良かった、しまった、儲けた、損をしたなどは大した事はないのです。死に病になった、痛かった、これも大した事はない。問題は、今よりものちの事であります。

神様の前に決定されたことは取り返すことは出来ません。永久に定められてしまいます。地獄の火に投げ込まれても、灰になってしまえば、痛くも痒くもないと思いますが、ところが焼けないのです。永久にじりじりと焼かれて、「熱い、熱い、ごめんなさい、ごめんなさい」と言わなければなりません。

神様の前に、そのきっかけは、「御霊を消すな、預言をなみすな」——神様のお言葉を尊ぶか尊ばないか、神様の細いお声に対して、それを押し殺すのか、それとも良く聞くのか——心の問題で誰にも分からない、小さな問題と思えますが実は大問題であります。

◆今日、私たちは神様からこの恵みの時を残して頂いて、神様が私たちの責任者となって下さる。責任者どころか、永遠の約束を与えて下さる。私たちは悪意でないにしても、「いや、私はまだとても信仰がありません。私はまだ早かった」という訳です。「もう少し分かるようになってから行った方が良いのではないか。分からないで行っても、ご迷惑がかかるかも知れない、偽善者になるかも知れない」——しかしその心配はいりません。神様は私たちを招いて、何もない何も出来ない嫌らしい事をご承知に上で、命を捨てて手を伸べて下さるのに、どうして遠慮する事があるでしょうか。

【遠慮は無用】

この世の中でも、人が生きた死んだとなれば、目の色が変わります。「死人が出ました。色々約束をしていたがちょっと待って下さい」と言えば、つべこべ言う人はありません。「そうですか、それは大変。それでは失礼します」という訳で、帰ってしまいます。神様は私たちに対して、それくらい真剣に考えていらっしや

るのに、私たちが曖昧なことをするのはとんでもない事であります。

「**こんな平和条約があるだろうか！**」  
◆「神がわたしたちをとおして勤めをなさるのであるから、わたしたちはキリストの使者なのである。そこで、キリストに代って願う、神の和解を受けなさい。神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである」(2コリント5:20/21)

旧約聖書ヨブ記には、「神と和らいで平安を得なさい」と書いてあります。この世の中の国家同士が、平和条約を結ぶとなりますと、領土を割譲する、あるいは賠償金を支払う、そして契約を結んで、お互いの平和関係に戻ります。神様は私たちに対して、「神と和らいで平安を得なさい」と言われても、私たちが別に賠償金を支払う訳ではありません。あるいは何かを割いて捧げる訳ではありません。むしろ神様の方が、ご自分のひとり子を十字架につけて、なだめの供え物として下さいました。全く逆です。

それによって、神様との間に平和がやってまいりました。私は今、神様の前に非常に深い静かな安心が与えられました。神様は全部御破算にして一切を忘れて下さいました。あれもこれも事実は確かにありましたが、それを全部塗り消して下さいました。帳簿を赤線で抹消しますように、これを塗り消して「これはなかった事にする」と十字架という訂正印が押してあります。

「あなたがたは、彼にあって神の義である」——あなたがたを正しい者として受け入れるとおっしゃって下さいます。この世でも、少し頼りがいのある人が、胸を叩いて「よしおれが引き受けた」と言ってくれたら、どんなに嬉しいでしょうか。しかし人ではありません。

万物の支配者である神様が、自分の方からなだめの供え物を提供して、「わたしと和解してくれ。私を受け入れるならば、あなたを義なる者として、今までの事は全部忘れてあなたを受け入れるから」とおっしゃる。この安心は素晴らしいものです、体中がぞくぞくして霊肉共に新しくなってしまう。イエス様を信じたら、健康に良い筈だと思います。私たちは生身の体ですから、病気もします、痛いこともあるかも知れませんが、こうして日々に魂の義を与えられる事は物凄い健康法であると思います。

「神はわたしたちをとおして勧めをなさるのであるから、わたしたちはキリストの使者なのである」——これは、人間の作った活字には違いありませんが、神様が和解の福音を委ねられた使者を通して、私たちに与えられているものですから、神様が私たちに対して和解をしてほしいと言われているのであります。

私は今日感謝して、このお方の声に従い、神様の義にあずかりたいと思います。敵であった時でさえ、神様の救いにあずかる事が出来たとすれば、今わたしがこうして神様に従わして頂きたいと願ってまいりますならば、どんな事をしてでも私を救って下さらないでしょうか。また永遠の命に生かして下さらないことがあるでしょうか、そのように思います。

◆神様はパウロを覆して、彼を和解させたばかりではなく、多くの人々の為にその和解の福音を用いさせられました。私たちがこうして和解の福音に預かり、更に多くの人々に、それが溢れて行きます。神様の救いは真にその通りです。ここが少し良くなったと言うぐらいではありません、溢れて溢れて、しかもそれが1代だけでなく、2代も3代も、次々に溢れて行く素晴らしいものです。

「永遠の命を得るためである」とおっしゃったのも、先ず私たちを生かして、更に次々に新しい命を生み出して行くためであります。

今わたしをそのような要（かなめ）において、ここから次々に新しい事をなそうとしていらっしゃる。私は非常に大きな責任を感じます。しかし自分で発奮しなくても、神様の方が熱心をもってわざを行って下さるのですから、私は感謝してそれを受けて行く。「すべてこれらの事は、神から出ている」とありましたが、全部神様から出て、神様によって行われ、そして最後は神様の名が崇められる訳であります。「ああ、神様という方は素晴らしい。すべてのものは神よりいで、神によって成り、神に帰す。神のみ名はほむべきかな」それがこの救いの結末であります。

今日もお方のお声に従って、この和解を受ける者でありたいと思います。ご一緒にお祈りしましょう。 (1988.1.4 戸畑教会新年聖会 11)





## 第十二章

### 神の奥義なるキリスト (知恵と知識との一切の宝が隠されている)

【なぜ苦闘しているか】 159

【神の奥義なるキリスト】 160

【知恵と知識との内訳】 161

【御霊に満たされると】 162

【鍵はほかはない】 163

【ああ十字架なるかな】 163

【なぜ苦闘しているか】

「それは彼らが、心を励まされ、愛によって結び合わされ、豊かな理解力を十分に与えられ、神の奥義なるキリストを知るに至るためである。キリストのうちには、知恵と知識との宝がいっさい隠されている」(コロサイ2:2/3)

◆聖徒パウロがコロサイの教会に書き送った、非常に苦悩に満ちた手紙であります。なぜそんなに苦しんでいるかと言いますと、コロサイ教会はパウロの同労者エパfrasの牧会した教会でしたが、単純な良い信仰が、様々な異端によって、毒されて来たからであります。

それはこの6節から書いてあります。例えば、異端——律法主義、「パウロのように信仰だけで、律法はどうでもよい(そうは言っていないのですが)などと言うのはもつてのほか、やはり律法を守って、行い正しく、神様のみ心にかなうように、割礼を受けて——」と言い出す。

またグノーシス主義というものがあつたらしい。これは天使礼拝とか禁欲主義のようなものであつたようです。信仰ではなくて、人間の言い伝えや、わざとらしいだましごとの哲学——信仰とは言えないものでした。

そこでパウロは、コロサイの教会の為に、苦闘しながら祈っている訳です。ガラテヤの教会でも、同じようなことがありました。パウロは、あなたがたの所に行つて声を変えようとする——強く言えば潰れてしまう、弱く言えば調子に乗る。真理を語れば極端だと反発され、語らなければ他のものに迷つて行くという訳で、パウロはどうする事も出来ません。途方にくれて語調を変えて話してみようと思うと言っています。ガラテヤ5章では、「あなたがたの為にわたしは生みの苦しみをします」と言っています。

このコロサイ教会も同じような事であつて、人間の知恵や常識が純粋な信仰に混ざつて来ると、だまし事に落ちて行く。コロサイ2:1、苦闘しているのですが、言つたら終りかも知れない。言わなければ「言わなかった」と言われるかも知れない。どうすることも出来ない。ただ神様が内から働いて頂くようにと祈りました。「それは彼らが、心を励まされ」自ら励む気持ちが出て来なければどうする事も出来ません。

そして「愛によって結び合わされるように」——なぜ結び合わされるかと言

いますと、異端というのは分派や分裂を作って、自分たちのほうに人を引き込もうとします。「パウロ先生は、あんなことを言うけれど、私たちはそうは思わない。我々と一緒にひとつ聖書研究でもしよう」と言うことになりますから、イエス様を信ずる信仰によって、ひとつに結び合わされるように——これも中から気持ちが始って来なければ出来ないことですから、パウロは祈りました。

また、「豊かな理解力を与えられる」——悟ることが出来るように。これも人が説明する訳にはいきません。知識の説明とは違いますから、何とか理解力が与えられるように——理解力が与えられれば、心が励まされるでしょう、これは相互に関係している訳です。「その豊かな理解力を十分に与えられ、神の奥義なるキリストを知るに至るように」と祈っています。

◆「キリストは神の奥義である」と書いてあります。奥義とは、前の章の終りにも何回か出てまいります。(1章26節、27節)これは口で説明が出来ないものです。手を取って教えてやる訳にもいかない。丁度何かの師匠が弟子に教えるのに、口で説明する事は出来ませんから、「やって見ろ」と言ってやらせる。持ってきたら「駄目だ」と言って突き返す。

何とか言ってくれたらよさそうにと思いますが、本当は師匠も言おうと思っても言えないのです。そこで「違う」と言って突き返す。何度も何度もそうして挑戦しているうちに、「なるほどこういう事だろうか」とまた研究してみる。ある時になると、突き返さなくなります。「お前、この仕事をやってみろ」と言うようになると第一段階の合格です。

神様の奥義も説明は出来ませんから、何とかして自分から悟るようにと祈りますが、口で説明出来ませんから、「巧みな言葉で迷わされる」という事が起ってまいります。「巧みな言葉」とは、弁舌さわやか、人間の頭に良く分かって納得するものです。「なるほどそうか」——そうすると、何か訳の分からないあんな奥義よりも、律法先生の言うことのほうが分かりやすい、神様がはっきり、「これは良いことだからこうせよ」とおっしゃっている事をするのだから、これは今だって良い事に違いないと言って迷って行きます。

人間、だらしのない生活をするよりも、きちきちとした生活、禁欲生活をしたほ

うが清く良い生活に違いない。だからそうしよう、これは誰が見てもよいことだから、神様の前にも良いことに違いないと言って迷っていきます。あるいは、「わざとらしい謙遜と、天使の礼拝」——うやうやしくやって来ますと、「ああ、なるほど、あれはなかなか清らかな良い生活だ。誰が見ても気持ちが良い。立派ですがすがしいものだ、あの人は違う」と言ってだんだんそのようになって行きます。

真の奥義のほうはそうではないのです。かえて宣教の愚かをもって人を救うと書いてあります。——「なんだあんな馬鹿げたこと」と言う方法をもって神様が救われるのですから、この世的に見ますと勝負は歴然で、多くの人が異端に落ちて行くかも知れません。それが世の力であり、悪霊の働きであります。

ですからパウロは、他に方法がない訳です。勿論正面きって、そういうものと論争するのでしたら、パウロも幾らでも論争できるでしょう。また、彼らに警告の手紙も書くでしょう。しかし何よりも、自分で苦しんで苦禱する。何とかしてこの人たちの心を開いて下さいと祈るのです。

そしてまた、自分の身分について——ある人々はパウロは使徒ではないと言ってそしりますから、それに対しては一生懸命に弁明をしなければならない。また、実際に福音の奥義によって生かされているのですから、何よりもそのように走って見せる——見せびらかす訳ではないのですが、自分がそのように走らなければ、弁明しても願っても、警告しても、闘っても、力が出ませんから彼は身を伸ばすようにして走ったのです。それは自分の為でもありますが、多くの人々の為に自ら模範となる——その意味もあったと思います。神様もまた、そのように彼を用いられたと思います。

◆「神の奥義なるキリストを知るに至るためである。キリストのうちには知恵と知識との室がいっさい隠されている」——奥義ですから、このうちにはあらゆる事が含まれています。「知恵と知識との室」については色々なところに聖書の記事があります。

イザヤ11:1/3朗読。「エッサイの株から一つの芽が出、その根から一つの若枝が生えて来る」というのは、エッサイの子ダビデ、そしてその子孫であるイエス

・キリストを指しています。イエスの上には「主の霊がとどまる。この主の霊は、知恵と悟りの霊であり、深慮と才能の霊であり、主を知る知識、主を恐れる霊」——そういう働きを持った御霊がとどまっている。それはイエス様が洗礼を受けて、水から上がられた時に、神様が上から聖霊を注がれて、「こはわが愛する子」とおっしゃった、その霊です。

1コリント12:1/11 朗読。ここには更に、主の御霊の内容が詳しく書いてあります。「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言うことができない」とあります。御霊はイエス様を告白させて下さる霊、主を知る霊と書いてありました。またその働きについては、8節からあります。知恵、知識、信仰、いやし、力あるわざ、預言、霊を見わける力、異言と異言を解く力、このように書いてあります。

◆御霊はあらゆる働きの基となって、私たちのうちに神様のすべての働きを当てはめ、目に見える形として下さいます。

ヨハネ14:25/26朗読、先程、御霊の働きと申しましたが、一般的な御霊の働き、感動あるいは導きではなくて、イエス様は個人に対して、聖霊の賜物を受けるようにはっきりと命令されています。

その一つがここにある、「わたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたにすべてのことを教える。また、話しておいたことを思い起こさせる」であります。これは明らかにイエス・キリストの名によって遣わされる、あの「キリストのうちにはすべての宝が隠されている」とありましたその宝の一つ、もっともまさったものであります。

ルカ11章には、「求めて来る者に、聖霊を下さらないことがあろうか」と書いてあります。

ヨハネ20章には、「聖霊を受けよ」とあります。

使徒行伝20章で、「あなたがたは信者になった時、聖霊を受けたか」とパウロは問うています。

2ペテロ 3章には、「命と信心とにかかるとすべてのこと」とあります。永遠の命を満たすとおっしゃった、また大いなるかな敬虔の奥義とおっしゃった、その

【御霊に満たされること】

奥義にかかわるすべての事は、「主イエスの神聖な力によって、わたしたちに与えられる」——イエス・キリストという名を通して私たちに与えられる。その最もまさったものが、御霊であるとおっしゃっています。

ですから私たちは、「あなたがたは間もなく聖霊によってバプテスマを授けられるであろう」とのお言葉に従って弟子たちが主の名によって待ち望み、ペンテコステの日に、聖霊に満たされたように、待ち望むべきであります。

コロサイ教会に送られた手紙もそうですが、イエス・キリストの名によって、彼らがこの奥義なるキリスト、その最もまさった、すべての働きの基になって下さる御霊に満たされるならば、巧みな言葉や異端を粉碎して余りがある。丁度星が太陽の光によってすっかり輝きを失ってしまうように、それらは皆吹き飛ばされて、雲のように霧のように散らされてしまいます。ですからパウロは、何としてもイエスの名によって、この御霊を受け、すべての異端や惑いや、もっともらしい偽りに打ち勝って、神様の前に「よし」とされる生涯に入って欲しいと願っている訳であります。

◆神様はコロサイの教会を一つの形として、私たちが同様な危険や惑いの多い世に置かれている事を警告されていますし、それに打ち勝つ為にはイエス・キリストの知恵の奥義を何としても知るように、その為にあくまでも真理のおきてを一心に見つめて、たゆまないように求めておられるのです。

また、そのように求められるという事は——恵みのお言葉の常ですが、神様がそのようになさると言う約束であり、そのようになしたいと言う神様のご熱心であると学んだ訳であります。

この知恵と知識との奥義を悟らせて頂くためには、他に鍵はないのであって、イエス様が私のために十字架にかかって、死んで甦って下さったというこの事実しかありません。これについては、昨晚もありましたが、あの十字架の事実を仰ぎ見る以外にありません。

◆柘植先生がある時、「ああ、十字架なるかな、十字架なるかな！」と言って感嘆されたそうですが、確かに私たちのすべての勝利も、すべての奥義も十字架の上から私たちに注がれます、真に恐るべき奥義の十字架であります。

【鍵はほかにない】

【ああ十字架なるかな】

何十年も教会に来て、十字架のことはよく知っていると思います。しかし、神様は「すべての宝が隠されている」「全き栄光の望みである」とおっしゃいます。この十字架を更に更に味わわせて頂きたいし、様々な戦いの中で、十字架による助けと恵みを、命ある限り知らせて頂きたい。これはどんなに求め続けても、なお尽くす事のできない奥義であると教えられた訳です。

「神の奥義であるキリストを知るに至るように」——これは御霊の祈りであります。「心を励まされ、愛によって結び合わされ、豊かな理解力を十分に与えられ、神の奥義であるキリストを知るに至るためである。キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」——パウロはエペソ教会の長老たちと別れる時に祈りました、「あなたがたを主とその恵みのみ言葉に委ねます」——この名が、彼らの名となり、この奥義が彼らの命となるならば、私は安心して、殺されようと別れようと、再び会えなくなろうと大丈夫、と言うことです。

私たちが人についても、家族についても、あるいは子供についても、主とその恵みの言葉に委ねる——神の奥義なるこの方が、その人のうちに主人公となるならば、あとは主が働いて下さるのであって、こちらからつべこべ言うことはいらないのであります。何としても、パウロと同じように苦闘する——直接にはまだ会ったことのない人の為にも、あるいはこの時代の多くの人々の為にも、私は苦闘して祈ります。神様がこの奥義なるキリストを、その人のうちに主となさるようにと。

どうか、自らがそのようになり、また多くの人々のために苦闘する者でありたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。

(1988.1.4 戸畑教会新年聖会 12)



## 第十三章

### 今、主を尋ねよ (必ず御自分を現して下さい)

【面会のためには】	167
【無事とは無事でない】	167
【蠟人形のように?】	167
【反応を期待されるが】	168
【生き方の分極化】	170
【踏み出せば道は開ける】	171
【全部かゼロか】	172
【銀を好む者は銀に飽く事がない】	173
【胸をときめかせて】	174
【明日と言わずに】	175

「あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ」（イザヤ55:6）

◆今朝もこうして恵みのご集会に出させて頂きました。私は毎回新しい感激をもって神様の前に出させて頂きます。もし何かがちよっと狂ったら集会に出ることは出来ません。

「お会いする」と書いてありますが、誰かと会うには色々な環境、条件が必要です。お会いするので相手との都合が絶対に必要です。「今日は会えない」と言われたら、「それではまた」と言って帰らねばなりません。また、自分の具合が悪くて寝込んでしまったら、これも会う事は出来ません。細かく考えますと、非常にたくさんの条件があると思います。

◆例えば、体のことを一つとって見ても、様々なバランスのもとに健康が保たれています。私たちはなにげなく食物を食べますが、それらは私たちの体に変化を起しますから、体はそれに応じて消化・吸収していきます。（――中略――）

私たちは「私はどうもありません。無事です」と言いますが、無事というのは何も無い事ではありません。大いに有るのですが、体の中でそのような驚くべき事が行われていますから、私たちは無事でおられる訳です。

日本人は水と安全がただだと思っていると言われますが、考えてみれば水があるのは当たり前ではない、安全も同じでしょう。物騒な外国に行きますと、日本人はすぐ撃たれて、ポケットを探られる――それは日本人がいつも現金を持って歩いているからだと言われます。

日本人もなかなか良い人ばかりではありませんが、とにかく私たちの周囲にあるあらゆるものの陰には、多くの見えないものが隠されていると思います。

◆神様が私たちと会って下さるのは、尋常なことではないと思います。出エジプト記29章に、「汝らとそこにて会い、汝ともの言うべし」と言われています。「私たちは今イエス様の血によって保たれています」と感謝を捧げるところで、私たちに会って下さるとおっしゃいます。

また、「あなたがたが呼び求めるなら会う」とあり、イザヤ書には、「呼ばれる時には、ただちに答える」とありますが、いずれも神様が、そういう恵みの機

【面会のためには】

【無事とは無事でない】

【蟬人形のように？】

会を残していच्छやると言うことであります。

「会う」というのは、何かがそこに並べてあるのとは違います。弟の家に行きますと、こけしがたくさん並んでいます。それは仙台に勤めていた時に、現地でこけしをたくさん買って来た訳です。どこかの国には蠟人形館があって、元大統領とか元総理大臣とか、有名人の人形がたくさん並んでいるそうです。よく出来ているから面白いかも知れませんが、非常に冷たい不思議な所に入ったような感じがするでしょう。

「あなたと会う」と言うのは、蠟人形館に人形が並んでいるようなものではありません。家族が家の中で一緒に生活している、話し合うこともありましようし、一緒に何かをする事もあります、食事をしたり、お互いに別の仕事をしたりしますが、何をしても相手の気配が分ります。それは生きた交わりであって、決して蠟人形館のようではありません。

神様はそのように、私たちに対していつでも生きた交わりを保って下さいます。家族の交わりは、役者さんが練り上げた台詞を語るようなものとは違います。有りのままで、失敗は失敗、とにかく生きた交わりがあります。「会う」と言うのはそういう事ではないでしょうか。

集会記録を作る時に、ちょっと考えることは、ある程度公にするとすれば、完璧なものでなければいけないのではないだろうかと言うことです。しかしまた一方では、有りのままでよい——折って支えて下さる皆さんに、今こういう具合ですからと報告をするものだから——そのように考えて出している訳です。

神様と私たちとの交わりも、別に演技はいらないと思います、有りのままで触れて行く、それほど絶え間なく話し合いをしないとしても、互いに存在が意識されている、それが私たちに対する恵みではないかと教えられた訳であります。

◆もう一つ教えられた事は、神様が私たちの反応を求めておられるという事です。「会う」とか「交わる」とかは一人では出来ないものであって、相手があることで、一方通行ではありません。アナウンサーが放送局で、音を遮断した部屋に入って原稿を読む。勿論相手を意識してはいるでしょう。日本中あるいは世界中に届くかも知れない。あるいは録音してどこかで再生されるかも知れない。しか

【反応を期待されるが】

し、話をするのはその人ひとりです。窓の外ではディレクターが、「ゆっくり」とか「伸ばせ」とか色々合図をします。それに応じて原稿を読む、これは一方通行です。

神様は私たちに対して、ご自分を開いて、「あなたがたと会い、あなたがたといつも近くいたい」と神様は求めています。神様はアナウンサーのように語り掛けて、「聞いたか聞かないか分からないが、これでよかろう」と言うことはなさない、必ず答えを期待される訳であります。

神様は、「ひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びなくて、永遠の命を得るためである」とおっしゃいました。あるいは、「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である」と手を開かれる。「あなたがたと会おう。近くおって共に生活しよう」とおっしゃるのですが、私たちが全然反応を示さなければ交わりは出来ません。

かと言って人の心の中に立ち入って、「そらそら、お前の心をちょっと燃やさない」と中から掻き立てることは出来ません。神様はどんなことでもお出来になる――王の心を操るように条件を整えることはお出来になりますが、最終的に自分で決断すべきところを外から誘い出す事はできないのです。

子供に対する教育の問題でもそうでしょう。「しなさい」と外から言うと、勉強しません。黙っているとのおさらしめから、どうしようかということになります。吸盤は何かに吸い付かせて引っ張ればある程度は力がかかりますが、人の心は吸い出す事が出来ません。どうしても自分の中から自発的に気持ちが起り、はっと目覚めて、「こんな事をしていたらいけない、やろう」という気持ちが起らないと、何も始まらないのです。

教えるという英語は、「引き出す」という言葉から出来たものだそうです。教育というと、先生が教壇に立って教えて、「これを教えてやるから覚えなさい。さあ言ってみなさい」という訳で、それが教育と思いますが、引き出せないものを引き出すのですから教育は難しいものだと思います。

神様は私たちに対して、同じような期待をしておられます。神様のほうが胸を開いて、「さあ」と言っておられるのですから、こんな時はないのであります。

自分から「そうですか、それでは尋ねましょう。それでは呼び求めましょう。祈れとおっしゃるからお祈りしましょう」と神様に対して祈るのです。上手も下手もありません、自分の有りのまを申し上げればよいのです。

【生き方の分極化】 ◆人間は真剣な気持ちがありますと、上手も下手もありません。聖書に、カナンの女が自分の娘の悪霊のことをお願いした時もそうでした。とにかく呼ばわる、ひれ伏す、走って行く、犬と言われても、「犬でも主人の食卓から落ちるパン屑を拾うではありませんか」と言って求めます。こんな台詞は決まっていなのです。しかし彼女は自分に熱意がありますから、行動も言葉も態度もどんどん進んで行く、ひとりりてに出て来るのであります、神様はそういう知恵を与えられました。

動物は本音で生活しています。敵が来たら、ぱっと逃げる。人に出会えば、これは敵か味方か、一瞬にして判断します。彼らの生活に、どうしなければいけないという建て前はありません。皆本心から行動します。

人間は動物的な面を持っています。しかしあまり本心で生きなくてもすむような環境を作って生きています。私は人間の生活がもっと分極化する——もっと動物的に本心で生活する一面と、もっと神様の子供らしく生きる、そのように二つに分かれて行くべきではないかと思えます。

神様が私たちに対して、真剣に交わりを求めておられると気付きましたら、どうしなければいけないかは考える必要がないと思えます。人が来られたら、「いらっしゃいませ。何か御用でしょうか」と言います。誰もいない所でお芝居は難しいが、目の前に人がおられたら、誰でも自然に行動します。それと同じように、神様が私に対して、「お前に会いたい。もっと近くありたい」とおっしゃることを知りますと、「ああ、そうですか、神様、それではどう言ってお祈りしてよいか分かりませんが、お祈りさせて下さい。お話しさせて下さい」と前に進み出ます。

マタイ14章その他に、ペテロが嵐の湖の上でイエス様を見て、「主よ、あなたでしたか。ではわたしに命じて、みもとに行かせて下さい」と言うが早いか、(イエス様の招きのお声に従って) どんどん水の上を歩いて行きました。

イエス様に近付いて行く途中で、彼は下を向いて波風を踏んでいる事に気がつ

いて「あっ」と言って沈みました。「主よ、お助け下さい」と叫んだ時に、主は、「信仰の薄い者よ、なぜ疑うのか」と言って引上げ、舟と一緒に乗り込んで下さいました。すると風がすっかり止んだという事が書いてあります。

ペテロは、いわゆるおっちょこちょいかも知れませんが、私は素晴らしいと思います。私たちに対しても、神様がご自分を開いて近付いて下さる、私に、「主よあなたでしたか。では私はあなたを尋ね求めます」と言う気持ちがありますと、本気でどうしたらよいか求めます。すると必ず道が開けます。

神様は本心に対して必ず答えられます。詩篇145:16に、「あなたはみ手を開いて、すべての生けるものの願いを飽かせられます」とあります。私は蝶や昆虫の保護色も彼らの切なる願いを顧みられて、そのような知恵を与えられたのではないだろうか、もしそうなら神様という方は憐れみ深い方だなと考えた訳であります。

◆私たちが何とかして主を尋ねようとすれば、神様は必ず願いを退けられない。私は何か物事を調べる時には、割合に厚かましいのです。何かの資料に、「〇〇番に電話をして下さい」と書いてあればすぐ電話します。「このことはどうしたらよいのですか。あなたが分からないなら、誰に尋ねたらよいかを教えてください」——そして次々に電話をかけます。すると大抵のことは分かります。

テレホン聖書を始める時に、どこでどういうサービスが行われているだろうか調べようと思い、電話番号の案内サービスを利用しました。市外局番のあとに104を回しますとその局の案内が出ます。「テレホンサービスをしている所がありますか」と聞きますと、「テレホン法話というのをやっていますから」とお寺を教えてください。「キリスト教の教会はありませんか」と教えてもらいます。次々に色々な都市に掛けてみますと、大体のことが分かりました。それからここと思う所にかけて、実際の内容を聞いてみました。(———中略———)

ですから私たちが神様の前に、一步進み出るかどうかで物事は大変違って来ると思います。「主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ」と言われますから、神様は全部開いてしまわれたのです。ご自分のひとり子を十字架につけて、私たちに対してご自分の胸を開かれ、あとは何もないのであります。こちらがそれに

「踏み出せば道は開ける」

対してお答えしなければ、それこそ蠟人形館であります。冷たい地獄の底のような、暗い地下室に人形が並んでいるよう——この人はどこかで見たことのある人だけれども、さっぱり動きもしなければ物も言わない、という事になります。

ですから私は、今日、この方の前に進んでお答えしたい、あくせくと考えることはいらないのであります。「主を尋ねなさい」——あまり簡単ですから、かえって私たちは漠然と考えます。神様はどうしてこんなに簡単におっしゃるかと言うと、「主」という名の中にすべての宝が隠されているからです。

私たちは考えて、「さあ、何と何があるかな」と思いますが、何もかもすべてなのです。あらゆる神様の知恵も力も働きも全部入っています、その究極は、「求める者に、聖霊を賜わざらんや」とおっしゃる。神様をご自分を私たちに注いで下さる。また、「神の性質にあずからせる」と書いてあります。神様のご性質にあずかり、神様と一つになってしまう、そういうところまでこの主の中に含まれております。

◆ですから、私たちは、イエス様を知ること、求めるのが第一であります。

ホセア書6:1/6 朗読。ここに何度も、「主を知ること——神を知ること喜ぶ」と書いてありますが、主を知ると全部を知ることになります。創世記 1章、「神はじめに天地を造りたまえり」という一言を知れば、聖書全体を知ることが出来ると言われているように、主を知ること、切に求めますなら、神様は必ずご自分を現して下さい。そして神様が最も喜ばれるのはこの事であるとおっしゃっている訳であります。

箴言 8:32/36朗読。「わたしを得る者は命を得、主から恵みを得るからである。わたしを失う者は自分の命をそこなう、すべてわたしを憎む者は死を愛する者である」この「わたし」というのは、「知恵」ですが、また「イエス様ご自身」を現します。オールオアナッシングと言いますが全部かそれともゼロかです。成功すれば100%、成功しなければ0%ということです。

アメリカは訴訟社会であって、弁護士の数が日本の20倍ぐらいあるそうです。そこで弁護士は事件を捜すことになります。「こんなことがあったでしょう。訴えなさい。私が助けて上げよう。失敗したらお金はいらないから心配しないよう

に、もし成功したら報酬を下さい」と言って、どんどん営業活動をするそうです。これもオールオアナッシングであります。

神様は私たちに対してご自分を与えて下さる。「わたしを得る者は命を得る」これは100%であります。神様自身にあずかり、神様のご性質にあずかる、完全に一致する。「あなたがたが、わたしのうちにおり、わたしがあなたがたのうちにおる」という事になります。

イエス様はヨハネ17章で、最後の晩餐のあとのお祈りをなさっています。「彼らもわれらと一つになるためである」と言われています。一つですから、完全に同じものになってしまう、「わたしを得る者は命を得る」というのはそういう事でしょう。

しかし逆に、「わたしを失う者は自分の命をそこなう」それはゼロです。私たちは、イエス様を自分のものにしなくても、すべてを失うという事はない、体も元気なら仕事もあるし、銀行の預金や自分名義の不動産もある。これは大丈夫と思いますが、「主を失う」という事は、それらがあることはあっても、自分のものにならない。「あなたがたは目の前に、それが動いて行くのを見るだけで、持ち主には何の益もない。―――登記簿の上で自分の名義は書き替えられないでしょうが、それを自分のものとして生かす事が出来ないようになってしまう。そうなりますと持っていては何にもなりません。

◆有り余った東京マネーがアメリカで色々なものを買占める、そこで問題がたくさん起っています。

ニューヨークの高級住宅街で、どんどん家を買ったり、土地を買ったりします。日本人の子女、特派員や駐在員の子供たちが、ニューヨークで5000人ぐらいいるそうです。アメリカの学校に入りますが、英語が分かりませんから、日本人の副先生がうしろのほうで日本人だけを集めて複式授業をする。するとアメリカ人が、「我々の税金で何故あんなことをしなければいけないか。どこかに行ってくれ」と言う訳です。（―――中略―――）

日本人は困っています。どんどん物が出来て、どんどん売るからお金が儲かりますが、持って行く所がない。国内では投資する所もないし、自分が持ってい

【銀を好む者は銀に飽く事がない】



ば災いになります。頭の痛いことです。「銀を好む者は銀をもって飽くことがない。財産はその持ち主に害を及ぼす」と伝道の書に書いてありますがそういう状況であります。

イエス様を失うことによって、自分の命を失うとは、物がなくなる訳ではありませんが、持っている事がかえて災いになって、「ああ、こんな物はいらない」ということになります。(――――中略――――) 主の祝福がなければ、人間はすべてのものを失ってしまいます。「わたしを離れてはあなたがたは何一つできない」と書いてあります。

【聞きかた】 ◆神様は何としても自分を求めてほしいとおっしゃる、具体的に私たちが、主を求めるとは、何を求めることか――それは聖書のお言葉を求めることです。お言葉に対して、真実を持って接する事は主を求めることであります。

私は昨晚聖書を読んで、先程のイザヤ書を教えられました。それを書き止めて、「有難うございました」と言って、明日はこうして恵んで下さるに違いないと思って朝起きると、神様はそのお言葉を、私の前に閉ざされました。

果物の切り口にポリラップを貼ったようなものであります。なるほど新鮮な切り口は見えます、しかし味にもおいもありません。丁度そのように、今朝み言葉を与えられました時に、「これはいけない」と思いました。夕べ夜遅く、ほんの数時間前に、あんなに恵まれて感謝したのに、もう違うのです。切り口が乾いている、林檎の色が変わっているようなものであります。

そこで私は、もう一度悔い改めてお祈りをしました。神様は生ける方でいらっしゃる、蠟人形ではありません。生きて働いていらっしゃる。私が触れたら血が流れて来る、そういう神様でいらっしゃる。そこで私は、もう一度新しくみ言葉を読みました。そして一つ一つ味わいながら、心に受け入れてまいりました時に、目が輝き始めました。心臓がどきどきして来ました。神様は私に対して、こういう関係にあることを求めていらしゃったのです。

実は神様のほうも、私に対して、目を輝かせ、心臓をどきどきさせて、私に語っていらっしゃると思いました。私が蠟人形のようにシーンとして、目をつぶって、「それは昨晚聞きました。昨晚恵まれましたからもうよいでしょう。分かっ

ています」と言っていたら、命は通じないのであります。私は目を輝かせ胸をどきどきさせて、主を尋ねて行く。その時に神様は確かに、私に対して生きた交わりを与えて下さいました。私は今大変感謝をしています。

やはりこちらが目を輝かせて胸をどきどきさせて、出て行かなければならない、という事を教えられました。そこからすべてのことが始まってまいります。

◆明日あるいは明後日、また来年もと言っても、それは分かりません。時は神様だけが知っていらっしやる。神様がこの世の終りを来させたまうならば、私たちは終りであります。またその前に、私たちの命がおわり、「今晚、お前の魂は取られる、さあ、帰ってきなさい。そこまで」と言われれば、私は「はい」とすぐ帰らなければなりません。ですから決して、私たちは明日、明後日という事はできないのであって、「今、主にお会いすることのできるうちに」主を求めなければならないと思います。

今、私たちがここにあるという事は、非常に特別な（神様の）ご意思のもとに有る訳です。サイコロを振ると目がばらばらに出ます。そのように、あらゆることがばらばらに起っていたら、人間の世界は混沌として、何もないでしょう。しかし、ばらばらではなくこういう状況に置かれて私はここに有る。神様は私に対して会うとおっしゃる、これは非常に特別なことであります。ですから私もまた、今の時を自覚して、神様に近付きたいと思います。

そうしてまいりますならば、神様がどんなに私に憐れみをかけ、またご自分のみ心を行う為に、どんなことをなさるか分かりません。天から雨が落ちて使命を果たし、また天に帰って行く。それは口で言い表すことが出来ない程、複雑な道筋がありますが、神様はそのようにご自分のお言葉を遂げるとおっしゃるのですから、私のうちにも遂げて下さるに違いない。しかし、もしこちらが心を閉ざして、蠅人形のようなことであれば、神様はどんなに力がお有りになっても、実行する事が出来ません。どんなにやきもきされるでしょうか。

私たちが何かを実行しようと思って、それが動いてこなかったらやきもきします。私たちは神様をお待たせしている事がないでしょうか。「千年を一日のように、一日を千年のように待たれる」とあります。神様は、待つて待つて待ちこが

【明日と言わずに】

れていらっしゃる。大いに心を燃やして神様に近付きたいと思います。そして呼び求めて主を尋ねたいと思います。それは宝箧のようなものではありません。神様は尋ねたらきっと会うとおっしゃいます。

「ひとりも滅びないで永遠の命を与える」これも必ずです。神様は大丈夫であります。私はこの神様の確かさに、自分の命を傾けて行きたいと思います。

更に2回の集会が残りましたが、神様は目を輝かせ胸を踊らせて、私たちに新しいことをなさろうとしています。更に待ち望みたいと願っておる訳であります。「あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ」(イザヤ55:6) ご一緒にお祈りしましょう。

(1988.1.5 戸畑教会新年聖会 13)

## 第十四章

### 本心で帰るなら (憐れみと許しを豊かに)

- |                   |     |
|-------------------|-----|
| 【悪しき道を捨てよ】        | 179 |
| 【針の穴にらくだを通す】      | 180 |
| 【海洋牧場】            | 180 |
| 【「はい」と捨てれば】       | 182 |
| 【真実を見られる神】        | 183 |
| 【放蕩息子のたとえ】        | 184 |
| 【約束を果たさない訳には行かない】 | 185 |
| 【皆が聖霊に満たされたら】     | 187 |

「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」（イザヤ55:7）

◆神様は「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日」と言われます。神様はこのかけがいのない時に、「私を尋ね求め、私を呼び求めなさい」とおっしゃっています。しかし私たちはなかなか神様の所に帰る事が出来ません。それは自分の思いがあるからです。何か考えていますから、相手様の言うことを聞かない、「そんなにおっしゃっても私はこうこうだから」というものが出て来る訳であります。

神様は「悪しき者はその道を捨てなさい、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ」——わたしに従わない自分中心な思い、自分を第一に考えるその道と思いを捨てなければ、わたしに従えない——「命を選べ（悪人の死を喜ばない）」と言われている訳です。申命記30章、あるいは28章、29章あたりをずっとお開きになって、悪しき思いがどんなに恐ろしい結末を招くかと、詳しく教えて下さいました。

27章までが戒めであって、最後に一同に確認をされました。民は「アアメン、アアメン」と言って神様との契約が更新されました。28章はそれに対してどういう報いを与えられるか、従った者には従った者のように、従わなかった者にはそのように報いを与えられる。それは神様が刑罰を加えられるというよりも、自分が恵みの機会を断ち切り、自分で自分に裁きを招くという事になります。

28章は14節までが祝福の約束で、15節から68節まで、4倍ぐらいの分量で呪いの言葉があります。恐ろしいことが書いてあります。エジプトに連れ戻され奴隷に売られるが、買う人もない——そこまで落ちて行くと書いてあります。

「こうならないように、わたしの与えようとする永遠の命を受けなさい」と言われている訳です。私たちはよくそれが分かります。

ところが神様に従う為に、自分の悪しき道を離れ、自分中心を離れ、思い切っただけで従いたい、「今年こそは！」と思っても、なかなかそれが出来ないのです。毎年々々「今年こそは」と思っただけで、暫くすると尻切れとんぼになり、「ああ、今

年もまた過ぎてしまった」という事の繰り返しになります。ですから神様は、命の恵みに入れる為にどうしても悪しき道を捨てよとおっしゃるのです。

【針の穴にらくだを通す】

◆富める青年は、「イエス様、とこしえの命を得るためにはどうしたらよいでしょうか」とお尋ねしました。その時に、「わたしを良き師と言うか、良き方はただお一人、神様がおきてを与えておられる、これを聞きなさい——殺すな、姦淫するな、偽証を立てるな——」「はい、それは小さい時からずっと守ってまいりました」「それではあなたの持っている物を皆売り払って貧しい人に施し、かつ来てわたしに従いなさい」とおっしゃった時に、その若者は大変な財産家でしたから、捨てることを惜しんで従うことが出来ませんでした。悲しみながら去って行ったと書いてあります。

弟子たちは驚いて、「先生、金持ちこそ救われると思ったのに——同じ捧げ物をささげるのでも、牛や羊に手の届かない人は山鳩でもよろしい、それに手の届かない人は麦粉のパンでもよろしいと書いてある。だから神様に大きな捧げ物をささげ、たくさんの奉仕をしたら、喜ばれると思っていました。その金持ちが救われないのだったら、誰が救われるのでしょうか」と言った時に、イエス様は有名なお言葉、「富める者が天国に入るよりは、らくだが針の穴を通る方がやさしい」とおっしゃいました。しかしそれは神様には、それがお出来になると言うことでした。

神様はらくだを針の穴に通すこともお出来になる、しかし、「さあ、すべて疲れた者、重荷を負う者はわたしにきなさい」と広い道を備えられても、青年はその道に入る事が出来なかった——これは物理的に考えるとおかしな話です。ふるいの目にかかって、目より小さいものが下に落ち、大きいものが上に残る——これは当たり前ですが、天国の法則は人間の世界と違って、広い所には入れませんが、狭い所には大きなものが入ってしまう——神様はよくそういう事をなさる方だと思った訳です。

【海洋牧場】

◆海洋牧場というのがあります。魚を養殖する時、広い海をずっと囲うのは大変ですから、網を作らないで、非常に大ざっぱな構造物を作って、それに電気を通しておく。魚がそこまで行くとビリッと感じて元に帰る訳です。大きな隙間は

あっても、感電するので外に出られません。

その時に思いましたのは、人間が自分の事ばかりを考えて、神様のことを抜きにしてまいりますと、天国の門がどうしても通れない訳です。誰にでも開かれていて、「さあ、いらっしやい」と招かれている。物理的には通れる訳ですが、自分の内にあるものが電気を感じてビリッとすると、「これはいけない」というので通れない。そういうことがあるのではないのでしょうか。

また、粹さえも作らない（海洋）牧場があるそうです。それは海中にブイのようなものを置いて、それから一定の時間になると、ある音と共に餌が出て来る。魚は条件反射でそれに馴れて、遠い所には行かないで、ブイの周りをぐるぐる回って待っている。ですから困うことなしに魚があまり逃げないのだという話を聞きました。

私たちが悪魔に飼い馴らされると、出て行くことが出来ない。網も何もない所でも出て行くことが出来ない。そのように教えられた訳であります。

神様は私たちに対して、「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ」と言われます。ですから、自分の道を離れ神様に帰ろうと思うのですがビリッとくる——「そんなことをしていて食いはぐれたらどうするか」という訳で、また餌の所に帰って来る。結局悪魔が私たちを放さないのです。

どうしたらそれを離れる事が出来るか——自分から離れようとしても離れることは出来ないのです。

夏に海水浴などに行って、海草が生えている中に立ちますと非常に気持ちが悪いものです。何もしなければじっとしてゆらゆらとしていますが、足を動かすとぬるぬると絡み付いて来ます。

そのように私たちは、「まあ、人生とはこんなものさ。信仰もほどほどでよい、そんなに熱心に求めなくても——」と思っている時は何事もないのですが、「その思いを捨て、その道を捨てて帰ってこい」と言われて、それではと立ち上がると、悪魔が絡み付いて来ます。ですからなかなかそれを捨てる事が出来ない。捨てるどころかかえって色々な思いが募って来るかも知れません。

【「はい」と捨てれば】 ◆それを捨てることは、自分の力ではできないのです。悪魔はなかなかそうさせません。ですから私たちが、自分の思いがひとりでに変わって、そんな気持ちになったら従おうか——今日はそんな気にならないから止めておこう——ならないものを無理やりにやったら偽善者になる——などとためらっていると決してぬけられません。

私たちは努力する必要はないのです。どうせ努力しても出来ない。しかし神様は、「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて主に帰れ——捨てなさい」と言われているのです。

私たちは人から何か言われた時に、どうするでしょうか。「捨てなさい」——「はい」と捨てる。「どうぞ、お座り下さい」——「はい」と座ります。言うことを聞けばよいのです。「座りなさい」と言っておいて、椅子を引くような事は誰もしない。「お座りなさい」と言われたら、椅子を差し出す。あるいは座布団を差し出します。

神様がおっしゃったら、「はい」と従えば、そうさせて下さるのです。ですから私たちにとって決して難しいことではないのですが、従順でないと従えません。「捨てろ」と言われても「捨てられるものですか。私は何度も捨てようと思いましたが捨てられませんでした」という訳です。

「神様がもし私を変えることが出来るなら、変えてみて下さい。そうしたら私は信じましょう」——それは、丁度（イエス様の）十字架の時に、隣にかけられた罪人が、「あなたは救主なら、そんな所に下がっていないで、降りて私を救ってくれ、そうしたらあなたを信じよう」と言ったようなものです。私たちはそんな大それた事を考えないと思うのですが、結局同じことであります。

昔、柘植先生の所にある人が、煙草を止めたいと言って来たそうです。「先生、わたしは煙草を止めたいと思いますが、止められるでしょうか」「止められないでしょう」と言われました。「神様にお祈りしたら、どんなことでも答えられると言うのに、どうして止められないのでしょうか?」と言うと、「煙草を止めたいと言われるが、自分は何もしないで、神様が気持ちを変えて煙草嫌いにして下さったら止めましょう（自分で止める気持ちはない——自分はむしろのみたい）」



という気持ちでしょう。だからそれは駄目です」と言われたそうです。

そうではなくて、むしろ、「神様が力を与えて下さると信じますから止めます」あるいは「思い切って止めました、力を与えて下さい」という事になれば、神様は助けて下さるでしょう——そういう事をお話になったということでもあります。

神様は私たちが長く悪魔の虜になって、悪い思い、正しからぬ道に縛り付けられ、「ああ苦しい、ああ苦しい——」と呻く事を願っておられるのではないのであって、その中から解放して、悪魔に引かれ世を愛する気持ちを断ち切らせる為に、「悪しき道を捨てなさい」とおっしゃっている。それに「はい」と従うと、捨てる事が出来るのです。私も実際にそうでありました。

だいぶ昔のことですが、箱根の山中で追剥ぎが出たそうであります。ある伝道者が通りかかって身ぐるみ剥がれました。それから何年かしてまたそこを通ったところ、同じ追剥ぎが出て、「身ぐるみ脱いで置いて行け」と言います。それで伝道者は、「自分は脱いでお前にやるが、お前はそんなことをしていたら永久にこの道から抜けられない」と話しました。

そのうちに古井戸の底から水を汲もうという事になって、追剥ぎが井戸の中に入って水を汲み、引き上げてくれと言うので、伝道者が綱を引くが、どうしても上がって来ない。よく見ると、「早く上げろ」と言いながら、棒杭にしっかりとがみ付いているのです。そこで、「その棒杭を放せ」と言うと、「放したら落ちる」と放さない。「放さなければ上げられない」と押し問答の末、手を放しますと、するすると上がって来ました。

そこで伝道者は、「お前が、神様が救ってくれたら泥棒を止められるのだが、今はまだ止められない——と待っていても駄目だ。自分がその気になって手を放せば、神様は救って下さるのだ」と話をしたという事であります。

◆神様は私たちに対して、素晴らしく大きな恵みを与えようとしていらっしゃるのですが、私たちのほうがいつまでも古い思いに従って、「いいえ、私はそんなに恵まれるべき人間ではございません。私はこんな者でございます。あの人の人は良いかも知れませんが、私は駄目な者です」と言う。神様のおっしゃる事を聞かないで、自分の考えを持っているのは悪しき者であり、正しからぬ者であ

【真実を見られる神】

ります。自分が一生懸命研究する事は、良いことのようにですが、逆であって、神様のお言葉に従うことが正しいことであります。

ですから神様は、「それを捨てなさい。離れなさい」と言われる——「はい」と放せば放す事が出来る訳であります。神様は私たちの真実を見て下さいます。「主は心を見る」と書いてあります。

ヒゼキヤ王様は神様から、「お前の涙を見た。だからお前の命を15年伸ばそう」と言われました。神様は私たちの真実を読み取って下さいます。俳優さんは実際にその場面になると、自分が悲しくなくてもひとりてに涙が出て来るそうですが、私たちにそんな事は出来ません。神様の前に真実に自分の思いを捨て、悔い改め、「これは悪うございました。私はこれを離れます。あなたは力を与えて下さるから、有難うございます」と信頼しますと、必ず答えて下さるのです。

日本人は単一民族(?)で以心伝心、皆まで話さなくても大体察しがついて、お互いに円滑に行く、余りはっきり物を言うことはむしろよろしくないと言うことでしょう。ところがアメリカあたりに行きますと逆であって、はっきり物を言わない人は駄目だ、何を考えているか分からない、ということになります。

しかし神様は幸いなことに私たちのような者、神様に対してなかなか発言が出来ない者ですが、「悪しき思いを捨てて、神様のお言葉に従いたい。神様に心を向けよう」と決心をしますと、心を見て報いて下さいます。これは大変感謝なことです。

◆「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される」

これは私たちの熱心が通じるという意味ではありません。熱心が通じるという事になりますと、この世の中の修養と同じことですが、私たちの熱心というより、神様のほうが熱心なのです。「何とかして、こちらにちょっとでも向かないだろうか、心が向けば本心の交わりを持てるのだが——」と神様のほうが願っているらしいです。

ルカ15:11/20朗読。これは放蕩息子の記事ですが、弟息子は父親の財産を分けしてもらいました。父が亡くなって遺産相続をした訳ではありません。弟が、「お

父さんが死んだら、どうせ兄貴と私に分けてくれるのだから、その分を今お金にしてください」と言いました。お父さんははじめ間かなかったのですが、ぜひひと泣き落としたのでしょう。とうとう分けてやりました。「もう、お前はこれっきりだぞ。兄貴の所に頼って来たりしてはいけない」「そんなこと、分かっているよ」という訳で出て行きました。

しかし放蕩に身を持ち崩して、全部使い果たし、たまたま飢饉が来たため、食べることに窮し、豚飼いに雇われて（餌箱の）豆殻を噛んで、「とてもこんな物は食べられない」——と、そこで彼は本心に返りました。初めは、「（お金がある時に振舞ってやったのに）あの人たちは何と冷たい奴らだろう」とそんな事しか考えていなかったのですが、他人のせいではなくて、自分が悪かったと気が付きました。そこで彼は本心に立ち返って、お父さんの所に帰ってこう言おう、「息子でなくて、雇い人として置いて下さい」と、立って父の所に出掛けました。

ですからお父さんにそれが分からない筈はありません。あのどら息子——あれ程自分勝手であった人間が、「悪かった、ごめんなさい」と言おうとしていると知りましたから、遠くから走り寄って、彼に接吻をして受け入れました。「最上の着物を出してきなさい——最高の御馳走を作りなさい——」という訳です。「死んだ者が生き返って来た、失われた者がまた得られた」と言ってお父さんは大変喜んだ訳であります。

私たちが「捨てよう」と決心しますと神様はじっとしておられない。走り寄って迎えて下さいます。

神様はどれ程それを待っていらっしゃるか分かりません。神様は私たちの体の細胞一つ一つに至るまで、命を与えて下さっている方ですから、私たちの心を見通して答えて下さいます。

◆「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」（イザヤ55:7）

悪しき思いを捨てて帰ると、あとは神様がなさる訳であります。放蕩息子のお父さんのように、神様は私に対して驚くような事をなさいます——「主は彼に

【約束を果たさない訳には行かない】

あわれみを施される。主は豊かにゆるしを与えられる」とある通りです。これは止めようとしても止まらない、流すまいと思っても流れて来ます——水は高い所から低い所に流れるもので、これは止められません。

神様は私たちに対して約束していらっしゃる。自らそれを違えれば、神様が神様でなくなってしまいます。憐れみを施し、許しを与えるとおっしゃったら必ず許して下さい。「私の罪の為にイエス様が十字架にかかってすべての罪を許して下さいました。私に力を与えて、こうして生かして下さいます」と信頼する者に対して、神様は憐れみと許しを与えて下さる——しかも最も大事な永遠の命を注ぐ——神様はその通りに遂げられる訳です。

「あんな悪い人間が、ごめんなさいと言っただけで許され、神様の子供になるなんて、あんまりだ」と思われることがあるかも知れません。

ダビデが部下の美しい奥さんを横取りして、その部下を激戦に出して孤立させ、戦死させました。戦況報告を受けたダビデは、「このことについては心配しないでよろしい、剣は彼をもこれをも殺す——敵も死ねば味方も死ぬ、それが戦争というものだ」と知らん顔をしていました。

それですべてはうまくいった、と思っていたのですが、神様は勿論知っておられますから、神の人ナタンを遣わして責められました。ダビデは観念して神様の前に悔い改めました。それが詩篇51篇（32篇）です。

「私は神様の前に罪を犯しました。ただ神様の前に悪い事を行いました」と告白しました。「あの婦人が人から見える所であんなことをしたから、私は誘惑された」そんな事は言いませんでした。こうして悔い改めた時、預言者は、「主はあなたの罪を許された」と言いました。その場で許されたのです。

人間の裁判は何十年という時間が掛かります。殊に再審請求などをしますと、何十年どころではない、一生刑務所に繋がれたままという人も出てきます。しかしダビデの裁きは瞬時に行われました。私たちはそれを見ると、「あれあれ、これはあんまりではないだろうか。あれだけ悪い事をしたのだからぎゅっと言わせて、それから許すなら分かるが、即座に許されるとは——」と思いますが、神様は「あなたがたの道とわたしの道は異なっている」と言われます。神様は許す

と言われたら許して下さい、さっと許す。そういう方です。

その他にもありますが、例えばイザヤ書 1章には、「あなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ」これも極端であります。真っ赤な罪を真っ白くする——何にもなかったように清めてしまう。人間は、「真っ赤なものがピンクぐらいにはなるかも知れないが、真っ白とはあまり極端ではないだろうか——自分だって、そう簡単に清くはなれない」と思うのですが、神様は許すと言われたら徹底的に許し、清めると言われたら徹底的に清くされます。そしてわざわざ念を入れて、イザヤ 1:20に、「これは主がその口で語られたことである」と書いてあります。神様の業とはそういうものであります。

パウロが許されたのもそうです。イエス・キリストに最も強く反対していた彼が、最も偉大な伝道者に変えられました。神様の思いと人の思いはそれ程違う訳です。

「そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」——ですから私は今日神様の前にもう一度、自分の姿勢を整えさせて頂きました。今まで自分がどうであったという事は止めました。

「捨てなさい」とおっしゃるのですから全部捨てさせて頂きます。「その道を捨て、その思いを捨てよ」とおっしゃるのですから、「はい、あなたはこんな者を清めて新しくして下さいますから、有難うございます——あわれみを施しゆるしを与え、道筋に従って永遠の命を得させて下さるから感謝します」と感謝します。

神様の命はどんなに素晴らしいものか、到底口で言い現すことはできませんが、神様の最高の賜物であります。ご自分の内にある命、ご自分のご性質を私たちのうちに映して下さいますのですから、驚いたことです。

◆この世の中で冗談に、「あの人は神様のようだ」などと言いますが、冗談ではないのです。本当に神様が私たちのうちに、ご自分のご性質を注いで下さる——ということは神様と一つになる——そういう所まで、私たちを導こうとしていらっしゃるのです。「求める者によいものを与えないことがあろうか」と書

【皆が聖霊に清たされたら】

いてあります。神様は私たちに聖霊を注いで、神様の中にあるものを、私たちのうちに注いで、そして神様が私たちのうちに住み、私たちが神様の中に住んで、一つとなる——私たちを憐れみ許した結果として、そこまで引き上げようとしておられます。

ですから私は今、神様の前に非常に恐れおののいています。何と恐るべき方だろうか。私に対して、もし、「そんな者は——」と言われれば、どこまでも退いて行かねばならない者ですが、無条件で、「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて主に帰れ」とおっしゃる。神様は、「ひとりも滅びないで——」と言われるのです。

「みな、そうなったらどうするのでしょうか。一体この世の中はどうなり、教会の中はどうなるのか、神様は困られるのではないのでしょうか」——それは人間の心配であります。神様はそうなさるので、一人も洩れなく、一人も滅びることなく、永遠の命を得るのです。

昔モーセの僕ヨシュアが、「先生、あの人たちが預言を始めました」と報告してきました。「あの人たちがあんな事をしはじめたら、(モーセ)先生の権威がなくなってしまうのではないのでしょうか。先生一人が神様から恵まれ、特別なご用をしておられるのに、——どうか彼らをとめて下さい」と。その時モーセは、「あなたは私の為に妬みを起しているのか。神様の民がことごとく預言者となり、聖霊に満たされることは、願わしいことである」と言って、ヨシュアを叱りました。

使徒行伝 1章を見ますと、弟子たちがイエス様の昇天を見送ったあと、エルサレムの二階座敷で 120名ばかりの人が一団となって、祈り続けたと記されています。昇天を見た人々が 500人以上でありました(1コリント 15:6) から、この時までには 4分の 1以下になった訳ですが、神様は多過ぎるから滅らされた訳ではありません。彼らは色々な試みの中で自分から離れて行ったものと思われまゝです。こうして彼らはペンテコステの日に聖霊に満たされ、それ以来使徒行伝を綴ってまいりました。

人間が神様のなさる事を心配することはないのです。神様はするとおっしゃた

ら必ずなされるし、またそのあとの事も始末をなさいます。溢れて全世界に福音が伝えられ、世界中にリバイバルが起る——これは昔から命じられたことであります。決して驚くことはないのです。私たちはそのように祈っているのですから、「さあ、そんなに恵まれたら一体どうなるのだろう。今までの生活はどうなるのだろう。あれはどうしよう、これはどうしよう」と心配することはないのです。神様は召されたならば、召されたように始末をして下さいます。

弟子たちが、召されて舟を置き、網を置き、父を置いて、イエス様に従いましたが、家族が困ったとは書いてありません。むしろその家族も祝福にあずかっています。ペテロの姑はイエス様から直接手を付けて病を癒されました。

「そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」——マリヤと同じように、「わたしは主のはしためです。あなたのお言葉どおりこの身になりますように」と従ってまいりますならば、神様は私たちのうちにどんな事をなさって下さるか分かりません。私たちの思う所、願う所よりも遥かにまさった、恐るべき事をなさって、この時代にご自分のみ心を行われるのであります。

「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」(イザヤ55:7)

この神様の前に、自分の思いを離れて、今日、憐れみと許しを頂いて、神様のみ心が、この身に行われるように求めたいと思います。ご一緒にお祈りしましょう。  
(1988.1.5 戸畑教会新年聖会 14)





## 第十五章

### 信仰の良き戦いを戦え (永遠の命を獲得せよ)

- |              |     |
|--------------|-----|
| 【信仰を覆い隠す】    | 193 |
| 【御霊の剣】       | 193 |
| 【行く間に見えてくる】  | 194 |
| 【水の上を歩いたペテロ】 | 195 |
| 【信仰を利得と心得る】  | 195 |
| 【腰をすえて祈れば】   | 196 |
| 【射程を伸ばす】     | 197 |
| 【あかし会】       | 197 |

「しかし、神の人よ。あなたはこれらの事を避けなさい。そして、義と信心と信仰と愛と忍耐と柔和とを追い求めなさい。信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたは、そのために召され、多くの証人の前で、りっぱなあかしをしたのである」(1テモテ6:11/12)

◆神様の約束は必ず遂げられる約束で、遅くなる事はありません。「おそくあれば待っておれ。必ず臨む」と言われます。事実、こんにちまで私たちは様々な祈りに答えられ、神様の約束を遂げられてまいりましたが、それは、私たちが思うところ、願うところよりも早かったのではないのでしょうか。気が付かないうちに変って、あとから、「あ、そう言えば神様の前にあんなお祈りをしていたが、それがすでに実現して、自分はその中にいる」という事がしばしばあります。

神様がなさる事は――時また期も私たちは知る事が出来ないので、期待していない時に、俄然答えられたりいたします。ですから私たちは絶えず信仰の戦いを戦い抜かなければなりません。サタンは私たちの信仰をおおい隠そうとして働いています。

神様のお言葉は必ず成る――もうそこに成っているのに、成っていないように見せたり、必ず成るのに、「いや、もうお前は駄目だ」と言って来ます。自分で悪魔にまけまいとしても、私たちよりも遥かに悪賢く、強いものであります。正面から来れば防ごうとも考えますが、とんでもない所から来て、いつの間にか潜り込みますから、自分の知恵で頑張ってもはじまらない訳であります。

◆エペソ6:10/17 朗読。17節までが神の武具(ハード)であります。そのあとになりますと、武具を纏って、自分たちはどうしたらよいかという戦い方(ソフト)になります。

ここには真理、あるいは正義など、神様の武具が色々ありますが、みな防ぐものばかりで、攻撃するものは、17節の「御霊の剣、すなわち、神の言」これだけです。神様のお言葉を取って、悪魔に勝つことが出来るのです。

イエス様も荒野で悪魔に試みられた時に、御言の剣を持って悪魔を攻められました。「人はパンのみにて生きるものにあらず。神の口よりいずるすべての言によると記されたり」と、第一に勝たれました。第二には、「主なる汝の神を試み

【信仰を覆い隠す】

【御霊の剣】

てはならない、と書いてある」と勝たれました。第三には、「主なる汝の神を拝し、ただこれにのみ仕うべし」と、いずれの場合も御言をもって退けられました。最後に、「サタンよ退け」と言われた時に、サタンは消え去り、御使が来て仕えたと書いてあります。

私たちが神様の前に、信仰の戦いを戦う時、「これはいけない、こんな事を考えてはいけぬ。自分は駄目だな、どうかしなければいけない」と、だんだん退く訳ですが、それはサタンの付け目であって、御言の剣を振り翳すまでは、悪魔に決して勝てないのです。神様の御言に信頼してまいりますと従わせて下さる。それはこちらが頑張るのではなく、神様が、「こうしなさい」とおっしゃることに、「はい」と従いますと、そうさせて下さるのです。「神の言を取りなさい」とおっしゃるから、「はい、神様、御言を下さい」と行きますと、それで勝利です。

【行く間に見えてくる】 ◆迫害を受けて、どこかに連れて行かれ、何かを語らねばならぬ時、思い煩わなくてもよろしいと書いてあります。なぜなら御霊が、私たちに御言を与えて語らせて下さる。だから委ねて行きなさい——これは、「どうにか成るだろう」というのではなく、御霊が語るべきことをはっきり授けて下さると書いてあります。

ダニエルが幻を見て王様に説き明かす所がありますが、はじめダニエルは不思議な幻の全容を見た訳ではなかったと思います。勿論その意味も分らなかったに違いない。「神様が深妙、秘密の事をあらわされる」——神様はどんな秘密でも現す事がお出来になるという信仰が与えられた時に、彼は立って、「王様、私がお示ししましょう、説き明かしますから」と言って支度をして出掛けて行く。

出掛けて行く間にも、どんどん神様にお祈りして待っていますから、だんだん見えてきて、王様の前に行った時には、そのすべてが見えてくる、説き明かしを語っている間にだんだんと見えてきて、終わった時には神様の奥義が開かれ、「王様、あなたは金の頭で…その次にはこんな国が起り…こんな国が起り…そして、最後はばらばらになって、山から転がって来た大きな岩が全地に満ちるよう

に、イエス・キリストの国が来る——神様のご支配がやって来るのです」と、彼は申しました。

◆彼は、望み得ないところを、なお望みつつ信じたのです。与えられる事を期待しつつずっと行く。よく会議の時にそういう事があります。会議に出て、どういふ事を言って、どうするという事はまだ決まっていない。部下が走って来て、廊下で歩きながら耳打ちをする。「ああ、そうか、そうか、そういうことか。それでは」と考えながらずっといきますと、顔ぶれが見えて、あの人がこう言った、それでは私の言う事はこれだ——そうなって行きます。

神様は、人間の計画や段取りよりも、もっと素晴らしい方であって、御霊の剣をもって、悪魔に勝てせて下さるのも、どっかり座って、すっかり確信が出来た、それではいこうか——と言う事ではなくて、アブラハムの信仰のように、「望みつつ信じ」また、癩癩の子供のお父さんのように、「私は信じたい——主よ信じます。信仰のない私をあわれんで下さい」と飛び込む。

私たちの信仰は、すっかり理解できて、これで大丈夫というものではなく、望みつつ信じ、信じつつ進んで行く、そして神様の御言を期待して待っていますと、その通りになって行く訳であります。そこを悪魔は、「まあ、そう慌てるな、しっかり落ち着いて、確信が出来てから行ったほうがいいじゃないか。世の中は何でも石橋を叩いて渡る、それが一番確実。遅いようでも、それが確かなのだから」などと言うかも知れません。ところが神様はそうではありません。「従うのならすぐ従いなさい」とおっしゃいます。

ペテロが水の上を歩いているイエス様を見て、「イエス様、あなたでしたか。では、あなたの所に行かせて下さい」「来い」と言われるが早いか、どんどん水の上を歩いたのです。そして、彼は途中まで行って波を見ると、「あ！」と言って沈みました。しかし彼はイエス様に手を取って頂いて舟に救い上げられました。御言に従って行くならば、従わせて下さるのです。「来い」と言われたら、水の上でも歩けるといふ事を、彼は体験しました。

◆「御霊の剣、すなわち、神の言を取りなさい」とおっしゃる、神様の言葉を取ってまいりますならば、決して悪魔にやられる事はありません。

【水の上を歩いたペテロ】

【信仰を利得と心得る】

「もし違ったことを教えて、わたしたちの主イエス・キリストの健全な言葉、ならびに信心にかなう教えに同意しないような者があれば」(1テモテ6:3)

「信心」というのは、恭しくという意味です。お言葉に恭しく従う、恭しくと言っても、物静かにという意味ではないと思います。ある意味では荒々しくグイッと踏み出して従って行くのですが、それに同意しないような者は高慢で何も知らない人であるとあります。

5節には、「また知性が腐って、真理にそむき、信心を利得と心得る者どもの間に、はてしのないがみ合いが起る」——昔も今も、お金、あるいはいわゆるご利益を信心と思う人がいる訳ですが、そういうものが起って来る。ある人々は不道徳、不品行に落ち込んで行く。だから、「誘惑と、わなに陥る——無分別な様々の情欲に陥る」と書いてあります。人間が落ちて行く所は大体決まっています。だから、神の人であるあなた(テモテ=これは私たちです)はこれを避けなさいと書いてあります。

◆11節、「義と信心と信仰と愛と忍耐と柔和とを追い求めなさい」——神様の前に、自分がどんなに尊い救いにあずかり、罪を許されて、神様の前に義なる者として受け入れられたかが分かりますと、私たちは神様に恭しく従う、また、信仰を持って仕えさせて頂く。また、「愛と忍耐と柔和」とありますが、神様のご愛を知ると、多くの人々に対して忍耐が出来るようになります。

「柔和」とは、ヒリビの手紙に、「あなたがたの寛容をみんなの人に示しなさい。主は近い」とあります。神様が近く約束を成就して下さる、自分はどんな身分であるかと言う事を知りますと、主から忍耐されたように忍耐します。今までのようにとげとげして、「あなたは信じないから！教会に来ないから！」と言うのではなく、柔和をもって、あくまで従うべき方には従い、陰では神様の前に忍耐をもって祈ります。

神様の約束は決して遅くなる事はなく、必ず遂げられるのですが、その時と期は分かりません——それは神様がいい加減な事を言っておられる訳ではないのであって、必ず遂げて下さる。それは今まで私たちが体験してきたところですが、今後についても、神様は約束を遂げられる——決して遅くならないのです。だ

から、私たちは委ね切って、腰を据えて、何十年でもという忍耐をもって、腰を据えて祈ってまいりますと、案外早いかも知れないのです。

「早く、早く、まだですか、まだですか。ああ、もう駄目だ」と言っていますと、かえって遅くなるかも知れません。ですからパウロはエペソの教会の人々に、「わたしは主とその恵みの言葉に委ねます——神様は必ず約束を遂げて下さるから、あなたがたを神様の手とみ言葉に委ねます」と言って別れました。私たちも今、神様の言葉を待ち望んで行く、あくまでも神様の前にお委ねして、忍耐をもって待ち望んでまいりたいと思います。そうするならば、神様は一つ一つの出来事を通して、約束は必ず遂げられるという体験を積ませて下さいます。

◆私たちがやがて神様のみもとに立って、永遠の命に入る——具体的な永遠の命に入るということは、誰もこの目で見る事は出来ませんが、地上で一つ一つ体験を積み重ねてまいりますと、それがはっきりしてまいります。だんだん（大砲の）射程を長くして行くと、遠い所に向けて弾を打っても、必ず届くという事が分かってきます。私たちは今、神様の前に忍耐をもって待ち望みたいと思います。

【射程を伸ばす】

今晚も神様は、私たちに感謝の機会を与えて下さいました。「永遠の命を獲得しなさい。あなたは、そのために召され、多くの証人の前で、りっぱなあかしをした」とあります。

今晚このあと、あかしをしますが、あかしをする人もしない人も、今年の聖会を通して、神様の前に、「そうです。私はここから、神様の前にこうして決断します」と心に定めますなら、神様はその決断を立派なあかしとして認めて下さいます。ですから、たとえ何が出来なくても、何が言えなくても、神様は心を見、涙（真実）を見て助けて下さる方ですから、この方の前に心を変えて従って行きたいと思います。ご一緒にお祈りしましょう。

===== [あかし会] =====

（A姉）◆主人は、「そんなにまでして」と言いましたが、私は信仰が消えかかっていましたから、この時を狙っていました。◆「見よ」と2度までも言われ

【あかし会】

ているのに、私は踏み出すことにためらいを感じ、神様の恵みをいたずらに受けていました。◆戸畑教会に泊めて頂いて、私にも帰る所があると分かって本当に感謝です。神様とやわらく事が出来ます。◆私が恵まれる事によって、家族の者が祝福を受けると、確かな保証を頂きました。有難うございました。

(B姉)◆「私に求めなさい」「呼びなさい」と焼けるように強く迫って下さる主のご愛に、今一度厳粛な気持ちでおります。◆蟻人形のように冷たい者であるのではない、主は必ずご自身を現して下さるという事を知り、感謝に耐えません。◆豊かに許しを与え、憐れみをもって、帰るのを待つて下さる主にただ有難うございますと、頭を下げるのみです。◆今年、いよいよこの方を尋ね求めて、主を知る一日一日でありたいと願います。有難うございました。

(C姉)◆全能者なる神にお会いする道にあずかる者とされている事を心に刻んで頂きました。◆私たちに対し、自発的に応答するよう愛をもって語って下さるのに、自覚が足りませんでした。◆箴言8:36、「私を得る者は命を得る、主から恵みを得る」真にその通りでした。◆神様に帰る者に憐れみを施し、豊かに許しを与えて下さる事を、もう一度感謝しました。有難うございました。

(D姉)◆本心に返らねばならない事を、強く教えられました。

(E姉)◆弱い信仰の者ですが、この教会は家庭的なので感謝しています。◆夜、一人で出るのは、生れてはじめてです。しかし、自覚をもって出なければと決断致しました。感謝です。主人と息子の間の関係で戦いがありますが、涙は教会で出したら良いと思って来ました。

(F姉)◆商売の事について――出来ないのが当然で、少しでも与えられたら感謝すべきでした。思い上がっていたことを本心から悔い改めました。明日から開店元年のつもりで始めたいと思います。◆頭ばかりが先行して歩めなかった者ですが、肩の力を抜いて愛の中に止どまりたいと思います。◆しかし、神様の前には身を乗り出して、たとい厚かましいと言われても従って行きたいと思いません。

(G姉)◆神様が原点を示して下さいました。これによらなければ生きて行かれません、握りしめて行けば決して離れる事はないと思います。すべてに当は

めて行く事を考えました。感謝でした。◆E姉の証を聞いて感謝しました。喜んで忍耐させて下さいましたが、神様はこんな大きな事をして下さいました。◆先生との中垣を取り除けて下さったと思います。もっともっと裸になって自分を出していきたくと思います。◆主人の入退院との関係について——見える所で一喜一憂するのは間違いと、あまり気かけずにいましたら、ずっと聖会に出る事が出来ました。◆神様は新しい事をなさいました。長い祈りに答えて、主人が全くタバコをのまなくなりました。

(H姉)◆5日まで、お客が来ないようにしていました。すると主人が「お前の為に客を呼べない」と罵っていました。しかし、私は「明日から呼ぶ」と言って出て来ました。◆私は自分の事が頭に一杯で、人の為にお祈りが出来ませんでした。しかし、お祈りしなさいと言われて、ぼつぼつ出来るようになりました。◆商売の難しさに悩んでいました。しかし、今年、み言葉で勇気が出ました。イエス様がついていて下さるから大丈夫と信じます。出来なくなったら、「出来ません」とイエス様に言おうと思います。◆霊感譜16番を味わいました。私は願う事ばかりが多かった事を反省します。この歌をよく覚えておきたいと思います。

(I姉)◆ひとり子を賜ったほどの愛——言葉につくせない程の驚きです。◆さばき、のろいの恐ろしさは、「そうならないように」という神様のご愛のあらわれであり、それだから、神様のあがないの尊さ、深さを身にしみて感じ感謝です。

(牧師)◆聖会の為に静まっていると、神様の大きな恵みの反面、時を失い、いたずらに受ける事が、どんなに恐ろしいか迫られました。◆そこで、恵みのみ言葉を祈り求めた時に与えられたのが、この三つでした。◆数回先の集会までは見えますが、その先は分かりません。私の心にあった事が大きく変更された事が、しばしばあります。全く神様のご計画でした。(おわり)

(1988.1.5 戸畑教会新年聖会 15)



## 基督伝道隊 戸畑教会

【沿革】 基督伝道隊は、英国人宣教師B. F. バックストーン師の信仰の流れを汲むもので、1923年柘植不知人師によって設立されました。その後、福岡→八幡→戸畑と発展し、1986年4月、当教会が設立されました。

### 【定期集会】

- ◆ 日曜学校 日曜日 8時半
- ◆ 日曜礼拝 日曜日 10時
- ◆ 伝道会 日曜日 19時半
- ◆ 第一祈禱会 水曜日 10時
- ◆ 第二祈禱会 水曜日 19時半
- ◆ 金曜会 金曜日 10時
- ◆ (禱告会) (金曜日 19時半)
- ◆ 早天祈禱会 火～土曜日 6時
- ◇ テレホン聖書 (終日) 881-1059

### 【不定期集会】

- ◆ 年初に新年聖会  
・88年は 1月 1-5 日  
・毎日 10時 14時 19時
- ◆ クリスマス礼拝
- ◆ 復活節礼拝など

---

- ◆ 聖餐式 ◆ 洗礼式
- ◆ 結婚式 ◆ 幼児祝福式
- ◆ 葬式 ほか

## === 【出版物】 ===

- ※テレホン聖書メッセージ集 (1) (1985.6-1986.5 放送分)
  - ※テレホン聖書メッセージ集 (2) (1986.6-1987.5 放送分)
  - ※私の使徒行伝 (1) 1986. 4- 6月
  - ※私の使徒行伝 (2) 1986. 7- 9月
  - ※私の使徒行伝 (3) 1986.10-12月
  - ※私の使徒行伝 (4) 1987. 1- 3月
  - ※私の使徒行伝 (5) 1987. 4- 6月
  - ※私の使徒行伝 (6) 1987. 7- 9月
  - ※私の使徒行伝 (7) 1987.10-12月
  - ※私の使徒行伝 (8) 1988. 1- 3月
  - ※私の仕える主は生きておられる (1)
  - ※私の仕える主は生きておられる (2)
  - ※私の仕える主は生きておられる (3)
  - ※私の仕える主は生きておられる (4)
  - ※私の仕える主は生きておられる (5)
  - ※戸畑教会1987年新年聖会記録 (12回)
  - ※戸畑教会1988年新年聖会記録 (15回)
- ほぼ全集会の  
説教概要集  
  
 礼拝の録音  
を文章化  
  
 ほぼ全文を文章化  
" "

【友好教会】 北九州市／基督伝道隊本部／八幡前田教会  
福岡市／基督伝道隊福岡大濠公園教会      その他／出張伝道地

※当教会は、エホバの証人(ものみの塔)、モルモン教会、統一協会(世界基督教統一神霊協会)とは一切関係がありません。

伊規須 太郎 (いきす・たろう)

1926年(大正15年)福岡に生まれる

基督伝道隊戸畑教会 牧師

1988年新年聖会記録

---

1988年 4月 1日発行

著 者 伊規須 太郎

発行所 基督伝道隊戸畑教会出版部

〒804 北九州市戸畑区小芝2-1-13

Tel 093(882)9266

---

「テレホン聖書」093(881)1059テンゴク

